平成31年6月1日発行第16巻第3号通巻119号

cover illustration by 草上明

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2019 06 Volume.106 DIGITAL EDITION

18 未満

今号の特集 Special Fetishes Series

エロ・ツンツン

欲しいモノをGETするためエロい指示でもこなしてみせる！

小説メインで原点回帰！

頭からカラー小説2連発&
1作30ページ超の作品3作！

★話もエロも充実！中編3作
羽沢向一×らら8
下山田ナンプラーの助×恋々
高岡智空×魅李

★熱く濃い連載&カラー小説
黒名ユウ×ゆか
裏側さん×ほろりら
峰崎龍之介×草上明
上田ながの×弥弛
黒井弘騎×三色網戸。
でぃふぃーと×高浜太郎

★たっぷり濃厚エロマンガ
翡翠石
アヘ丸
ばふぇ
白う～凪い

カラーピンナップ COLOR PINUP
大林森
み皮
つちみや
あさなつくね
うるし原智志
草上明

表紙&ピンナップテレホンカード応募者全員サービス

試し読み版

巷を騒がす VTuber
深層の令嬢「DWU」がモノ申す8つの○○○

あとちょっとしたお知らせあります。

ULTIMA GIRL
アルティマガール
悪夢の診察調教ミッション
今号は小説ページドカン！と増量♥
ドクターストップでヒーロー引退!?
少女は自分の健康を証明するため、
陰謀のエロ診断に挑む！
小説／黒名ユウ
NOVEL
挿絵／ゆか
ILLUSTRATION

「助けて誰か！　ママが……ママが！」
足を挫いて歩道の片隅でうずくまる若い母親を庇おうと幼い男の子が小さな体を覆いかぶせる。
「ゲヘゲヘ！　ぶちゅっとトマトにしてやんぜ……」
母子に迫るのは身の丈3メートルはあろうかという巨漢だ。浮かべているのは万能感に酔う下卑た笑み。
「蟻とか猫じゃあもう満足できねぇんだよおーっ！」
ドラム缶ほどもある大きな拳が振り下ろされる。
SKASH！
しかし、殺戮は果たされなかった。立ちはだかり、交差した二本の腕のみで狂暴な一撃を受け止めたのは――なんと年の頃17、18の小柄な少女だった。
末広がりのショートボブヘアー。まだあどけなさの残る顔に、くっきりとした意志の強そうな眉。
ボディにフィットした白いヘソ出しコスチューム。胸に描かれたアルティメットスターと、たなびくマントは誰もが知る最強ヒロインのトレードマーク――
「アルティマガールだ！」
男の子が顔を輝かせる。
「よく頑張ったわね。もう大丈夫よ！」
振り返った彼女が勇気づけるようにニッコリ笑う。
それは虚勢でもハッタリでもなかった。
めり込んだブーツの底が物語る本気で放たれた数トン近い衝撃を、彼女は体ひとつで受け切ったのだ。
「てめえ、よくも邪魔しやがったなぁ！」
逆上した巨漢が再び襲い掛かる。が、少女は動じず、深く息を吸い込んだ。たわわな胸が更に大きく膨らむ。
「アルティメットお……ハンマーパンチ!!」
KRAAAAAAAAAAAAAAAK!!
ピンと張った健康的なヒップを震わせて叩き込まれる渾身のストレートナックル。そのたった一撃で大男は白目を剥き、どうと地面に崩れ落ちた。
「ちょちょいのちょい、なんだから！」
決めゼリフに歓声が湧く。避難し隠れていた人々が取り囲み、我先にとスマホでその勇姿を撮影する――スーパーヒロイン、アルティマガールの活躍は今日もSNSやニュースを賑わせるのだった。

「真琴くん、先日はまたお手柄だったようだね。でも、ああいう危ないのばかりが相手だと心配だな」
昼下がりの保健室。
白衣の青年ドクターが複雑そうな表情を見せる。
「へいちゃらです、先生。みんなの幸せのためなら、私、どんな危険なことだって！」
診察用の丸椅子にちょこんと座って快活に答える少女が体操着代わりに身につけているコスチュームの胸には星のエンブレム。そう、彼女こそアルティマガールこと、饗天満真琴だった。
「人々の幸せを願うキミの想いは素晴らしいけれど、自分の身体のことだって考えなくては。いくら超次能力者といったって、怪我もすれば病気だって……」
イケメン医師の口調が説教めいたものになる。
超次能力者とは常人離れした力を持つ特殊な人間のことだ。古来より人々に紛れ潜んできた彼らが公の存在となって久しい現代。
国際特殊機関《H.E.R.O.》によって能力を測定・登録された超次能力者はその力を社会貢献に使うよう指導を受ける。未成年には一貫教育課程まであった。
真琴もまた、能力者だけが集められるこの学園の高等部に通う二年生だ。
「でも、そういう時のために先生がいるんでしょ！」
屈託のない彼女の態度に医師は肩をすくめた。
「怪我や病気をしないよう注意することも僕の仕事なんだがね……さて、お喋りはここまでにしよう」
今日は学園の一斉身体測定の日。
といっても、学内でも珍しい「カテゴリーS：地球外血縁由来型」能力者である真琴は専門医に診てもらうため保健室は二人だけの貸し切り状態だった。
「身長158センチ、体重は49キロ……と」
「女の子の体重を言うなんて信じられない！」
測定値を口に出しながらカルテに書き込みをされ真琴が口を尖らせる。無論、それは本気ではない。
「ハハッ、言うようになったね！　お年頃かな」
「私じゃなくて、先生のデリカシーの問題です！」
わざとらしく頬を膨らませて応戦する。
ドクターとは長い付き合いだし、今更、女であることを意識する間柄ではないのだが、やっぱり少しドキドキしてしまう。それを悟られないよう、冗談めかして怒ってみせたというのが本当の所。
特に今、このタイミングでは――
「それじゃ次は胸囲を測るよ」
そう、これだ。バストサイズの測定。
しっかりと乳房が発育してしまってからは、これを異性に測定されるのは抵抗があった。
――エッチなこと、考えないで下さいよ！
（って言ったら逆に意識しすぎって思われちゃう？）
そんな乙女心の独り相撲の末、真琴は黙っていることにし、医師に背を向けると脇を広げた。
ふっくらとしたバストトップに優しく指を留め置いて、メジャーがくるりと巻きつけられる。その手つきは普段通りの職業的無感情なもの。
しかし、触れられた部分から伝わる男の温もりと圧には、どうしても落ち着かない気分にさせられる。服の上から乳房に食い込む巻き尺もいやらしい。
（先生、何を考えているのかな……？）
想像するとますます恥ずかしかった。
何故なら、昨年のヒーロー活動資格取得時に誂えたばかりの彼女の衣装は、たった一年の間に胸の部分がパツンパツンとなってしまっていたからだ。
真琴は心の中で祈った。
（おっぱいが大きすぎるとか思われませんように！）
「……おっぱいが大きすぎるな」

著者近況　男のくせに女の子にちんちんの大きさで負けて雌になっちゃうことにかけて右に出る者はいない下山田ナンプラーの助先生のツイートが最近の癒しです。みんなもフォローして女の子にちんちんの大きさで負けて雌になろう！

「先生っ!!?」
そのものズバリを言われて思わず胸を覆う。
まさか、まさかだ。あり得ない。いくら先生でも！
抗議しようと顔を真っ赤にして振り向くとしかし、医師は思いがけず深刻そうな顔をしていた。
「バスト95。昨年と比べてひとまわり以上の成長……」
セクハラでも冗談でもない真剣な口調で、カルテを見比べている。
「発育が急激すぎる。もしかすると体内のアルティマパワーのバランスが崩れているかもしれない」
「ええっ!?」
アルティマパワーとは真琴の体内を循環する超星間エネルギーである。見た目は普通の女の子でありながら発揮される超耐久力と超筋力の秘密がこれだ。
「暴走も考えられる。危険だ」
「暴走……!?」
それは超次能力者にとっての悪夢だった。
人並み外れた力に酔って、あるいは力の制御ができなくなって理性を失い社会に害をなす。
たとえば先日の巨漢もそうだ。
「カテゴリーB：突然変異型」と判明したあの男は、突如手に入れた能力に呑まれた結果、ああなった。
「私がそんなこと……」
自分が正気を失って街を破壊し、そこに暮らす人々の幸福を奪う存在になるなど信じられない。
しかし、強大な力は容易に理性を狂わす。真琴はこれまでの戦いと教育を通してそれを学んでいた。
「ヒーロー活動はドクターストップにするしかない」
医師の宣告は更なるショックだった。
先祖返りのパワーを生まれつき発現させた彼女は幼少の頃からこの学園で正義の心を鍛えられてきた。それに、人々の幸福を願う気持ちは元々人一倍強い。
銀河の彼方アルティマ星雲からやって来た祖先がどんな想いで地球にとどまったのか。それはきっと、この美しい星と、そこに暮らす人達を愛したから。
その血を受け継ぐ自分もまたそれを使命としたい。
それなのに――
「ドクターストップって……治るんですか、私」
青ざめて呟く彼女を見て、医師が優しく言う。
「ごめん、心配をさせてしまったようだね。大丈夫、特別な検査をして異常がなければ何の問題もないよ」
「して下さい！　私、暴走して誰かを傷つけたくない！　みんなを守るアルティマガールを続けたい！」
「そのために健康診断はあるんだ。安心して」
ドクターが真琴の頭にポンと手を置いて励ます。
「少々辛いだろうが、僕の指示通りにできるね？」
「くっ……くふぅっ！　んんっ……」
苦し気な呻きを漏らす真琴。
丸椅子に座る彼女がその口に咥えさせられているのは特別性の太いカテーテルだった。
「まずはパワー撮影用の特殊バリウムを飲んで貰う。体内に均等にいき渡らせるため、身動きは厳禁で」
そうは言われても、肝心のそのバリウムとやらが全然出てこない。管の先にわずかに滲み漏れる液体の苦みは感じられたが――
「申し訳ない。どうもチューブの調子が悪いようだ。真琴くんが自分で吸い出してくれないか？」
「自、自分れ、れすか!?」
「できるね？」
そう問われれば、できると答えるしかない。
人々の幸せを守るためなら、なんだってへいちゃらと笑ってみせる。それがアルティマガールなのだから。
「ふぁ、ふぁいっ！」
おぼつかないながらも元気に答え筒先をちゅうっと強く吸引する。
薬液の保温のためだろうか、カテーテルは生温かい。そして、真琴に吸われるとビクンッと震え、舌の上にドロリとしたものが溢れ落ちて来た。
それは思わぬ熱を帯びており、しかも生臭かった。つい舌を引っ込めそうになったがグッと堪える。
「んふぁっ……熱いの、出てきまひた……」
「いいぞ。悪いができるだけ短時間でバリウムを体内にいき渡らせないと効果がない。頑張ってくれ」
つまり、もっと強く吸えということ。
「んんっ、ちゅ……ちゅううっ……んちゅっ……」
そうすると唇をすぼめざるを得ない。頬張るようにして管全体を舐め、薬液の漏出を促す。
「そうだ。うん……とても良いよ……もっとだ。歯を立てずに舌でカテーテルの吸い口を緩めてみてくれ」
「こ、こうれすか……？」
勝手がわからず、おずおずと舌を持ち上げ、ちょろちょろとくすぐるように経口管の裏筋を突いてみる。
「そ……そうだ！　上手だね。ああ、とても良いよ」
どぷっ、どぷぅ……！
薬液の流れが良くなったので、真琴は胸を撫でおろした。そしてそのまま、ネバつく熱液を飲み下す。
「いいぞ。しっかりと飲んで……あとは、もっと舌全体を絡めるようにしてくれないかな」
「んくっ、んくっ……ふぁい……やってみまふ」
管の中から呼び込むように舌を伸ばしてねぶる。すると、勢いよく粘液がびゅっびゅっと吐出される。
「ああ、その調子だ。自分でも色々と工夫してくれ」
青年医が気持ち良さそうに上擦った声を出す。だが、吸引に懸命な真琴はそのわずかな異常に気づかない。
彼の目は眼鏡の奥でゲスに光っていた。
（くうぅっ、堪らんな、このたどたどしい舌使い！）
真琴から見えないよう巧妙に隠されたカテーテルの根元は医師の股間にあった。今吸い出されているのはバリウムなどではなく精液だった。
そうとは知らぬまま、献身的な初フェラチオを捧げるスーパーヒロインの姿を見下ろし愉悦するこの

著者近刊 『VTuberを始めた学級委員長（清楚）がエロすぎて困る』『俺とエッチをする権利書が出回ってラッキースケベが無双すぎる』『貞操観念が逆転して童貞女子がエッチに飢えた学園』 好評発売中！

男――その正体は反社会性超次能力者、ドクター・マッドスタリオン。長年の担当医などではなかった。《H.E.R.O.》の目を逃れ、登録こそされていないが、分類するなら「カテゴリーA：超知識追求型」だろう。

常軌を逸した研究の果てに禁断の知識を手に入れた存在。高い知能で社会に紛れ潜み、良心の呵責なく私欲を追求するサイコパス傾向も強い危険なタイプ。

パワーファイターのアルティマガールにとっては最悪の相性の敵であった。

人体に関する超知識を持つ彼は、開業医という表の顔を利用して女性患者を毒牙にかける変態だった。

（素晴らしいぞ！　さすがはアルティマガール。強さ、正義感、無垢な愛。これまでに騙して診察調教してきた女どもとは比べ物にならん。極上の獲物だ！）

本物の担当医は既に捕えて処分。そして顔面を整形して成りすまし、学園へと乗り込んで来たのだ。

「んぐっ、んふう……先生、もっとれふか……」

問いかける真琴の目つきが心なしかトロンとしたものになっている。嚥下したザーメンに混入されている媚薬成分が細胞内に浸透しつつあるのだろう。

それはやがて彼女の全身を性感帯へと変えるはず。どんなパワーも快楽の前には無力。そうなってしまえば、無敵のアルティマガールといえど思いのままだ。

「ああ、その調子でペロペロしゃぶるんだ」

マッドスタリオンは頷いてみせ、新しい指示を下す。

「次は胸をはだけてもらうよ」

「……っ!!」

「エネルギーの流れを特殊カメラで撮影するためだ。電磁波を当ててバリウムに反応させなければ」

そう言って先端が吸盤状の電極コードを見せる。

「僕は取りつけの作業をしなければならない。自分でコスチュームをたくし上げられるね？」

「そんな……む、胸を……自分で？」

顔を赤らめて逡巡する純真な少女。だが、検査というからには、ある程度の覚悟はしていた。

「わかり……ました」

睫毛を伏せ、その可憐な指を服の下に入れる。

「あ、あんまり、見ないで下さい……」

下方から徐々に露出する乳房の丸み。薄桃色の可愛らしい乳輪。眩い巨乳の肉弾が白日に晒される。

「うううっ……」

思わず漏らした呻吟は羞恥に耐えかねて。それとも、媚薬のもたらす快感によるものか。

（くくっ、無垢なまま堕とす。これがその第一歩！）

マッドスタリオンは無防備な乳房に手を伸ばし、ぷっくらとした乳首の清拭を始めた。

「くすぐったいかもしれないけれど、動かないで」

「んっ、ふあっ……ふあぁあんっ……」

消毒用アルコールの沁みたヒンヤリするガーゼの往復。乳房に広がる甘い痒み。真琴は痙攣が抑えきれず裸の上体をビクンビクンと何度も跳ねさせた。

それでも「動いてはいけない」という指示を守ろうと耐える彼女の口中で今度はカテーテルペニスがにゅるにゅると暴れ、淫靡な粘液をまき散らす。

「ごぷっ、んふっ……あふっ、せ、先生っ……」

「もう少しだ。頑張って！」

「んはあっ……ううっ、ちゅううっ、んちゅううっ」

快感を堪えるために集中しようと強まる吸引。熱心に絡みつく舌が怪医の肉管を悦ばせる。

「いいぞ、もっと！」

マッドスタリオンは改造ペニスを震わせながら、透明なゼリーを真琴の胸に垂らした。

「ひゃあぶっ！」

「動いては駄目だ！」

ゼリーの冷たさに身を引こうとした彼女を叱責し、そのまま白い胸肉全体にゲルを塗り広げていく。もちろん素手で。

「す、すいません。で、でも……」

抵抗を示す真琴の表情はしかし、柔肉を揉み込まれると次第に悦楽に耐える苦悶へと変わっていく。

「ふぇ、先生っ……ああんっ……ひふっ」

それは彼女にとって初めての感覚だった。

ぬるぬると肌を滑る男の指にいやらしく乳房を歪ませられると、もっと強い刺激が欲しくなってしまう。

女体の反応を探るように、怪医の手はときに焦らし、ときに意表を突くように肉の上を這い回った。

「あっ……あ、あっ……駄目れすっ！　らめっ……変な感じ。うふぅぅ……ひぅっ、ふくんぅっ！」

おっぱいの奥がムズムズして身悶えしそうになる。

真琴は街で暮らす人々の笑顔を思い浮かべて衝動を抑え込もうとした。こないだ助けた男の子、涙を浮かべて感謝してくれたお母さん。みんなの幸せを守るため、この検査をしっかりと受けなければ！

マッドスタリオンは微塵も遠慮なく真琴の両乳を鷲掴みに握り締めては搾り、淫悦を与え続ける。

（最高の触り心地だ……指の先がすっぽりと埋まるこの柔らかさ。感度も上々。これからもっと敏感で、いやらしいエロ乳に躾けてやるぞ！）

乙女の乳肉はふにふにと容易く形を変え、ゼリーにべっとりと覆い尽くされたその表面は輝いていた。

「さあ、電極を取り付けていくよ」

仕上げだ。そこから発せられるのは発情性生体電磁波。浴び続ければ交尾しか頭になくなる代物だ。

それをペタリ、ペタリと万遍なく。

「パワーの経路に沿ってつけないと意味がないからね。僕の手元が狂わないようにじっと我慢して……」

「んふぁ……ふぁぃ……」

真琴はぐったりとして、もう息も絶え絶えといった有り様だった。それでも健気に胸をはだけ続け、カテーテルからの注入液も受け入れるのだった――それが肉を狂わす悪魔の産物とも知らずに。

「よし、取りつけ完了だ。確認するよ」

黒髪退魔士がドスケベ肉便器に堕ちるまで
守るべき人を救うため
麗しき退魔師は
どす黒い肉欲に身を捧げる！
作家本誌初登場！
小説／NOVEL 裏側（うらがわ）ざん
挿絵／ILLUSTRATION ほろりら

――好ましくない状況に陥ってしまった。
カーテンの隙間から射し込む薄い朝陽に、少女の瞳が寂しく照らされている。普段は凛々しい雰囲気のある瞳も、今だけは落ち込んだ様子だった。
少女が見下ろしているのは、想いを寄せる彼氏である。目を閉じて眠っている。苦しそうな顔ではないが、少女には、本来彼に在るべき『生気』が着々と失われていることが分かってしまう。
静かに、ゆっくりと、蝕まれているのだ。
「――――」
このままでは、彼は永遠に目を覚ますことはない。
「――祐介くん」
大切に想っている彼の名をぽつりと呟く。
そして彼の冷たい頬に手をやり、撫でた。
些細な所作。それだけでも彼女の麗しく艶やかな黒髪は流麗に踊り、室内に甘い香りがゆったりと漂い始める。密かに、陽光の熱を孕みながら。
少女の名は時野有葉。世界に潜む魔物を退治する能力――『退魔の能力』を代々受け継ぐ家系の少女であり、時野家における正当な後継者。所謂、退魔士である。
そして目の前でとある魔毒に侵されているのは、有葉の彼氏であり、退魔活動の支援者でもあった浅井祐介。
有葉にとって――世界で最も大切な人。
他人を寄せ付けない風格を持つ有葉に、これまで恋愛経験などなかった。友人関係もほぼ築いていなかった。そんな人生の中で、浅井祐介は初めて本気で好きになった人であり、今となっては誰よりも守るべき存在なのだ。
「う、く……っ……」
祐介が寝転がったまま身体を軽く捩り、呻く。
「――っ。大丈夫？　苦しい、の……？」
有葉は上ずった声で心配する。
急なことに慌ててしまった。もし学園の連中にこの様子を見られたら「時野有葉らしくない」なんて言われるだろう。それほど普段は真面目で冷静で、実直なのだ。
「――――」
取り出したハンカチで祐介の額の汗を拭く。
先程までとは違い、微妙な苦痛を滲ませる寝顔。有葉はそんな祐介の表情を見て、奥歯を噛みながらこう言った。
「ほんとうに、許さない……」
そう――浅井祐介は、『魔物の毒』に侵されているのだ。
その魔物というのが通常のように自然発生したモノではなく、とある男の明確な悪意によって産み出された厄介な魔物。意図的な攻撃ということになる。
「くッ……」
有葉の努力により、魔物を産み出した『敵』の男の名は判明している。
――三島隆文。
有葉と同じ学園に通う、同級生の男子生徒だ。
一言で言えば、女子から敬遠されがちな風貌をしている。中肉中背で眼鏡着用。髪もぼさぼさで体臭もきつい。人間としてやるべきことを放棄しているよう男だ。
有葉の調査によれば、三島隆文は偶然にも図書室にて魔導書を見つけ、悪意と共に起動させ、この世に魔物を産み出した。その魔物というのが、概念的であり、煙のようでもある、曖昧かつ厄介な魔物だったのだ。
問題なのは、その魔物には通常の退魔手段が通用しないということ。
目に見えて存在しないという特性上、有葉の能力ではどうすることもできない。恐らく、世界に数人存在するといわれるトップレベルの退魔士であっても、単純な戦法では苦戦を強いられる相手であろう。
……しかし、意外にも、魔物の構造自体は単純だった。
魔物の存在理由と行動原理が『使役者の欲望』なのだ。使役者の欲望が満たされるまで、その欲望の成就のためにこの世界と人間に攻撃を仕掛けてくる。毒を、撒き散らす。逆に言えば、使役者の欲望が満たされてしまえば、魔物は消える。現状――『それ』が唯一の退魔手段となる。
即ち、『三島隆文の欲望を満たすこと』。
それだけが、祐介を救う、唯一の方法。
「――やるしか、ない」
実は、もう既に三島隆文とのコンタクトに成功している。
その際に聴取した『欲望』というのが――。
（……私を、あいつに自由に利用させること）
学園でも人気の高い女子である時野有葉を自由に使わせろと、奴は言ったのだ。聞いた時は気持ち悪さよりも驚きが勝った。ここまで下品な人間が同じ学園にいるのか、と。
（通常の方法では倒せない。あの男子の欲望を満たすことによってのみ、私の身体を差し出すことによってのみ、今回の事案が解決する。……祐介くんを、助けられる）
逆に言えば、たったそれだけのことをしなければ、魔物によりもたらされた毒は増え続け、そう遠くはないうちに祐介の生命を奪うだろう。その後、もし三島隆文の欲望が膨れ上がってしまったら、本当に取り返しのつかない事態になりかねない。
――寧ろ、厄介な魔導書があんな男の陳腐な願いによって起動されてよかった。
そう思って、この身体を、一時的ではあるが差し出すしかない。

著者近況
はじめまして。裏側ざんと申します。普段はノクターンノベルズという官能小説サイトにて、NTRモノ等を投稿しています。今回はエロミッションがテーマということで、何とか私らしさを出せるよう書きました。楽しんでもらえていたら嬉しいです。

「魔物のいない平和な日常を守るため、何よりも祐介くんのために――」
祐介の首筋に、指先をするりと滑らせる。
「――絶対に、負けないから。祐介くん」
決意に満ちた凛々しい表情。
そのまま祐介に背を向けて、有葉は学園へと向かった。

※※※

普段であれば美しく感じる茜色の夕陽も、今はそう思えない。
ひっそりとした放課後の廊下を、有葉は歩いていた。
浮かない表情をしており、足取りは重い。当然だ。あの三島隆文により指定された場所を目指しているのだから。
（確かに不気味さも嫌悪感もある。……けれど、彼だって同じ学園に通う生徒であり、人間よ。衝動にのみ従って悪事を働く魔物とは違う。それに『本番行為までは要求しない』と約束してくれている。――結局、その程度の欲望ってこと）
携帯端末の画面に表示された隆文からのメッセージ。正直、祐介以外の男からのメッセージが自分の手元にあるという状況自体に不快感を覚えてしまう。
『放課後、旧校舎の美術室に来るように』
その後に続けて、どういう風なことをさせられるのか、という指示が記載されていた。
二度も目を通したくもない破廉恥な内容。
有葉は――ごきゅっ、と唾を飲み込んだ。
普通棟から旧校舎へと繋がる、長い渡り廊下。その床の表面に落ちた時野有葉の影は、柔らかな曲線と淫猥な凹凸が組み合わさった、男子なら垂涎ものの形状をしている
豊満な胸の上に手を置き、ふぅ、と息を吐く。
「大丈夫。私なら乗り切れる」
自分に言い聞かせるように言って、旧校舎の美術室を目指す。

※※※

指示された場所へ到着した有葉の前方。
薄気味悪い笑顔を浮かべた三島隆文が、ずん、と立っている。
「くふふ。本当に来てくれたんだ。時野有葉ちゃん」
「……退魔士として、当然でしょう」
「ええ？　――僕の魔物の毒に苦しめられてる彼氏のためって正直に言えばいいのに。まあ、そういう強がりなところも有葉ちゃんの魅力の一つだと思うけどさあ」
隆文が手招きをする。
仕方なく従って小さな歩幅で近付く。
（う。想像以上に、気持ち、悪い――――）
有葉と隆文の距離、僅か一メートル。
至近距離と言っていい間合いの中で、思春期の男子生徒特有の雄臭さを感じていた。この男のそれは普通の男子よりも濃く、臭い。体液は魔力ともなり得る存在であり、退魔士の有葉は『汗の匂い』や『精子の匂い』を敏感に捉えてしまう。
「こうして目の前にしてもまだ信じられないよ。夢みたいだ。あの才色兼備の時野有葉ちゃんを、僕が自由にできるだなんてッ。ふ、ふくく、くふふふふッ――あぁ、やっぱりすごいカラダしてるよねぇ、特におっぱい……マジ、デッカぁ……♪」
腐った雄の匂いに抱かれているだけでも吐き気がするというのに、更にいやらしい視線を向けられてしまう。隆文の瞳は充血していて、黒目がぎょろぎょろと動きながら、有葉の肉体を視姦してきていた。
ぎぃっ、と有葉の膨らんだ胸元が見られた時。
ほぉっ、と隆文は口を縦に開いて小さな歓声と共に息を漏らす。
今にも押し倒されてしまいそうな空気感に堪えられず、有葉は尋ねた。
「もし仮に断ったら……どうなるのかしら」
間髪入れずに、隆文は答える。
「有葉ちゃんが一番よく分かってるでしょ、そんなの」
――つきん、と胸が痛んだ。
そうとも。分かりきっている。分かりきっているというのに、そのような質問をしてしまったということで、いかに自分が追い詰められている状況なのかということを認識させられた。
奴が一秒念じるだけで、『守るべき人』の身体を蝕む毒の強さが増すだろう。有葉が余計な行動をとれば、そのリスクがぐんと高まる。だから今は――従うしかない、のだ。
誰よりも大切な、祐介のために。
「くっ……」
更に一歩、隆文へと近付いて。
その場で膝を曲げて腰を落とし、姿勢を低くする。
メッセージに書いてあった指示――『フェラチオをしろ』という命令に従い、祐介を守り救うために。退魔士としての責務を果たすために。
有葉が目を閉じた隙に、隆文はボロンと肉棒を露出した。
「――ッ……!?」
眼前に零れ落ちる不潔極まりない肉棒。太く、それでいて長い竿。裏筋にビキビキと迸る血管。血管の淵や、また雁首にこびりつく恥垢。全てが、有葉を驚愕させる。
（こんなものを、私の口でするなんて――）
唾を飲み込みながら、無意識の内に祐介のそれと

比べてしまっていた。
太さも長さも一目瞭然で隆文に軍配が上がる。それはつまり、祐介が初めての彼氏である有葉にとって、未経験の巨大さということになる。
こんな臭いものを咥えたくなどない、そもそも口に入りきるとは思えない、やっぱり別の方法を……などと渋っていると、隆文に、
「ほらほらぁ。さっさとしないと――浅井君、殺しちゃうよぉ♪」
と言われ、全身にピシリと緊張が走る。
これ以外の解決方法が見出せていない今、命令に従う他ないと心に決めたばかりだろう。やるしかない。やるしかないのだ。そう自分に言い聞かせて――唇を、近付ける。
（祐介くんの、ため……）
饐えた熱気はすぐそこにあった。あまりにも……臭い。
「く、んっ、んふっ――んぷぅ、ん、ぶっ、ぐっ、ぶぉッ……!?」
すると閉じた唇に対し、隆文は亀頭をぐにぐにと押し付けてきた。
無理矢理抉じ開けられようとしているのを感じた有葉は、静かに瞼を閉じ、唇を開いた。たちまち、ぬるりと肉棒が口内に入りこんでくる。
「あッ、あぁぁあッ、あ～ッ……有葉ちゃんのクチ、あったかいッ……!!」
「――ぶぐぅ、ん、おっ、ぐぷぅ、ぶぢゅる、るぶぅっ」
「いいっ、いいよぉ！　慣れてるじゃないかぁっ」
予想に反して、口はすんなりと大きな肉棒を受け入れた。
「うふぉっ、ごぼぶっ……ん、んんんッ……!?」
だが瞼を持ち上げてみると、まだ半分くらいしか咥えられていないことに気付く。
「ふっ、ふっ、ふぅ～……んぶぅぅう、ぶ、っ、ぶぐっ」
全体を咥えるには、喉の奥にまでコレを迎え入れる必要がある。
半ば諦めながら隆文に視線で問いかけると、彼は顎をクイッと動かしていた。ほぼ間違いなく、ちゃんとチンポ全体をしゃぶれ、という指示だろう。
有葉は隆文のズボンの生地を、爪を立てて掴んだ。
命令に逆らう訳には、いかない。
意を決して、そのまま顔を前に進ませて、肉棒全体を口と喉で包み込んでいく。
「んぐぉぶっ……!!　んふぶっ、んぐ、おっ、おぅぶっ――ぉ、っ……!!」
喉にまで腫れた亀頭に侵入を許し、口の中もパンパンに満たされてしまっていた。鼻先と上唇には縮れた陰毛が触れてくる。何もかもが嫌になる熱気と臭気。あまりの嫌悪感に、有葉の意思とは無関係に涙が滲んで、つぅ、と控えめに垂れていく。
「うぐぅッ、おごッ、おッ……んぶぉっ……!!」
「あッはあ、最高～っ♪　男子なら誰もが憧れる時野有葉ちゃんにっ、ずっとこうして欲しかったんだよなぁ～!!　いつも冷たい言葉で僕らを馬鹿にしてるその口でっ、たっぷり奉仕してもらうからなぁ……!?　ホラ、前後に動いてみろよ」
「――うぷっ、んは、あっ」
頬をペチンと叩かれる。
もはや、そんな軽い痛みに構ってなどいられない。頭を掴まれながら男性優位で進行されるイラマチオよりはマシだろうと、なんとか有葉は前向きに考えながら、まずはゆっくりと顔を引いていく。
「んくぷぉっ、ぶぶじゅぶぉふぉっ……んふぁ……ぷはあっ」
有葉の口内を逆流するようにして、ぶりゅん、と肉棒が飛び出る。
ビクビク、ビク。目と鼻の先で脈動するその大きな肉棒が、今の今まで自分の口の中に入っていたとは到底信じられない。
（何よこれ……。熱くて、それに最低な味と匂い……うぇっ……）
じぃ、と有葉は己の唾液でコーティングされた肉棒を凝視していた。
「なに勝手に匂い嗅いで楽しんでるんだよ」
「なっ……違うわよ……ッ……」
「いいからさっさとしゃぶり直すんだ。その上品なお口でねぇ」
敵意が伝わらない程度に、隆文を睨み上げる。
それから白い指で肉棒を軽く掴み、位置を調整して、今度は自ら唇を開いて亀頭を咥えた。沈みこませるようにして竿全体を飲み込んでいき、再び陰毛の中へと鼻を埋める。
「ぶぐぶぉうっ、んふっ、んふぅ――っ、ふっ、んぶっ、ぐぶぉ、ぶぉぅ」
自然と零れてしまう下品なフェラ音に、有葉の自尊心が傷付けられていく。
「んくっ、ぶぉぅぶっ！　ぶっ！　――じゅるぶッ、ぶぢゅぅっ、ぐっ、んぽぉっ！」
奥まで咥え込んでは手前へと引く。そんな単純ながらも淫猥な行為を繰り返す。回数を重ねれば重ねるほど、己が内側から塗り替えられていくような気がしていた。
「有葉ちゃんのフェラッ、たまんないなあ～。いい感じで吸い付いてくれてるし、もしかして僕のチンポが気に入っちゃったのかな？」
「ぶッ――んぐぅ、そんな訳、なひれしょっ……！　ぶぐっ、んぶごっ」
「おほっ♪　喋ると振動がっ……！　あ～メッチャ気持ちいいッ！　あぁ、僕、結構早めに出ちゃうタイプでさぁ、も、もうヤバイからッ――最後にせっ

大人気PCゲームのコミカライズ続々始動!!!

『敗北乙女エクスタシー』にて連載開始の期待の新作をピックアップ！　原作ストーリーに加えてコミカライズ版のみのエッチシーンも追加予定！

©Waffle

エデンズリッター EDEN'S RITTER

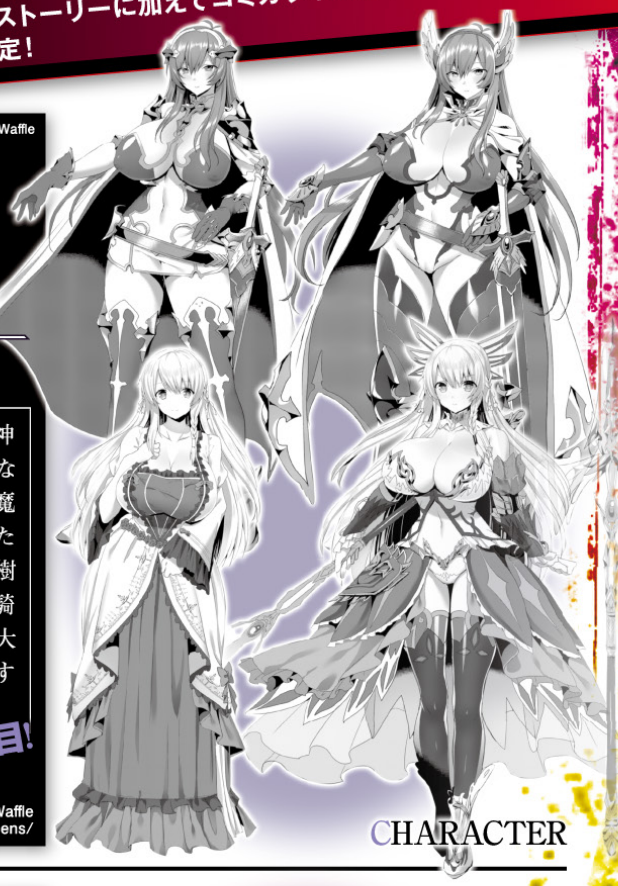
淫悦の聖魔騎士ルシフェル編

原作ストーリー

エルアラド聖王国は今、未曾有の危機にあった。王国に伝わる「神樹セフィロト」の力を狙う暗黒魔導結社ゼノバイドにより、平和な日常は蹂躙されつつあるのだ。心優しき巫女姫セシリィは、淫魔に対抗できない自身の無力さを嘆いていた。そんな彼女に訪れた転機――それは神の思し召しか、それとも悪魔の誘惑か。「神樹セフィロト」によって禁忌の力を与えられたセシリィは、楽園の騎士「エデンズリッター」へと変身する。淫魔にも対抗できる巨大な力は、しかし、同時にセシリィの心身を淫乱に蝕み試練を課す諸刃の刃であり……。

作画は恋河ミノル！
可愛く柔らかい絵柄のヒロインと
ハードな異種姦のギャップに注目！

原作：Waffle
http://www.waffle1999.com/game/70edens/



CHARACTER

©Liquid

黒獄 II クロイヌ

～淫欲に染まる背徳の都、再び～

原作ストーリー

建国より百余年、この国は今、繁栄と退廃の頂点に達していた。国家を統べる女帝ラドミラは、享楽に耽る日々を送るなか、これ以上の悪徳を許さない多くの国々が団結し、反奉仕国家を掲げる『神聖同盟』を結び立ち上がる。同盟軍の勢いは奉仕国家を圧倒し追い詰めるが、その前に一人の男が立ち塞がった。建国の父、傭兵王ヴォルトの再来と噂される奉仕国家の騎士団長、ディレク・ロンド。その心に宿す真の野望は【王位の簒奪】――彼は同盟軍の美姫のみならず、女帝ラドミラをも打倒し、奉仕国家の全てを手に入れるため、野望を燃え上がらせる。

作画は月蜥蜴！
美麗なタッチで描かれるヒロインたちの
激しい陵辱プレイにご期待ください！

原作：Liquid
http://liquid.nexton-net.jp/15th/kuro_2/

CHARACTER

今後の『敗北乙女エクスタシー』をチェック!!

今号は長編小説がドーンと3本!!
まずは、こちらの作品をチェック!!
クールビューティーがまさかの異世界転移?
正義のためにエロバラエティに挑戦だ!!
女刑事さん
IJIGEN TV
異次元テレビへようこそ
小説 NOVEL／羽沢向一（はざわこういち）
挿絵 ILLUSTRATION／らら8

スカウト

警視庁捜査一課の刑事光森茉奈は男とすれ違った瞬間に、声を出しそうになった。

（あいつ！）

必死に声を喉の途中に押し止めて、ドリンクの自販機の陰に入った。角からそっと顔を出して、歩く男の後ろ姿を確認する。

（間違いない。昼間から人の多い通りを平気で歩いているなんて！）

茉奈が歩いていたのは、自宅の近くの商店街。用事で家に帰り、また警視庁へ戻るところだった。平凡な古くからの商店街だが、昼過ぎの今は行き交う人々も多い。

茉奈は二十五歳。刑事になって一年目。

本人は刑事らしく目立たないように努めているつもりだった。

確かに髪は女子スポーツ選手のように短く清楚。

服装はダークブルーのスーツとパンツ。白いシャツ。走りやすいローヒールの黒い靴。女刑事としてごく普通のファッションで決めている。

しかし顔と身体は女刑事として普通ではない。

今も身体に力が入り、顔をこわばらせて立っている茉奈を、通り過ぎる男たちがチラチラと見ていった。男の視線は顔と胸に集中している。

茉奈は美人だ。

強い意志を感じさせる眉。やや吊り気味の目。筋の通った形のよい鼻。少し薄めの唇。すべてがひとつになり、凛とした美貌を形作っている。

自分でも美人だと、まあまあ自覚しているが、刑事としては目立つ顔はじゃまだと感じていた。

そして美貌以上に、胸が目立ってじゃまだった。

走っても揺れないようにバスト全体を包むブラジャーでしっかりと押さえこんでいるが、スーツの胸が豊かに隆起する。おかげで男たちの注目を集めて困る。

しかし今は通行人の視線など、まったく茉奈の意識に入らなかった。

スマートフォンを出し、捜査一課の自分が就いている班長に電話する。

「鍵崎を見つけました」

道の対面に立つ電柱に記された町名と番地を伝えた。

「尾行します。わかってます。手は出しません。応援を待ちますから」

連絡を終えると、自販機の後ろから出て、男を尾行していった。

前を歩く男の名は鍵崎浩司。

身長は一八三センチ。

黒い半そでのポロシャツの背中は肩幅が広く、逆三角形のマッチョ体形。

デニムパンツに浮かぶ尻も太腿も、みっちりと筋肉がつまっている。

後ろから追跡する茉奈に見えるのは後頭部だけだが、顔は以前から脳に刻みこんである。

清潔なスポーツ刈りに、日焼けしてたくましい精悍な顔。

主演俳優やモデルをするような美男子ではないが、初対面の男女ともに好感を持たれやすい顔立ちだ。

おそらく誰もが爽やかなアスリートだと思うだろう。ラグビーかアメリカンフットボールの選手。最近ならフリークライミングかもしれない。

だが違う。

鍵崎浩司は連続強姦殺人犯だ。

半年前に海外から帰国したことはわかっているが、約五年間の海外渡航中に何をしていたのかは不明。

日本に帰ってからたった半年で、四人の女性が犠牲者になっている。

最初の被害者は女子大生。

一週間後に看護師。

鍵崎は女子大生と看護師を殺害したところで逮捕され、取り調べで躊躇なく犯行を認めた。むしろ自分から武勇伝としてぺらぺらとしゃべった。

自宅から被害者の血が付いた衣服も押収された。

起訴された後に拘置所から逃亡して、その足で自分の担当女弁護士の自宅に行き、犯して殺した。

女弁護士の肌にも、膣内にも、鍵崎の精液がたっぷりと残っていて、自分を隠す意図はまったくなかった。

そして今から十五日前。自分の逮捕にも関わった女刑事を、町の監視カメラの前で堂々と拉致した。

女刑事は無人の山小屋に連れこまれて、凄惨に強姦されたあげくに殺害された。

鍵崎は殺害方法に凝るタイプの殺人者ではなかった。

犯した後に、遊び飽きたおもちゃを力まかせに壊したとでもいうように、女子大生は素手で絞め殺された。

看護師は手近にあったコンクリートブロックで頭を殴って殺した。凶器は死体のそばに無造作に捨ててあった。

女弁護士はキッチンで犯され、自分が愛用していた出刃包丁で喉を切り裂かれた。

そして女刑事はチェーンソーで胴体を切断されていた。これもたまたま山小屋にチェーンソーがあったからだ。

茉奈は女刑事の殺害現場に立ち会った。

刑事ドラマとは違って、犯行現場で偉いのは刑事ではなく鑑識だ。

鑑識が死体と現場を調べつくすまでは、刑事は現場に入ることも、死体を見ることすらもできない。刑事が殺人現場に入ったときには、もう死体は運び出された後だったということもある。

あの日、茉奈は凄惨な遺体を見た。

遺体の名前を思わず叫んでしまった。

「逸美さん！　嘘だ！」

腹部で上下に切断されて、内臓を床に広げていたのは高畠逸美警部補。

茉奈が敬愛するベテラン女刑事であり、茉奈を捜査一課に引き上げてくれた恩人だった。

茉奈は制服警官時代に活躍した自負

があるが、高畠警部補の推薦がなければ、これほど早く刑事にはなれなかっただろう。
茉奈は鍵崎を自分の手で逮捕することを誓った。
とはいえ刑事になってまだ一年足らずの自分が、警視庁を挙げての大規模捜査の中心になれないこともわかっていた。
（自分の家の近所で鍵崎と出会うなんて、逸美さんの導きとしか思えない）
前を歩く強姦殺人鬼の歩調に変化はない。商店街をあちこちうろつく鍵崎に、尾行に気づいた様子はなかった。
やがて鍵崎の後ろ姿は商店街を離れた。慎重に後を追うと、街はずれの倉庫が並ぶ区域の前に出る。
一番手前の倉庫の下りたシャッターに、鍵崎が右手をかけて、軽々と腰の高さまで押し上げる。たくましい身体を柔軟に曲げて、シャッターの中へと入っていった。
植込みの陰に潜む茉奈は、再び班長にスマホで連絡した。
「はい、待機しています」
本心では今すぐ倉庫の中に飛びこみたい。しかし刑事ドラマの熱血主人公みたいな行動をしてはならない、と警察官になって身に染みている。
応援が来るまで、開いたままのシャッターを見張るつもりだった。
「やあ、女刑事さん」
「えっ！」
突然の背後からの声に、茉奈は驚いて反応が遅れた。その一瞬で、目の前が真っ暗になる。
「あっ！」
顔の感触から、上からすっぽりと布袋を被せられたとわかる。
視界を奪われた直後に、両腕を背後にひねり上げられ、左右の膝の裏を連続して蹴られた。警察学校で習う逮捕術に近いが、とんでもなく速い。
アスファルトにガクンと膝をつかされ、首に腕をまわされる。
（落とされる！）
警察学校で教わった柔道の技をかけられた。首にまわした腕で頸動脈を圧迫する裸絞（はだかじめ）だ。達人の裸絞には抵抗できないことも、身をもって知っている。鍵崎は警察学校の教官以上の巧みさで頸動脈をせき止めて、脳から酸素を奪った。
「くっ……」
（わたしはおびき寄せられたの……ちくしょう……）
自分の迂闊（うかつ）さを罵りながら、茉奈は失神の闇へ落ちていった。
活を入れられて、茉奈は意識が戻った。
目の前は真っ暗で、首に布袋を被せられたまま。
両腕の手首には、何かがきつく食いこんでいる。自分の体重が両手にかかり、反射的に両脚に力を入れて、身体を支えた。
「やあ。光森茉奈巡査さん」
力強い声といっしょに、首から布袋が取りはらわれ、光とともに鍵崎の顔が目の前に現れる。
優勝インタビューを受けるアスリートさながらの爽やかな顔だ。取り調べの映像を見たが、まったく同じ表情で、二人の女を強姦殺害したことを自供していた。
怒りが、茉奈の心身を満たした。四人を無残に殺害した男に捕らわれている危険な状況にも、怒りしか湧かない。
茉奈は自分が置かれた状況も知った。
高い屋根の倉庫の中だ。コンクリートの床にダンボール箱や剥き出しの機械がぽつぽつと置いてある。
茉奈は二つの大きな機械の間に立たされていた。白いロープが機械と茉奈の両手首に結ばれて、両腕は斜め上に伸ばした状態。
左右の足首にも白いロープが結ばれ、同じ機械の下側につながっていた。
手足を激しく動かしても、ほどくことも引きちぎることもできない。ロープを結んだ二つの機械は重さが何トンもありそうで、移動させるのは不可能だ。
服は埃で少し汚れているが、スーツもパンツも乱れていない。靴も履いたまま。
だが警察手帳は奪われていた。
目の前で鍵崎が開いた警察手帳をながめて告げた。
「きみの名は光森茉奈。階級は巡査。本庁の捜査一課の刑事だね」
「警察手帳には所属まで書いてない。わたしを知っていて、わざと自宅近くに姿を見せたのね」
「じつはその通り。警視庁で光森巡査と高畠警部補を見かけて、二人に興味を持って調べたんだ。最初は高畠警部補を味わった。次は光森巡査だよ」
茉奈は眉を吊り上げて、鍵崎の顔を見上げた。
「すぐに応援が来る。おまえは終わりよ」
連続殺人者が球技のチームメイトに向けるような親しい笑顔になる。
「ここは光森巡査が捕まった倉庫じゃない。意識を失っている間に、二人でちょっとしたドライブを楽しんだ。光森巡査のスマホは元の倉庫に置いてきたから、安心して遊べるよ」
鍵崎の両手が伸びてきて、茉奈のスーツのボタンをつまんだ。
「やめろっ！」
茉奈は叫んで、脚を何度も蹴り上げようとする。しかし足首を縛るロープにはばまれて、靴底がわずかに床から浮くだけだった。
「わたしに触るな！」
悪あがきにすぎなくても、茉奈は懸命に胴体を揺らす。スーツ越しにバストが上下左右に大きく跳ねまわる。
鍵崎が慣れた指さばきで、踊る胸の上のボタンを簡単にはずしていった。
しかし腹の位置にあるボタンは、はずさずに残された。スーツの胸の部分だけをつかまれて、左右にはだけられ

著者近況 「エロミッション」というお題で浮かんだのが、バラエティ番組のゲームでした。たたいてかぶってジャンケンポンやポカポカドボンもやりたかったなあ。ところで資料としてローションを買ったけど、処分が難しい気がする。

る。
「いやっ！」
隆起する白いシャツが左右からスーツに挟みこまれて、いっそう高く押し上げられた。
茉奈はさらに激しく身体を動かして抵抗するが、鍵崎は余裕の態度で指を動かす。内側からの圧力で弾けそうなシャツの胸のボタンも、あっという間にはずされた。スーツの後を追って、シャツの胸もはだけられる。
純白のブラジャーがあらわになった。茉奈の豊満な胸をしっかりと保持するために、乳房全体を包みこむ大きなカップが二つ並んでいる。装飾はなく、ただ実用性だけを追求したデザインだった。
「前に犯した高畠警部補も似たブラジャーをつけていたよ。警視庁は女刑事の下着まで決めているのかな」
思わず茉奈は怒号をあげた。
「逸美さんを馬鹿にするな！」
「高畠警部補と仲がよかったそうだね。面白い」
鍵崎がニコニコしながら茉奈のパンツを足首まで引き下げた。
現れたショーツも純白で、下腹部と尻を護る実用性重視のもの。
「ショーツもいいね。僕の好みだ。セクシーなランジェリーより、こういう下着のほうがそそられるよ」
鍵崎が近くのダンボール箱の上に置いてある布用の鋏を手に取り、ショーツの右サイドに刃を当てた。
刃物のひんやりとした感触が、茉奈の鳥肌を立たせる。
「ひっ！」
（こんなところで、こんな男に見られる！）
茉奈は処女。
男とつきあったこともない。
中学生のころから急速に大きくなった胸を、男たちからじろじろと見られた。言った本人は褒めているつもりの下品な言葉を、数えきれないほどかけられた。
そのせいで男性不信を植え付けられてしまい、ファーストキスも未経験。ましてや自分の身体を男に見せたこともない。
そんな茉奈にも、理想の初体験を妄想することはある。連続強姦殺人鬼に裸に剥かれるはじめてなど、想像したこともなかった。
ヂョキン、と右サイドが切断される。
「ああっ！」
つづいて左サイドも切られた。ショーツが下腹部と尻から離れて、足首まで下げたパンツの上に落下した。
女刑事の秘密の場所が、憎んでもあまりある男の目にさらされた。
まだ誰も触れたことのない恥丘はふっくらとして、その中心の縦溝は強固に閉ざしている。
「うっ、ううう……」
鍵崎の目から隠したくても、緊縛された両手は下げられない。できるのは内腿を密着させて、内側を覗かせないことだけ。
「さあて、いよいよ最後のビッグプレゼントの包み紙を破ろうかな。僕は大きいおっぱいがなによりも大好きなんだ。僕の被害者には共通点がないといわれているけど、写真を見れば一目瞭然だろう」
茉奈の脳裏に四人の写真が浮かぶ。全員バストの豊かさが印象的だ。
「警察への恨みや挑戦ではなく、胸が大きいという理由で、逸美さんを殺したというの」
「巨乳を堪能する以外になにもないよ」
「クズ野郎！」
噛みつくようにわめく茉奈のブラジャーのカップの間に鋏が入り、切り離された。
カップが左右に分かれて、解放された白い乳房がどっとあふれる。
勢いで大きく弾む乳球を、鍵崎が触らずにじっと見つめる。
「いいね。柔らかくて、弾力がありそうだ。乳輪も乳首もきれいな桜色。乳首は今のところ縮んでるけど、勃起したらかなり高く伸びて、太く膨張してくれるだろうな」
評する言葉のひとつひとつが、茉奈の羞恥心をえぐる。
「黙れ！　勝手なことを言うな！」
日焼けした顔に涼やかな笑みを浮かべたまま、ベロリと舌なめずりをする。
「いよいよ僕の手でおっぱいの調子を診るから、覚悟するんだよ」
「やめろっ！　汚い手でわたしに触るな！」
「光森巡査が目覚める前に手を洗ったよ。僕はきれい好きなんだ」
「近づくな、ひいっ！」
左右の乳房を、無造作に両手で下からすくい上げるようにつかまれた。太い十本の指が、誰も触れたことのない乳肉に食いこんでくる。
「いいい……」
茉奈は言葉を失い、ただ歯を食いしばった。
胸がふくらみだして女の身体になってから、今はじめて男に胸を触られている。全身がこわばって、身悶えることすらできず、手足を縛られた姿で棒立ちになった。
茉奈が密かにイメージしていた、恋人からの優しいソフトタッチではない。二つの乳房の肉を指でつままれて、強くこねられる。さらに家畜の成長具合を確認するかのように、タプタプと上下に揺らされた。
茉奈は声を出せないが、頭の中で悲鳴をあげつづけた。
（あああ、嫌っ！　こんな動物みたいないじられ方は嫌あっ！）
鍵崎は巨乳をもてあそびながら小首をかしげた。
「うーん。大きくて立派なボリュームだけど、思ったより硬い。全然揉みほぐされていない。なるほど、光森巡査は処女だな」
乳房を上下させる力が強くなり、乳肉がお手玉のように高く跳ね上げられ

著者近刊　リアルドリーム文庫『恥ずかしい家庭教師でごめんなさい』、二次元ドリームノベルズ『サンダークラップス！リボーン』シリーズ他、多数　好評発売中！

ては、何度もビタッビタッと指や手のひらに叩きつけられる。
「処女の女刑事とは面白い！　ここで犯して殺すつもりだったけど、計画変更だ。何日もかけて、じっくりと女にしてやろう」
　恥ずかしい事実を言い当てられて、さらにとんでもない計画を言われて、茉奈はショックの硬直を脱した。
「黙れっ！　わたしは、あうっ！」
　今まで乳房をお手玉にして遊んでいた男の両手が、強烈な握力で乳肉を握った。豊乳の根もとが指できつく絞られ、柔らかい肉が前へせり出される。
「いっ、痛いっ！　ひいっ！」
　未知の痛みに悲鳴を発する茉奈の目の前で、乳肉が絞り出されてパンパンに張りつめる。先端では桜色の乳輪の面積が広がり、乳首が強制的に勃たされた。
「よしよし。美味しそうな乳首だ。味見をしてやるよ」
　変形した乳房に、鍵崎の顔が迫ってくる。こんな状況でも、爽やかなアスリートらしさは変わらない。
　茉奈の目の前で、鍵崎の形のいい唇に右の乳首を咥えられた。
（こんな奴に、胸をしゃぶられる！）
　茉奈の嘆きは、予想外の痛みに吹き飛ばされた。
「ひいっ！」
　乳首を噛まれながら、舌で舐めまわされる。肉筒だけでなく、乳輪や絞り出された乳肉を何度も噛まれては舐められつづける。
「あひ！　痛っ！　くうっ！　うあああっ！」
　鍵崎が口を離すと、唾液にべっとりとまみれた乳首が現れる。血こそ出ていないが、歯型がいくつも付けられている。
　茉奈ははっきりと理解した。鍵崎は女に快感を与えるつもりなどなく、ただ自分が楽しんでいるだけだ。
　鍵崎が太陽と潮風を感じさせる笑顔を見せつけてくる。
「はじめておっぱいを愛撫してもらう気分はどうだい、光森巡査。いい気持ちだろう。次は左のおっぱいだ」
　陵辱殺人鬼の口が再び胸に迫ったとき、ヴンンンッ！　と、空気が振動して、顔や身体の露出した肌がビリビリと小刻みに震えた。
「な、なに!?」
　鍵崎のすぐ背後に、縦になった渦のようなものが出現した。シャボン玉の表面に似た淡い虹色がグルグルと回転して、鍵崎に触れる。
　一瞬で茉奈の乳房を握っている鍵崎の姿が消えた。
「嘘っ！　どうなってるの!?」
　殺人鬼を呑みこんだ渦が前に進み、茉奈に迫る。
「うわあああ」
　悲鳴の途中で、茉奈もこの世界から消失した。

楽屋

「あああああっ！」
　茉奈は叫んで、上半身を起き上がらせ、まぶたを開いた。
「ああ、えっ!?」
　ついさっきまで手足を拘束されて、倉庫のコンクリートの硬い床に立たされていたのに、今は柔らかいものの上に横になっていた。手足からはロープがなくなり、自由に動かせる。
　周囲を見まわすと、ごく狭い部屋に自分が横たわっていたとわかる。
　高さは普通のマンションくらいあるが、床面積はカプセルホテルの寝台ほどの細長い作り。
　直方体の部屋の床にロングクッションが敷いてあった。天井には白い照明。壁に窓はなく、一方にスチール製のドアがあるだけ。
（また気絶させられて、別の場所に移動させられたの？）
　衣服も変わっていた。
　倉庫で胸をはだけられ、パンツを足首まで下ろされ、下着を切られて奪われたはずだった。
　今はスーツとシャツはボタンをきちんとはめられて、胸を隠されている。
（違う！　わたしの服じゃない！）
　色は同じダークブルーのスーツに白いシャツだが、生地が薄く、元の衣服よりも胴体にぴったりと密着している。
　しかもブラジャーの感触がない。スーツの表面にノーブラの乳房の球面が鮮明に現れ、乳首の突起までくっきりと浮き上がっている。
　下半身はもっと別物だ。ダークブルーのパンツが、同じ色のスカートに変わっていた。それも裾が太腿の半ばまでしかないマイクロミニのタイトスカートだ。
　脚を動かして立ち上がっただけで、裾がずり上がり、ショーツが見えそうになる。
　下半身に感じるショーツも、いつも穿いているものより面積が小さいと思う。しかしミニスカートをめくって見る気にはならない。この部屋にカメラがあり、鍵崎に監視や録画をされていると考えた。
　靴だけは同じ黒いローヒールのままで、クッションを踏みつけた。
（この格好は、まるっきりエッチな漫画のセクシーな女刑事じゃない。安っぽいコスプレが、鍵崎の趣味なの？）
　四人の犠牲者の遺体は、いずれも全裸で、鍵崎の精液と自身の血にまみれた姿で発見された。尊敬する先輩刑事の逸美がこんな馬鹿げた服を着せられたうえで汚されたかと思うと、さらなる憤怒が湧き上がる。
（この狭い部屋にじっとしていても意味がない。ドアから外へ出られればいいけど）
「えっ！」
　ありきたりのスチールドアの表面に、黒い明朝体の文字が浮かんだ。
『起きた出演者の方は、外の楽屋にお越しください』

（なにこれ!?　どうやって文字を映してるの？）
指先でそっと文字に触れてみても、モニターではなく、見た目通りの硬い金属だった。どこからか投影しているのでもない。茉奈の知識では理解できない現象だ。
困惑してドアノブを握ると、自動的に外へ開いた。
ノブに引かれて小部屋の外へ出ると、広い部屋になっていた。高校の教室ほどの広さの部屋に、ロングテーブルがあり、パイプ椅子が並べてある。
部屋の壁には同じ形のスチールドアが並び、ほぼ同時に開いた。
すべての開いたドアの中から、女たちが出てきた。
看護師、キャビンアテンダント、制服を着たＯＬ、ファーストフードの店員、メイドカフェのメイド、チアリーダー、フィギュアスケーターなどなど、ひと目でわかる制服やコスチュームを着た女たち。
茉奈を含めて全員で十人。
全員が二十代らしい様々なタイプの美女。
全員が抜群に魅力的なプロポーション。
全員が本来の制服やコスチュームではありえない短いスカート。ぴったりとした胸の表面には、乳首が浮き出ている。
つまり全員が茉奈と同様の状態の美女たちが、いっせいに口々に叫んだ。
「なに、これは！」
「ここはどこ？」
「さっきまで飛行機にいたのに！」
「手術中なのに！」
「どうして恥ずかしいミニスカになっているのよ!?」
今にもパニックになろうというときに、男の声が部屋に反響した。
「全国のお茶の間のみなさん、どうもどうも、ラッキーですかあ！」
ドアが並ぶ四方の壁のひとつに、いきなり男の映像が現れた。
「第三百二十七回エロエロ異世界美女ゲーム大会のはじまりでぇす！」
陽気な声でしゃべる男は、三十代半ばに見える。美男子ではないが、人気お笑い芸人という雰囲気の華のある顔だ。
身に着けているのは金色のラメが煌めくスーツに、赤いラメ入りのやたらと大きい蝶ネクタイ。白と青のストライプのズボンと白い靴。
芸人は芸人でも、平成が終わろうというこのときに、昭和のバラエティ番組から抜け出てきたようなアナクロな衣装。
右手に握るマイクも上の丸い部分が金ぴかに輝いている。
「司会はわたくし！　みなさまご存じミスター・ラッキーです！」
室内の女たち全員が口をそろえた。
「誰？」
「あんなタレント、知らない」
「見たことない」
「ださいっ！」
茉奈もはじめて見る芸能人だ。未知の司会者はカメラへ向けて指さした。
「まずは楽屋にいるみなさんに状況を教えましょう！　みなさん、ラッキーですか！」
返事を待つように一拍置いてから、ひとりしゃべりを再開する。
「ここは日本のテレビ局の中！　みなさんがいるのは大東京テレビの第一スタジオの楽屋です！　といってもここは楽屋のみなさんから見れば、異世界！　異次元！　パラレルワールドの日本です！　この番組は複数の異世界の日本から美女を超時空転送して、愉快なゲームに参加していただく姿を楽しく放送します！　もちろん出演者に参加の意志を確認していません！　強制参加です！　じつにラッキーですねえ！」
「ふざけるな！」
茉奈だけでなく何人もの気の強そうな女たちが怒鳴った。
「異世界に連れてきたなんて」
「そんなバカみたいな設定が通用すると思っているの」
「これは人権無視の誘拐よ！」
こちらの声が画面の向こうに聞こえているのかわからないが、ミスター・ラッキーが右手の指をパチンと鳴らした。
茉奈たち十人の女たちが床から浮き上がり、天井近くで宇宙遊泳みたいに上下左右にクルクルと回転した。
「な、なにっ!?」
茉奈は自分の身に起きていることが、奇術のようなトリックとは思えなかった。身体にはなんの支えも吊り糸もないのに、空中に浮遊している。
ミスター・ラッキーのアップの顔がピカピカの白い歯を剥き出しにして、画面に笑いかける。
「どうですか！　あなたたちの世界に、こんなテクノロジーはないでしょう！　この世界よりも技術が遅れた発展途上世界を選んで拉致したからね！」
メイドが、画面に向かって文句をつけた。
「異世界なら、どうして言葉が通じるのよ？　設定が甘い！」
「パラレルワールドの日本だと言ったでしょう！　完全な異世界ではなく、ちょっと違うだけの世界だから、言語も日本語のままなんですよ！」
ＳＦに興味のない茉奈には、やりとりの意味がわからない。とにかく言葉は通じるということだ。
「今回は全部で八つの世界のチームに参加してもらっています！」
十人がゆっくりと床に下ろされると、画面が切り替わり、八つに分割された。
上の右端の画面に、茉奈たちがいる部屋が映っている。
他の七つの画面にも同じ構造の部屋が現れ、それぞれに若い美女がいる。
確かに茉奈たち以外の七組の美女たちも日本人の顔つきだが、完全に同じではない。他の部屋の女たちそれぞれ

異なる特徴がある。
上の右から二番目の部屋の女たちは、全員が耳の上端が尖っている。
左から二番目は全員の瞳が真紅。
他の部屋は、髪が銀色。
額に奇妙なペインティング。
額の生え際から一本の角が立っている。
肩に見たことのない小動物が乗っている。
頭の五センチほど上に光る輪が浮いている。
どの部屋も女たちが着ている衣服は、極端なミニスカートであること以外は、ひとりひとりが違う。他の部屋の女たちも、それぞれ別々の場所から集められたのだろう。
それでいて身体に同じ特徴があるのは、茉奈たちからは奇異に見えても、その世界の普通の住人ということだ。
ひとつの部屋に十人、合計八十人の女たちの映像に、ミスター・ラッキーの声が重なった。
「八つのチームの美女たちからひとりずつの合計八人で、ゲームをしてもらいます！　ひとりのプレイヤーが見事ゲームをクリアした時点で、ゲームは終了です！　優勝チームは、賞品として元の世界に戻してさしあげますよ！　ラッキーですねえ！」
「クリアできなかったチームはどうなるのよ！」
と、誰かが叫んだが、ミスター・ラッキーは無視をした。
「さあ、美女のみなさん、帰還を目指してがんばってください！　では第一試合のプレイヤー、スタジオにいらっしゃーい！」
茉奈のすぐ右に立っているキャビンアテンダントが、いきなり消えた。
同時に画面に映る他の七つの部屋からも、ひとりが消える。
「ええっ！」
また画面が切り替わり、ミスター・ラッキーが映った。その背後にキャビンアテンダントを含む八人の女が出現した。
「楽屋のみなさんにお見せするのはここまで！　ゲームを公平にするために、プレイの様子は見せません！　スタジオで会うのをお楽しみに！」
そこで画面が消えて、元の壁になった。
「あの人、どうなるのよ！」
誰かが叫ぶなか、茉奈は気づいた。楽屋と呼ばれるこの部屋には、女たちがいた小部屋につづくドアしかない。自分たちには自力で楽屋の外へ出る方法がないのだと。
キャビンアテンダントが消えてからかなりの時間が過ぎたが、戻ってこない。
楽屋の中では、ある者は文句を吐きつづけ、ある者はしくしくと涙を流し、ぼうっと放心している。逃亡の手がかりを求めて室内を探索していた数人も、あきらめてパイプ椅子の上でへたりこんだ。
そして楽屋にミスター・ラッキーの声が響いた。
「最初のターンは誰もクリアできませんでした！　ゲームは第二ターンに入ります！　二人目のプレイヤー、いらっしゃーい！」
椅子に腰かけてぼんやりしていたOLが消えた。そして戻ってこない。
（ゲームって、なにをやらされるの？　なにもわからずに待っているだけなら、早くゲームをするほうがましよ）
いらつく茉奈の耳に、またもミスター・ラッキーのプレイヤーを呼ぶ声が聞こえた。
茉奈の眼前の光景が一変した。

第一ゲーム

目の前にミスター・ラッキーの金ラメスーツの背中が現れる。
左右には他の楽屋にいた異世界の女たちが並んでいる。
見まわすと、確かにスタジオ。
広い室内にはセットらしいものはないが、たくさんのカメラやモニター、照明などの放送機材が目に入り、カメラに映らない位置に何人ものスタッフがいる。
ミスター・ラッキーの向こうには、茉奈がテレビで見たような観覧席があり、大勢の観客が何列にも並んで拍手をした。
観客たちは若者から壮年までの男。顔も服装も普通の日本人と変わらない。
「それでは第三ターンの第一ゲームを」
突然、銀色の髪の婦人警官らしい制服の女が、ミスター・ラッキーの背中に跳びかかった。茉奈も目を見張る俊敏な動きで、高いレベルの格闘技を修めているとわかる。
確実にミスター・ラッキーを床に叩き伏せて、無力化できると見えた。
だが銀髪婦人警官の両手が空を切った。制服姿がミスター・ラッキーの身体をすり抜けて、前へ跳び出してしまう。
「ああっ!?」
勢い余った婦人警官の身体が、観覧席に落ちる。だが透明な壁があるように斜めになった体勢で止まった。
「おおっと残念！」
からかうミスター・ラッキーの右手を、茉奈がつかんだ。だが手にはなにも触らず、指が金ラメの袖を通り抜けた。
「立体映像なの!?」
「違いますよ！　わたくしの身体は少しだけ空間をずらしているので、プレイヤーからは触れませんよ！　みなさんがいた発展途上の世界では想像もつかない技術でしょうね！」
ミスター・ラッキーの右手が素早く動き、茉奈は鼻をつままれた。
「どうして!?　触られてる！」
「はーい！　わたくしからは触れますよ！　さらに観覧席の間にはシールドがあるから逃げられませんよ！　みなさんが故郷の世界へ戻るには、ゲーム

をクリアするしかありません！　抵抗は無駄だと観念して、ゲームに参加してください！」
　銀髪の婦人警官が斜めになった状態から身体を起こして、憮然とした顔つきでプレイヤーの列に戻ってきた。茉奈たちに視線を向けて、どうしようもないと無言で伝えてくる。
「あらためまして第三ターンの第一ゲームを開始します！　種目は」
　ミスター・ラッキーのかけ声を、茉奈が止めた。
「その前に教えて。先にゲームに出た人たちはどうなったの！」
「ご安心ください！　別の楽屋で休憩してもらっていますよ！」
「ゲームをクリアしたら、本当に元の世界に帰れるの」
「もちろんです！　コンプライアンスがうるさいご時世ですからね！　出演者への約束を守らないと、クレームが大変なんですよ！」
（八十人も拉致しておいて、どの口がコンプライアンスとか）
　と、思ったが、口には出さない。もうひとつ聞きたいことがあるからだ。
「わたしの前に光る渦に呑まれた男はどうなったのか、わかる？」
「鍵崎さんなら、別の番組『バイオレンス鬼ごっこ』に出演してもらっています！」
　ミスター・ラッキーの頭上の空間に四角い映像が現れる。
　鍵崎浩司が屋外の花壇の中で、マッチョな男の右腕に関節技を決めている。『鬼』と書かれたゼッケンをつけたマッチョが太い悲鳴をあげても、鍵崎は容赦しない。たくましい腕がありえない方向に曲がった。
　鍵崎の顔に、ゲームで会心の技を出せたときの笑顔が広がる。
「あいつ！」
　怒声をうなる茉奈の前で、鍵崎の映像が消滅した。
「では、あらためて第一ゲームをはじめます！　名づけて『気持ちいい椅子取りゲーム』！」
　スタジオの床から八個の赤い円筒形の物体がせり上がってきて、大きな円を描くように配置された。直径も、高さも、ちょうど人が腰を下ろすのにぴったりのサイズ。
　ひとり掛けのスツール型の椅子だ。
　茉奈は当然の疑問を口にした。
「どうして人数と同じ八脚なの？　これでは椅子取りゲームにならない」
　初対面の八人全員がとまどいの顔になり、ざわついた。
　ミスター・ラッキーがカメラに向かってしゃべる。
「この椅子取りゲームは他のプレイヤーを座らせないのではなく、当たりの椅子に座ったプレイヤーが勝利！　ようするに運試しです！　当たりかどうかは、座ればわかりますよ！　はーい、レッツミュージック！」
　かわいい声のアイドルソングがスタジオに流れた。この世界ではヒット曲なのか、観覧席の男たちがノリノリで手拍子を打ちはじめる。
　八人の美女はミスター・ラッキーの指示に従ってよいのか、ためらったまま無言で互いの顔を見合わせた。
　銀髪の婦人警官が張りのある声をあげる。
「やるしかない。勝っても負けても恨みっこなしにしましょう」
　女たちがうなずき、赤い椅子が描く円の周囲を歩きはじめた。当たりの椅子を探ろうと、ゆっくりとまわっていく。
「そんなだらだらしたスピードじゃ、視聴者が盛り上がりませんよ！　最新ヒット曲に乗ってスキップで行きましょう！　スキップスキップ！　スキップしないと終わりませんよ！」
　ミスター・ラッキーに発破をかけられて、八人はしかたなく足の運びにリズムをつける。
（うっ、スキップってどうしたらいいのよ!?）
　茉奈はどう見てもスキップではないガクガクした動きでまわりつづける。自分が一番下手だ。
　スキップをするうちに、八人全員の極端なミニスカートがずり上がり、もともと半分見えていた太腿が、さらに露出していく。
　八人の男性カメラマンが手持ちカメラを構えて現れ、スキップ美女のひとりひとりに迫り、あらわな太腿やタイトな布に浮かぶ尻肉の形を露骨に撮影した。スタジオにある現在放送中の映像が映るモニターには、八人分の下半身のアップが次々と現れては切り替わっている。
　ミスター・ラッキーが連発する笑えないジョークと、複数のカメラの視線を浴びながら、椅子のまわりを何周もした。
（いいかげんにしろ。いつまでやらせるつもりよ！）
　茉奈が胸の内で吠えたときに、曲が止まり、ミスター・ラッキーが口に咥えたホイッスルを大音量で吹き鳴らした。
　スキップしながら椅子を観察したが、当たりはずれを判別するヒントはどこにも見当たらない。傷も汚れも歪みもない新品だ。
　どうしようもなく一番近くにある椅子に跳びつき、タイトなマイクロミニスカートの布がパツパツに張った尻を、赤い円筒に乗せた。スカートの薄い布越しに尻に感じる座り心地は、普通の椅子と変わらない。
（当たり？　はずれ？　どっちよ？）
　軽快なドラムロールがテケテケと聞こえ、ジリジリと待たされていると、尻の下からぬめった音が聞こえた。
　ジュプルッ！
　椅子の側面から、何かがたくさん生えた。
　ズル、ヌズル、ニュズルルル！
　いくつものソレらが、猛烈なスピードで茉奈の両脚に巻きついてくる。

「えっ、ええっ！」
茉奈の目に、自分の脚を這う異様なものが映った。ヌメヌメの粘液にまみれた真紅の蛸の足のようなものが、足首からふくらはぎ、そして太腿の上でうねうねと蠢いている。
「なに、これは！」
ギュル、ギュチュル、ヌリュ！
と、うねるそれらは、よく見れば蛸やイカの足とも違う。軟体動物の質感がある表面には吸盤はなく、全体に丸い瘤のようなものが並んでいる。
いや、表面に瘤が付いているのではなく、大小の瘤がくっつき合って、細長い軟体動物の肉体を形作っていた。
生理的嫌悪感を催させる怪物体の表面は、透明な粘液でコーティングされていて、巻きつかれた両脚全体の肌にねっとりと塗りつけられる。
ジュリュ、ニルルル、ネチュ！
かつて目にしたことのない奇怪で醜悪な姿を、茉奈が知っている言葉で表せば、ひとつしかない。
「触手！」
ホラー映画やゲームでしか見たことのないものが、自分が腰かける椅子からうじゃうじゃと生えている。
「いやあああっ！」
自分の脚に触れている異形を具体的に認識すると、茉奈は悲鳴をあげて立ち上がろうとした。制服警官時代に気持ち悪い変質者に何人も遭遇したが、悲鳴をあげるのははじめてだ。
だが立てない。両脚に巻きついた触手は糊付けされたように離れず、強靭な力で椅子の上に止められる。椅子自体も床に固定されていて、揺るぎもしない。
「うあああっ！　離して！　ひいいっ、離せっ！」
悲鳴は茉奈の声だけではなかった。他にも五人が円筒の側面から伸びる不気味な触手に両脚を巻かれて、尻を椅子の上に貼りつけられている。合計六人の嫌悪の叫びが、スタジオに華々しい不協和音を作った。
ダークブルーのスーツの茉奈。
銀髪の婦人警官。
額に茶色の模様を描いたテニスプレイヤー。
頭上に光る輪があるファーストフードの店員。
真紅の瞳のチアリーダー。
肩に小動物を乗せたキャンペーンガール。
六人がともに両腕で触手を引き剥がそうとするが、柔らかい軟体はびくともしない。見悶えして椅子から離れようとしても、触手に捕えられたまま。
額に角がある看護師と、耳が尖ったキャビンアテンダントだけが、触手の出ない椅子から離れた場所で立ちつくしている。
「はずれの二人は失格でーす！　ノットラッキー！　さようならあ！」
二人の姿が消失した。
「当たりのラッキーな六人は、しばらく特別製の触手椅子を楽しんでください！　その姿は、全国のテレビの前のみなさまにご覧になっていただきます！」
茉奈の両脚を緊縛する触手がぐねぐねと動き、強烈な力で太腿を左右に引っぱられる。
正面に茉奈担当のカメラマンが姿勢を低くしてまわりこんできた。獲物を狙う獣の雰囲気をまとって、手にしたカメラを遠慮なしに茉奈の下半身へ突き出す。
放送中の映像を出演者に見せるモニターに、広がっていく両脚の間のアップが映った。
「馬鹿っ！　撮らないでっ！　やめてええっ！」
茉奈は急いで両手を太腿の間に入れて隠そうとする。だがもっと素早い触手が両腕に巻きつくと、強引に高く持ち上げられた。
腕の触手を振りほどこうとしても、柔軟な組織に力を吸収されて、拘束から逃れられない。
茉奈の抵抗もむなしく脚が大きく広げられると、マイクロミニの裾がずり上がり、純白のショーツがモニターにさらされた。
さらに触手がより意図的に動き、尻の下にあるスカートの裾を後ろへ引っぱられる。
「やあああっ！」
尻の下にあった裾も、ウエストの位置までまくり上げられて、下半身の前も後もショーツが完全に剥き出しにされた。
茉奈自身がいつもの下着とは違うと感じながら、直接見て確認してはいなかったショーツが目に入る。
（あああ、小さい！）
あらためて衝撃を受けた。
茉奈が普段着用するショーツよりも、はるかに面積が小さい。薄い布が恥丘のふくらみにぴっちりと貼りついて、中心を走る縦の溝までうっすらと浮かび上がっている。
「茉奈選手のショーツから、アソコの形がうかがえます！　勇ましい女刑事のアソコは、護りの堅い恥ずかしがり屋のようですよ！」
ミスター・ラッキーの陽気な描写がスタジオに響き、茉奈の羞恥心を掻きむしった。
（恥ずかしい！　恥ずかしいっ！　恥ずかしすぎるうっ！）
茉奈は男に下着を見せる経験も、見られる体験もない。下着丸出しの下半身をカメラで撮影されて、テレビ放送されるなど、想像を超えている。
（こんな酷いテレビを、いったい何人が見てるの？）
茉奈の背後にミスター・ラッキーがまわって、いっしょにカメラに映ると、得意満面の顔で告げた。
「この番組は全国ネットの高視聴率番組ですよ！　プレイヤーのみなさんはラッキーにも、日本全国のテレビの前の一億人以上に向かってパンツを丸出しにしているんですよ！」

「一億人！」
茉奈だけでなく、六人全員が悲鳴をあげた。
他の五人も触手の力で強引に開脚させられ、ミニスカートがウエストまでずり上がり、ショーツを全開にさせられる。
この世界の男の好みなのか、あらわになったショーツは六枚すべて純白。どれも小さく、股間に密着している。
六人の太腿の間にはひとりずつカメラマンが入りこみ、ショーツを接写しつづけた。
テレビ画面でアップになる六枚の鮮やかな白い布に、赤い触手が迫り、先端が触れた。
ヌチャッ。
と、いう音色が、実際以上に大きく茉奈の鼓膜を打つ。
触手の表面からじゅくじゅくと滲み出る透明な粘液が、ショーツに染みこみ、素早く広がり、布の大部分を半透明に変えていく。
透けるショーツに恥丘の肌の色が現れた。恥丘に刻まれた縦の溝がますます鮮明になり、カメラに撮られる。
粘液が布を染み透り、直接皮膚に触れた。恥丘のふくらみがねっとりと濡らされ、ぬるま湯のような温度を感じる。
「あ、な、なに!?」
触れている粘液は生ぬるいのに、恥丘の肌がいきなり熱くなった。熱をはらんだ皮膚が、乾いた筆先でなでられているようにチリチリジリジリしてくる。
漆みたいにかぶれたのかと思ったが、触手の粘液を塗りたくられている左右の太腿は、赤く腫れていない。同じ粘液を塗りつけられながら、女の急所部分だけが変化を見せる。
（このチリチリして、ウズウズする感覚は……）
性体験がいっさいない茉奈だが、オナニーは経験していた。好んで自慰をするわけではないが、どうしても身体が疼いて、胸や股間に指を這わせてしまうときがあった。
とはいえ茉奈のオナニーは、女性器の内側を指でそっとなでるだけ。膣に指や何かを挿入した経験は一度もない。指を入れると処女を失う気がして、できないでいた。
自慰は悪事ではなく、人間としてあたりまえのことだと知ってはいても、自分の手で快感を得た後には、いつも恥ずかしい罪悪感が残った。
（オナニーをしたくて我慢できないときの疼きに似てる。粘液が媚薬だというの!? ありえないのに！）
警察官になってから違法薬物について勉強した。アダルトビデオでは凄まじい効果を発揮する媚薬がよく使われるが、現実にはそんな便利な薬品は存在しない。ハンカチで鼻と口を押さえれば即座に眠る非現実的な麻酔薬と同じだ。
「プレイヤーのみなさんの発展途上世界には即効の媚薬はないかもしれませんが、この世界にはあるんですよ！ たっぷりとエロい効果を堪能してください！」
ミスター・ラッキーの大声とともに、股間に迫る触手の先端から、透明な粘液がビュッと噴出した。
ビチャッ！
ショーツに大量の粘液がぶつかる。一部が跳ね返って左右の内腿や椅子に振りかかったが、大部分は恥丘を被うショーツに染みこんだ。新たな粘液が秘裂の狭間に入り、ヌルヌルと奥へ潜っていく。
「ひいっ！」
今まで出したことがない種類の声が、喉の奥から出てしまった。
「ああひいいいっ！」
衝撃が恥丘の内側から、腰の奥へ伝わり、背筋を駆け昇る。股間から脳へ直結する神経そのものが、媚薬に侵されたようにズキズキと疼く。
媚薬ショックが体内に広がると、身体中の血液が、轟々と音を立てて下半身に流れこみ、体温をさらに高く上昇させる。
（こ、これがこの世界の媚薬なの！ ああ、激しすぎる！）
「はああっ！」
喉からせり上がってくる熱い吐息とともに、さらなる肉体の異変が目に入った。半透明のショーツ越しに、肉唇がひとりでに開く様子が見える。
自分の股間の前にひざまずくカメラマンの顔に、目標を捕えたという毒々しい笑みが現れた。
（撮影されてる！ わたしの恥ずかしい変化を放送されてる！）
カメラの向こうから一億人余りの視聴者が見守る前で、恥丘の中央がどうしようもなく開いていく。
（あああ、開く。どんどん開いていっちゃう！）
思わず声が出た。
「こんなのはじめてっ！」
自分がアダルト作品のヒロインの台詞じみた言葉を口走っているとは気づかず、肉体の恥ずかしすぎる反応に身悶えてしまう。
「おっと女刑事の茉奈選手のおまんこが開いた！ おまんこテレビ大公開だあっ！」
ミスター・ラッキーの叫びを聞いて、茉奈はビクンッと両肩を震わせた。
（ひいいっ！ 酷い呼び方をしないで！ 恥ずかしすぎる！）
テレビ公開陵辱番組の犠牲になっているのに、司会者が女性器を表す放送禁止用語を堂々と口にするとは思っていなかった。その下卑た言葉で自分の秘密の場所を呼ばれると、貶められたようで、ますますせつなくなる。
「六人の中で最初に開花したラッキーおまんこを、テレビの前の一億人のみなさまも、よおくご覧ください！」
モニターの画面が縦に二分割された。ひたすら股間を狙うカメラマンとは別に、もうひとりのカメラマンが茉奈を

撮影している。

画面の右側に茉奈の全身が映った。左側には限りなく透明なショーツが貼りつく女性器の大アップ。

「ひいっ！」

ペニスが外に出ている男と違って、自分自身の女性器を見たことがある女は少ない。茉奈も自慰のときに指先で触れるが、肉唇の内部を生まれてはじめて目撃した。

透ける薄布越しに、秘唇が左右に大きくほころんでいた。これも媚薬の効果なのか、まるで両側から何かでつまれて引っぱられているようだ。

満開の肉花の中では、充血してぷっくりとふくらんだ襞が、肉質の花弁となって咲き誇っている。

肉襞の上部には、今も包皮をまとったクリトリスがツンと尖る。

肉襞の狭間にある膣口もゆるんで、ヒクヒクとわなないた。

女性器のすべてが触手の透明な粘液に濡れて、スタジオの照明の光を浴びて、キラキラと輝いている。

（これが、わたしの！　恥ずかしい！　あああ、わたしの中にこんなものがあるなんて……）

自分の身体の一部とは思えない繊細で精密な造形に、酷い状況にもかかわらず息を呑んだ。

奇妙な感銘も、ミスター・ラッキーの卑猥な言葉に汚される。

「さあ、まずは濡れ濡れのおまんこを愛撫して、茉奈選手にたっぷりと鳴いていただきましょう！」

カメラが一本の触手にフォーカスした。撮影される触手の先端の瘤がうねうねと蠢き、粘土アニメのように形を変えて、舌そっくりになった。

触手の舌が、ショーツの上から、開きっぱなしの女性器をペロリと舐め上げる。

「はっひいっ！」

快感が爆発した。ハリウッド映画の大爆破シーンさながらに、自分の肉体の中に巨大な爆炎が噴き上がる。

高熱の炎に炙られて、椅子の上で身体がガクガクと痙攣した。手足を触手に拘束されていなければ、椅子から転げ落ちているだろう。

ダークブルーのスーツから突き出す二つの豊満な乳房が、上下左右に華々しく揺れる光景が、二分割の画面の一方にさらされる。

「ひあああ……」

（た、たった一度、ショーツの上から舐められただけなのに、気持ちよすぎるう……）

またショーツ越しに上から下へ舐められた。

ペチャ、リュルル、ルロッ！

濡れた音色が聞こえて、新たに鮮烈な悦楽が生まれる。激しい電撃が股間から放たれ、身体中駆けめぐった。

「ふっあああ！」

（嘘っ！　気持ちいい。オナニーより何倍も気持ちいいのっ!?）

自分でコントロールできる自慰の快感とは全然違う。暴走する無人車のように、快感が体内で暴れ狂っている。

（媚薬のせいよ！　そうでなかったら、バケモノに舐められて、気持ちよくなるはずがない……）

自分が異常な快楽に浸る理由を、懸命に搾り出している間にも、感電したように身体が震える。

白いショーツが貼りつく尻が、赤い椅子の上でくねくねと乱舞する。二つの巨乳もブルブルとうなりが聞こえる勢いで、左右別々に跳ねまわった。

「はあああ、こんなのって、おっひいいっ！」

さらに連続して触手の舌が動き、縦横に舐めまわされる。火山の噴火。大津波。パニックになる野獣の大群。崩落する大氷山。次々と襲ってくる快感が、頭の中で様々なイメージとなって閃いた。

「あおおう！　くっ、おふうっ、はうううん！　ふぁぁあああっ！」

触手の舌が踊り、ショーツの上から肉襞や膣口をなぞられるたびに、茉奈は高い嬌声を放ち、椅子の上で妖しいダンスを繰り返す。乳房を猛烈に振りまわし、尻を大胆にうねらせる。

椅子の上で艶めかしいダンスを披露しているのは、茉奈だけだった。茉奈ひとりが、淫らな触手に責めたてられている。

他の五人は手足を触手で縛られて、両脚を広げてショーツをさらけ出すポーズのまま、なにもされていない。

五人とも茉奈が喘ぎよがる恥態を、自分の未来を見るように凝視している。不安にこわばり、戦慄に陰る美貌も、担当のカメラマンに撮影された。

触手の舌の動きが変化するのを、茉奈は感じ取った。舌先がショーツの右側のレッグホールに潜りこんでくる。

「は、入ってくる！　ショーツの中に入った！　いやっ、ああああっ！」

舌が直接秘唇に触れ、女性器の内部に侵入してくる。

ヌチャッ！　ニュムルルウ！

ビチイッ！　ジュクウウッ！

ぬらつく舌肉の感触が、茉奈の大切なものの内側を我が物顔で蠢きまわった。今まで自分の指だけがおずおずと触れていた極秘の花園が、別世界の怪物に蹂躙されている。

「ひいっ、いやあああああっ！　あひいっ！　あっおおおっ！」

心の中は嫌悪感でいっぱいなのに、舌が動くたびにおぞましい快楽の火花が飛び散り、愉悦で身体を染められていく。

自分で遠慮がちに愛撫するときのおだやかな悦びとは全然違う。何倍も大きく、激しく、狂おしい。自分の身体や精神の大事な部分が削り取られて快感に変えられる気がして、恐ろしくてたまらない。

「やっ、やああ、だっ！　ダメエッ！」

望まぬ愉悦の昂りとともに、声が裏返った。

（果てちゃう!? このままだと触手に舐められて果てちゃう！）
オナニーで絶頂と呼ばれるものは何度も体験した。指での優しい刺激にふさわしく、性感がゆるやかに高まり、なだらかな丘のような頂点を迎えるのが常だ。
触手の舐め責めは激しく、はるかに高く険しい山頂へと強引に押し上げられていく。
「ダメッ！ あああ、もうっ、もうダメエエッ！」
茉奈の顔が強烈に引きつり、スタジオの天井をふり仰ぐ。照明が激しく瞬いて見えた。
五人の女たちが目を大きく開き、茉奈のあられもない反応を見つめた。
茉奈の全身を撮影していたカメラが顔を追い、全国のテレビに茉奈の壮絶な絶頂の表情を送り届ける。
女たちの耳に、ミスター・ラッキーとスタッフと観客の耳に、なによりテレビの前の一億人以上の視聴者の耳に、絶頂の叫びが轟く。
「あっおおおおおおうううう!!」
目の前がまばゆい白い光で塗りつぶされ、なにも見えなくなる。失ったのは視覚だけでなく、白光が全身を消し去り、ただエクスタシーの喜悦だけの存在になった。
茉奈の意識の外にある肉体が、絶頂の反応を示した。大きく広げたまま触手に縛られる太腿やふくらはぎがプルプルと痙攣している。
股間を見つめるカメラの前で、膣口がひとりでに開き、透明な蜜液をどっと湧出させた。
すでにどろどろになったショーツに新たな染みが大きく広がり、あふれた水流が垂れて、真紅の丸い椅子をびっしょりと濡らした。
「おおおおおおうううううぅぅぅぅぅぅぅぅ……」
声がかすれて出なくなり、茉奈は頭をガクリと前へ倒した。
顔を撮るカメラマンが床に寝ころび、茉奈の表情を逃さない。
テレビに映るうつむいた瞳は、朦朧（もうろう）とかすみ、だらしなく開いた唇から荒い吐息があふれる。
「……ぁぁぁはあああああああ、あ？」
金ぴかのマイクが、うつむいた茉奈の顔の前に突きつけられた。
「おやおや！ 茉奈選手、言い忘れたことがあるんじゃないですか！」
いまだエクスタシーの波に揺蕩（たゆた）う茉奈は、ぼんやりと疑問に思う。
（あ、な、なに……）
ミスター・ラッキーが満面の笑みで告げる。
「イクと言い忘れてますよ！」
「……」
茉奈は答えられなかった。
『イク』という言葉は知っている。学生時代の女の友人の中には、平気でおしゃべりで『イク』と口にする者もいた。しかし茉奈はとても卑猥な気がして、ひとりのときにも口に出すことがはばかられた。
「プレイヤーは絶頂したときにイクと言わないと、ゲームクリアとは認められませんよ！ ルールで決まっています！」
「……そ、そんな勝手なルール、今作ったのね」
「この番組の第一回からの伝統のルールですよ！ そうですよねえ、観覧席のお客さあん！」
「そうだ！」
「その通り！」
「イクと言え！」
と、大歓声が観覧席に並ぶ男たちから返ってくる。『イクと言え！』と連呼する男たちの馬鹿騒ぎに、茉奈の胸の内に憎悪と嫌悪がこみ上げた。
（下劣すぎる。この世界の男たちは、みんなこうなの!?）
「お客さんのご要望に従って、さっそく茉奈選手にイクと言ってもらいましょう！」
透明なショーツの内側で、触手の舌が二度目の変形を見せた。舌が細く尖って、先端に小さな唇のような穴が開いた。
触手の唇がキスをするようにクリトリスに吸いつく。
「ひゃうっ！」
媚薬まみれの絶頂を迎えて、最大限にしこり勃つ肉の粒が、すっぽりと細い触手の中に包みこまれる。
陰核にぴっちりと触手の内側の肉粘膜が貼りつき、強く吸引された。
「ひっ！ あっひいいいいッッ！」
小さな肉の真珠を根こそぎ引っこ抜かれるような衝撃が、クリトリスから股間に走り、脊髄を貫通して、脳をハンマーで殴られたように直撃した。
「あっおおおおおおおおうう！」
人間の手や口では不可能な異常異形の快感が、茉奈を一気に官能の高みに吹き飛ばす。
ミスター・ラッキーの声と金ぴかマイクが、茉奈に突きつけられる。
「さあさあ！ 茉奈選手はイクと言ってください！ イクと言うんです、茉奈選手！ イクですよ！」
肉体の小さな一点から吹き荒れる快悦の暴風に翻弄（ほんろう）される茉奈の脳に、司会者の言葉が催眠術のように染みこんでくる。
「イクと言わないと、茉奈選手も、同じ日本のチームメイトたちも、故郷へ帰れませんよ！」
「あっ、あああああ」
「言いながらイッちゃってくださあい！」
とどめの言葉で一撃されて、茉奈は禁断の単語を口からあふれさせた。
「イクッ！」
「茉奈選手が言いましたあ！ ラッキーッ！」
観客も大きくどよめき、唱和する。
「ラッキ――――ッッ！」
口から出した言葉に引っぱられて、クリトリスの快楽が上へ上へと積み重

なっていく。
一度崩壊したダムから膨大な水が流出するように、茉奈は屈服の言葉を吐きつづける。
「イクうッ！　イクイクイクうううう――――ッッ!!」
チュポッ！
かわいく淫らな音を立てて、女芯から触手の唇が剥がれた。その動きが最後の責めになり、再び膣口から女蜜が噴出する。
「イックううっ！　はおおおおおうううううッッ!!」
また茉奈の首が、ガクンと前に倒れた。
「はあっ、はあ、あふっ、ふうう、はあああ……」
全身をふるふるとわななかせて、熱い呼吸を連続させる。
「さあさあ！　いよいよ第一ゲームのクライマックス！　茉奈選手に処女を卒業してもらいましょう！」
ミスター・ラッキーの煽りに、またもや観客が歓声と拍手で盛り上がった。
「ついに来たあっ！」
「待ってたぞ！」
「公開おまんこ卒業式だ！」
茉奈は顔を上げて、潤んだ瞳でミスター・ラッキーをにらみつける。
「わたしが処女だと、どうして」
「事前に徹底した調査をしているんですよ！　伝統ある『エロエロ異世界美女ゲーム大会』に参加できるのは、ラッキーな処女だけなのがルールですからね！　処女を確認するのはコンプライアンスです！　ここにいる六人のプレイヤーは全員処女ですよ！　そうでしょう、みなさーん！」
異世界の五人の女たちが美貌をそむけ、うつむかせる。カメラが追いかけて、朱に染まった顔を逃さずに撮影した。
「では全国一億人のテレビの前のみなさまに、茉奈選手が触手に処女をプレゼントする艶姿（あですがた）ご覧に入れましょう！　まさにラッキー！」
ショーツの中でクリトリスを貪った触手が、下着の外に出た。三度形を変えて、瘤が連なる武骨でヌルヌルした元の触手に戻る。
再び触手が、茉奈の股間に迫ってくる。先端の瘤が右側のレッグホールにヌチャッと触れた。
茉奈の全身がビクンッと震えて、今まで保っていた意地を失い、処女の悲鳴をほとばしらせた。
「嫌っ！　こんな形で処女を失うなんて、絶対にいやああっ！」
瘤が蠢き、見た目からは想像つかない器用さで、ショーツを左へずらした。透明になった布がなくなり、カメラの前で女性器が完全に露出する。
茉奈の肉花は二度の絶頂を極めて、鮮やかなピンクに色づき、媚薬粘液と自身の愛液に濡れそぼってキラキラと輝いた。
肉襞はさらに充血して、ぽってりと厚みを増している。触手に吸われてイカされたクリトリスは、痛々しいほどに赤く染まり、今にも破裂しそうに腫れあがった。
「嫌ああ、あううっ！」
ズブッ！
人間的な遠慮も容赦もなく、膣口が赤い瘤触手に強引に押し広げられる。
「はううう！　痛いっ！」
ズビュッ！　ズジュ！　ズリュウ！
人間のペニスとは異なる形状の瘤の連なりが、次々と膣の中に入りこみ、女体の奥へと進撃していく生々しい光景が、日本中に放送される。
「ひいいいっ！　痛いいいいっ！」
媚薬に冒された女性器だが、破瓜の苦痛はなくならなかった。ましてや女体が本来受け入れるモノとは異なる怪物が、無理矢理に潜りこんでくる。
「痛いっ！」
茉奈の苦鳴に、五つの叫びが重なった。他の五人もいっせいに瘤触手を突き入れられた。六人全員が身体をのけぞらせ、縛られた手足を震わせて、激痛を訴える姿も撮影される。
婦人警官が銀色の長い髪を振り乱して叫ぶ。
「ひきいいいっ！　痛いいっ！」
真紅の瞳から涙を流して、チアリーダーが両手の十本の指をそりかえらせて大きくわめく。
「いっ、痛いの！　うあああああっ！」
ファーストフードの店員が、頭上の光る輪をクルクルと回転させて、甲高く絶叫した。
「あぎいっ！　痛ああああい！」
触手の瘤に押し広げられた茉奈の膣口から、鮮血が流出した。赤い触手と椅子が、色合いの違う赤に塗られる。
テレビカメラの前で、六人全員が一生に一度の血を流した。
茉奈の血まみれの股間に、ミスター・ラッキーが顔を寄せて、いっしょにカメラに入った。
「出たあ！　血が出ましたよ！　日本中のみなさん、見ましたか！　全員が処女だと証明されています！　コンプライアンスラッキー！」
大きな赤い花が開花するように、床に六人分の血が丸く広がる。
茉奈の膣の奥まで入りこんだ触手の瘤のひとつひとつから、いっせいに粘液が分泌された。たちまち膣の中が粘液で充満して、血液に混じって膣口からあふれ出た。
「あっ、なに!?　はあああ！」
触手が出す粘液はあたりまえのように強烈な媚薬。処女強奪の激痛が一瞬で、猛烈な快感へとすり替わる。
異物を強引にねじこまれる痛みに悲鳴をあげていた柔肉が、甘美な餌を与えられたペットのように触手に吸いついている。
（嫌だ！　怪物に犯されて気持ちよくなるなんていやっ！　痛いほうがましよっ！）
怪物に初体験だけでなく、破瓜の痛みすら奪われたのが、悔しくてたまらない。人間ですらないものに強姦され

て、気持ちよくなっているのが、あまりに忌まわしい。
（嫌だ！　いやっ！　いやいやいやいやああっ！）
頭の中で否定しても、身体の奥から女肉の喜悦が湧き出してくる。気がつくと、自分の声が苦痛のうめきから、濡れた喘ぎへ音色を変えていた。
「くうう……ああああ……うんっ、んんあっ！」
触手は膣内に収まったまま動いていないのに、喘ぎ声が後から後から喉をせり上がった。
「はあああ、いや、いやだああうんんん、ふわあ、あおっ！」
喘ぎ声の音階が一気に跳ね上がる。今まで膣の中でじっとしていた触手が、回転をはじめた。
「おっひいいいっ！」
グチュルルル！
茉奈の体内に粘つく音を響かせて、触手が右に回転した。連結する大小の瘤が膣肉を引っかけてよじらせる。人間の男のペニスを知らない女体が、人外の快感を刻みこまれた。
「はひいいっ！　ダメッ！　あっおおうううっ！　ダメえええっ！」
ニチャルウウ！　ヌチィイイッ！
触手の回転方向が反転して、左へまわった。膣粘膜が逆にねじれて、茉奈は新たな刺激に襲われ、愉悦の電撃が飛び散る。
「ひいいいっ！　もう、もうおかしくなるうううっ！　おおおうっ！」
四肢を拘束された茉奈の全身がガクガクと踊り狂い、ダークブルーのスーツで二つの乳房が跳ねまわる。
尻肉が激しく椅子にこすりつけられて、キュッキュッキュッと摩擦音をかき鳴らした。
連続して二度の絶頂を極めて、女肉の内外を媚薬漬けにされた茉奈は、早くも三度目の限界に達しようとする。
（ああああ、来る！　また来る！　触手に処女を奪われて、果てさせられる！）
「いやあっ！」
叫ぶと同時に、膣壁が勝手にひときわ強く触手の瘤を締めつけた。
目の前でカメラが自分の顔を撮影しているのはわかりきっている。わかっていても肉体の暴走を止められない。肉体の歓喜の極まる言葉が、口から飛び出すのを防げない。
「もうイクうっ！　ふあああおおおうううっ！　イッちゃうううッッ!!」
茉奈とタイミングを合わせるように、別々の日本の女たちも性感の頂点に到達した。円を描いて座る六つの女体がわななき、エクスタシーを訴える。
「あああ、イクッ！」
「イッちゃうう！」
「ひいい、イク！」
「イクイクイクッ！」
「イクのほおおお!!」
「もうイク！　イクふう！」
六人の美しいイキ顔を、余すところなくカメラが撮影して、日本全国のテレビへ送り出した。
「スーパーラッキー！　全国のみなさん、ご覧になりましたか！　六人のプレイヤー全員がイキましたよ！　さあさあ！　もっとイッて視聴者にサービスしてくださーい！」
ミスター・ラッキーの明るい声に合わせて、六本の触手が前後に動き、六つの女性器をえぐった。六人の美女たちはたちまち新たな肉悦の暴風に巻きこまれて、よがり声を合唱する。
「あひいいいい！」
「ダメへえええ！」
「狂っちゃうう！」
「はっおおおうう！」
「はううっんんん！」
「ほあああ――――！」
瘤だらけの触手がくねりながら前後にピストン運動をつづけ、茉奈たちを次の絶頂へと追いたてていく。
六人ともさらなる高みへ舞い上がり、今度も真っ先に茉奈が叫ぶ。
「またイクッ！　イクのが止まらないいいいっ！　はっあああああああ!!」
わずかに遅れて五人の叫びが次々と後を追った。
「イクふううう!!」
「もっとイッちゃうっ!!」
「おほおおう！　イク!!」
「イックんん!!　はひい！」
「ふっわあああああッッ!!」
美女たちのイキ声が飛び交う中で、ミスター・ラッキーが爽やかに告げた。
「絶頂はつづいてますが、第二ゲームの準備のためにしばらく休憩です！
その間はおなじみ通販のカリスマ、ハッピー安長（ヤスナガ）の『ズバリ特得（トクトク）ショッピング』をご覧ください！　チャンネルはそのままだとラッキー！」
フロアディレクターがカットを叫んだ。
茉奈たちの手足を縛る触手がほどけて、女性器からも触手が抜けた。
六人全員が椅子から滑り落ちて、自身の血液と愛液で濡れる床に転がる。
女たちに大勢のADが群がり、荷物を運ぶようにスタジオの外へ連れて行った。

第二ゲーム

茉奈はひとりひとりにあてがわれた個室の中で、汚れた衣服を脱がされ、シャワーで身体を洗われ、髪を整えられ、メイクされて、同じ服を着せられた。
茉奈はまたダークブルーのスーツの白いシャツ。黒いローヒール。
そして太腿が丸出しのマイクロミニスカート。
第一ゲームの衣装とまったく同じデザインだが、すべてきれいにクリーニングしてある新調のもの。
茉奈も勤務中によく食べるゼリー状の健康食品に似たバナナ味のものを強引に口に押しこまれて、しばらく休むと、驚くほど疲労がきれいに消えた。意識もすっきりする。
（ヤバい成分が入ってるんじゃないの）

抜け忍
椿の散華
ぬけにん つばきのさんげ
―砕ける忠義と恋心―
愛しき人を守護るため、
下卑た試練に身体を穢す……。
小説 NOVEL／下山田ナンプラーの助
挿絵 ILLUSTRATION／恋々

「くっ、もう追手が！」
草木も眠る丑三つ時、漆黒の影が一つ、やや遅れてもういくつか疾駆する。
先頭を駆けていた少女は、たなびく長い襟巻で下半分を隠した美貌に一滴の汗を浮かべた。
闇に紛れる一つ結びの黒髪、それとは対照的な白い肌。目立たなさと機能性を重視した忍び装束を持ち上げる三尺ばかりの大ぶりな胸は独特の歩法によりほとんど揺れず、それより一寸ばかり大きな尻をキュッと上げて彼女は無音で疾走する。
少女の名は椿。この戦国時代に忍者の里で暮らし暗躍する、若く優秀なくノ一だった。
実に一刻ほど前までは。
「抜け忍、逃がすまじ！」
「観念せよ、神妙に縛につけ！」
そう、彼女はまさについ先ほどその里を抜け、そのまま闇夜をひた走っている最中だ。
椿たちは舞鵺流と呼ばれる忍者で、彼らは自分たちの里を領地とする大名と契約し、諜報、暗殺、内応などの調略任務をこなす。
椿自身もそうして、物心ついた時からくノ一として働いていたのだが、のっぴきならない事情で抜け忍となり、こうして元同胞に追われている。
（捕まるわけにはいかないっ……！）
月も出ていない漆黒の闇の中、椿が速度を緩めず音もなく駆けることができるのは、忍者ならではの鍛錬が成せる業。しかし追手もまた忍者であり、そうそう振り切れるものではない。
里を抜けられることは機密情報の漏洩につながるため、里としても抜け忍は絶対に逃がせない。それは椿自身も十分に分かっている。
分かっているうえで、少女は己の信念に従い里を抜けたのだ。
逃げながら手裏剣で追手を減らしていくが、敵は後から後から湧いてくる。
（まとめて始末してやるっ！）
川にかかる橋に起爆札を貼って渡り、追手が橋に到達したところで爆破。
かつての同胞たちは橋ごと急流に流され、遅れて来た敵も足止めだ。
手ごろな草の陰でようやく椿は足を止め、乱れた呼吸を整えた。
「ここまで逃げればひとまず……待ってください信親さま、椿が今お助けに参り……」
「そうはいかぬ。貴様はここで終わりだ」
だが、休む間もなく冷たい声がどこからか聞こえてくる。
ハッとして椿があたりを見回すと、近くの木の枝に足でぶら下がって腕組みしたままこちらを逆さまに睨んでいる男の忍者が一人。
かと思えば次の瞬間には椿の背後に回り、忍者少女は慌てて距離を取る。
「さ、申酉様……いや、申酉っ……！」
銀髪で精悍な顔つきの長身忍者。
里長の側近であり、里で二番手の実力を誇る上忍だった。
「忍びが里を抜けることがいかなる罪に問われるか、貴様も知らぬわけではあるまい」
冷徹な腕利き忍者の申酉は、氷のような瞳で抜け忍を射抜く。
だが、少女は揺らがない。
「それでも、私はっ……決めたんだ、あのお方を助けるって！」
「私情で動く忍びなど、忍びにあらず」
こんなところで死ぬのも、里に強制送還されるのもごめんだ。
自分のすべてを擲ってでも、助けたい男がいるのだ。
とはいえ、自分の実力ではどうあがいても申酉には敵わない。かといって普通に逃げても確実に追いつかれる。
椿は手で印を結び、三つの炎塊を生み出して前方に投擲した。
「舞鵺流火遁、渦炎巻！」
草地に投げ込まれた三つの塊は一気に燃え上がり、螺旋を描いて真上に伸び上がる。
天にも昇る勢いの炎の竜巻だが申酉を攻撃するものではなく、あくまで炎に紛れて逃げるための目くらまし。
だがその程度、上忍には通用しない。
印すら結ばず、彼は静かに呟く。
「――舞鵺流風遁、級長戸辺」
（いけない、これは上級忍術……！）
フッと吐かれた息が、何千倍にも増幅され。
台風もかくやというべき猛烈な突風が椿の炎を煽り返し、使い手の身を焼き焦がしていく。
「きゃああっ！」
「愚かな。逃げられると思ったか」
必死に地面を転がって身体についた火を消し、背中の忍者刀を抜いて逆手に構えつつあくまで逃げるべく距離を取ろうとする椿だったが。
「く……！」
「無駄だ」
一瞬で接近した申酉の分身が少女を蹴り上げ、本体が空中で椿に組みつき垂直落下し脳天を大地へ叩きつける。
「舞鵺流、頽馬落とし」
「あ……っ、が……」
衝撃により薄れゆく意識の中、椿はどうしてこうなったのかと記憶を遡っていった――。
あれは椿がまだ下忍だったころ。
自分たち舞鵺流忍者を抱える大名の隣国に潜入せよとの任務が里長より下った。
その国を治める大名、姉ヶ崎保親は酒と女に溺れ、軍事にばかり国力を注ぐ暴君の見本のような男で、それに伴いくノ一の中で最も若くかつ豊満な体型をもつ椿にその任が与えられた。
目的は、彼の持つ秘宝。
応仁の乱以前に彼の先祖によって里から奪われし七つの宝は、忍者が使えばさまざまな力をもたらす。
それさえあれば自分たち舞鵺流忍者は、お抱え大名の天下どころか自分たちで日ノ本全土を掌握することも可能な代物。

著者近況
平成最後のニジマガに参加させて頂き光栄です。時代は移ろえどエロは不滅、戦うヒロインが敗北し陵辱されるのもまた不滅……！　そんな感じで、次代でまたお会いできましたら幸いです。

天下の趨勢が定まる前に、秘宝を受け継いでいる暗愚な国主に取り入って情報を引き出すべし、ということだ。

しかしながら椿はあと一歩のところで失敗し、怒号の飛び交う城内を必死に脱出しようとしていたところ、若い男に手引きされ命を拾った。

敵の手の者が遠ざかっていったことを確かめると、その青年は空の酒樽に隠れていた椿に向かって言う。

「そなた、女中の格好だが忍びであろう。その眼光と身体つきを見れば分かる。そなたのような美しい女子が斯様な危険を冒すのは、敵ながら感心しないな」

不覚にもその時、椿は忍びにあるまじき心の動きを見せてしまった。

美しい、と言われたのだ。

物心ついたときから忍者として生き、必要に応じてくノ一らしく色仕掛けこそしていたものの、男性に面と向かって、しかも自分を性の対象として見ずに言われたのはこれが初めてだった。

戸惑う椿に、その青年は名乗る。

「俺は姉ヶ崎信親、この国の次期当主となるべき男だ」

(敵の忍びに名乗るなんて、何考えてるのこのお方……? はっ、もしかして罠? 美しいとか虚言を吐いて、私を油断させて捕まえようと……)

椿は思慮を巡らせるが、それ以上に好奇心が勝る年頃でもあった。

おそるおそる酒樽から顔を出して、声の主を改めて見つめる。

歳は二十を回ったといったところだろうか。元服から数年、すっかり大人の男の凛々しい顔立ちをしている。髪は月代をしておらず、黒髪を頭の後ろでまとめている総髪で、身長も高く美丈夫と言える容姿だった。

(あの豚と猿みたいな暗愚から、こんなご立派な殿方が……)

顔だけ出したまま放心している椿に、忍者が簡単に名乗るものでもないがゆえの沈黙と受け取ったのか、信親と名乗る男は構わず問いかけた。

「……そなた、父上を暗殺しにきたと見えるが」

「えっ、と……」

まだ動揺が抜けきっていない中で問われ、椿はどぎまぎする。

実際はそうではないのだが、信親は構わずに続けた。

「あの男は暴君だ。民は苛斂誅求に涙し、諫言する臣は斬る。このままでは我が国は他国に攻め込まれるを待たず自壊してしまうだろう」

「……」

「俺はな、いずれ父上を追放し、領民や家臣に優しい国を作るつもりなんだ。この国の、ひいては天下の万民が笑って暮らせる世を作る。それが俺の夢ゆえ、暗殺は少し待ってほしい」

まっすぐな瞳で、力強く信親は言う。

自分自身に言い聞かせているかのようだった。

(……変なお方。現実が見えてない)

忍者は任務達成のため現実主義でなければならない。ゆえに椿にとって、それはあまりにも夢物語に感じられた。

自国すら傾いているというのに天下など、大言壮語もいいところ。

敵の忍者を助けたことといい、この男にも暗愚の血が流れているのだろうかとさえ思ったほどだ。

しかし、不思議と彼の言葉が胸に残る。

そのまま帰らせてもらった椿は任務失敗を咎められ、引き続き保親の城に潜入することになる。

それは図らずも、椿にとってまた信親に会えるということだった。

もう一度、彼と話をしてみたい。

本来の目的もそこそこに、椿は次の潜入時に彼の寝所を探り天井裏から忍び込んでみた。

「……御免」

「な、何奴! ……っと、そなたは過日の忍び殿……?」

(これは、このお方が本当に乱世を終わらせる器か確かめるため……それ以外に、意味なんか)

そんな逢瀬が、何回か重ねられた。

言葉を交わせば交わすほど、彼のことが分かってくる。

決して何も考えていないわけではないと知る。

本当に乱世を終わらせられるのではと思えてくる。

「なかなか興味深いな、忍びの日々というのは。もっと聞かせてくれ」

「こ、これ以上はダメです。里の掟でっ……」

いつしか、彼と話をしている時には今まで一度も感じなかった不思議な安らぎのようなものを覚えていた。

「おお、見事だな。あんな遠くの的に手裏剣を当てるとは」

「し……忍びならこのくらい、当然ですから。そんな、ほ、褒めないで……」

いけないと思いつつ、この時間が自分のひそかな楽しみになっていた。

そんな中で、あるとき信親はくノ一に一つの問いを投げかけた。

「忍び殿は、戦が終わった後のことを考えたことはあるか?」

「えっ……」

乱世に生まれ、諜報から戦闘まで「戦」のためだけに生きてきた椿にとって、太平の世になってからの自分など想像すらしていなかった。

「狡兎死して良狗煮らるというだろう。戦が終われば、忍びの者たちは弓矢と同じく行き場所がなくなる。俺はそれを望まない」

「……」

「武士も、民も、忍びも。すべての人が笑って暮らせる世を作りたい」

そうして顔を近づけ、若き武士は椿から目をそらさずに告げる。

「特にそなたにはな」

「な、なにゆえ私を」

「そなたと話していると、心が安らぐんだ。ただの忍びでなく、可愛らしい普通の女子だと分かったからな」

優しい笑顔で、信親は言って。

著者近刊 『魔法少女シア 狂愛と搾精に溺れる乙女』『FTB! ～ふたなりちんぽタッグバトル～』 好評発売中!

くノ一は、そのとき恋に落ちた。
（私は……この方にお仕えしたい……里のためや自国の殿のためじゃなくて、この優しい殿方に……私の忍びとしての力をすべて捧げてでも、このお方の天下を……）
心の底から仕えたい男。なんの見返りも求めず自分の力を捧げたいと思える主君に、彼女は初めて巡り逢えた。
「私は……椿」
「はは、さすが忍びだな。武士としては物騒な名前だ。……しかし、よい名だ。ようやっと名乗ってくれたな、椿殿。俺を信じてくれたと……そう考えてよいか」
赤面しながら頷く忍者美少女。
これが忠義というものであり、それ以上に恋というものなのかと自覚する。
忍者にあるまじき感情。くノ一らしからぬ少女の想い。
しかしながら、この戦乱の世で簡単に鞍替えすることなどできない。まして自分はくノ一、里を抜けることは忍者として最大の禁忌だ。
越えがたい壁はあるが、それでも諦められず。
椿はそのまま、思いきって思いの丈を打ち明けてみた。
「それはまことか？　そなたほどの忍びがいれば色々と心強い。その時は是非、俺に力を貸してくれるか」
仮にも敵国の忍びの言葉に罠であるかと疑うかと思いきや、信親は意外にも椿の本心を信じてくれた。
今は乱世だ。綺麗ごとだけでは天下に手は届かない。ならば汚れ役はすべて自分が引き受けるから、信親には王道を堂々と進んで欲しい。それが椿の忠誠心であり、恋心だった。
今すぐには難しいが、いずれ必ずこの男のもとに馳せ参じたいと――。
しかしそんな折、信親が何者かによって捕らえられたとの噂が流れてくる。
いてもたってもいられなくなった椿は、彼を助けたい一心に衝き動かされ、月の出ない夜を待って里を抜け出したのだ。
そして――。

「気がついたか、椿よ」
重々しい声が混濁した脳に響き、そこでくノ一は意識を取り戻す。
（ここは……里長の忍者屋敷……）
申酉によって意識を奪われたのち、自分は彼によって里へ連れ戻されていたらしい。
目を開けると自分は忍び装束のまま全身を縛られていて、目の前には長い白髪の老人がいた。
六十を超えているがとんでもない威圧感を放ちその体躯は隆々、眼光は大の男も失神させてしまうほど。
この舞鵐流の里の頂点に立つ忍び、丑寅だ。
「里を抜けるなどあってはならぬもの。椿よ、なにゆえ愚行に走ったか」
「う……そ、それ、は」
恋心から――などと言えるだろうか。
忍者が恋をしていたなど、許されるものではない。そもそも抜け忍の時点で死に等しい罪なのだが、なおのことこの厳格な里長に吐露しづらい。
「……数多の命を奪った罪に耐えきれず、出家しようと……」
「わざわざ夜陰に乗じてか」
「……」
信親の身も案じ、もっともらしいことを嘯いてみる椿に丑寅は不吉な笑みを浮かべた。
「ククク……ではその言葉がまことか、この男にも訊こうではないか」
パチンと里長が指を鳴らすと襖が開き、そこから下忍たちによって何かが蹴り転がされてきた。
「の、信親さま！」
あろうことか、彼こそ椿が想いを寄せていた姉ヶ崎信親その人。暴行を受けたのか、身体は痣や擦り傷だらけだ。
いったいどうして彼がここに、なぜ自分たち身内に捕まっていたのかと、椿の脳は混乱し停止寸前に陥る。
「う、ぐ……椿、殿……」
幸いにも意識はハッキリしているようだ。しかしこの事態、すべて罠であったことは明白。
「どうしてこんなこと！　里長、今すぐ信親さまの縄をお解きください！」
「ほう、自分の縄はよいのか。それにもう『様』づけとは見上げた忠誠心よ。すっかりこやつが主君ということか」
若き国主の首を掴み、そのまま腕力のみで空中に持ち上げる丑寅。信親は苦しそうなうめき声を上げる。
「貴様がこの男に恋慕の情を抱いていることなど、申酉によってとうに伝わっておったわ。忍び風情が愚かしい」
「っ……」
本来くノ一は色仕掛けなどでターゲットの男に近づく際、相手に惚れて寝返ったりしないように監視役の忍者がついていることがほとんどだ。
その例に漏れず椿の任務の際には申酉が気配を消して同行しており、以降の密かな逢瀬の際も、彼はそれを子細に丑寅へ報告していたというのだ。
（それじゃあ、私が信親さまにお仕えしたいって言ったことも、全部……）
すべて筒抜けだったことに、椿の顔色が真っ青になる。
「感情を得た忍びなど要らぬ。ゆえに罰せねばなるまい」
「……それで信親さまを捕まえて、私に里を抜けるよう仕向けて……!?」
今度は怒りが湧いてくる。
自分の心を弄び、大切な人を傷つけて捕まえた身内たちに。
「なら、最初から私だけを罰せばよいでしょう！」
「見せしめよ。忍びがあらぬ感情を抱けばこうなるという、な。己の使命を忘れた結果がどうなるか、その目でしかと見て悔いるがよかろう」
「う、ぐぁ、あああ……！」
その言葉とともにギリギリと信親の首を絞め上げていく丑寅。
老齢ながらも伝説の忍びとさえ言わ

れる里長の膂力は尋常ではなく、片手で大の男を持ち上げて絞殺――どころか、首の骨をへし折ろうとしている。
「や、やめてぇ！　私はどうなってもいいから、信親さまだけは！」
椿は反射的に叫んでいた。
（このお方はいずれあの国を治めて、民を幸せにするんだ……ううん、きっとその優しいお心で、天下だって掴むんだから……）
今ここで彼を死なせてはならない。
もとより自分は忍び、未来の天下人と比べて命の重さが明確に違う。
「フン……」
その言葉を受けた丑寅は、小荷物か何かのように信親を床へ投げ捨てる。
「ううっ、信親さま、お許しください……私が、忍び風情が、あなた様に過ぎた想いを抱いたせいで……っ」
縛られたまま愛しい男へ這いずって涙ながらに詫びる椿だったが、そんな感傷に浸る暇さえ抜け忍には与えられない。
「では、貴様の覚悟のほどを問うとしようか。これよりの試練に耐えられし暁には、望み通りその男ともども解放してやろう」
「……試練」
「左様。貴様とて覚悟の上で里を抜けたのであろう。それを吾輩に示すのだ」
試すような視線を向ける丑寅。
もとよりこの状況からまともに逃げ出すことはかなわないし、抜け忍は本来死あるのみの重罪だ。
わずかでも助かる可能性があるなら、やるしかない。
（なんでもいい……私はこのお方を守るために、自分のすべてを捧げる）
「承知しました……その試練、お受けいたします」
「ククク……見上げた志よ」
試練に挑む、と椿が宣言したことを確かめると、丑寅は今一度指を鳴らした。
「まずはここに集った下忍どもを満足させてみよ」
「ま、満足、って……」
丑寅の合図で集められ、ずらりと並んだ男忍者たち。才を認められて中忍に昇格したばかりの椿にとっては、まとめて追い越した格下の男どもだ。
意図するところは分かっている。彼らに奉仕し、射精させよというのだ。
「せ、せめて信親さまのいないところで……」
「ならぬ。分かっておろう、これは忍び風情が感情を抱き、里を抜けようとした貴様への罰の意味も兼ねておる。一度試練を受けると口にした以上、貴様に拒む道理はない」
懇願するが、もちろん通らない。
縄を解かれた椿は愛しい人が見守る中、好きでもなんでもない格下の男たちのペニスに奉仕し、満足させなければならない。
（こ、これは信親さまをお救いするためっ……そのためならどんなに汚れたって、私は構わない）
「へへへ、いいから早く始めてくれよ。もうチンポがビンビンだぜ」
「さ、触らないで……ひっ！」
次々と露出させられる、下忍どものペニス。どれもこれもが女を犯すための準備を整えて斜め上にそそり勃っており、それだけで処女くノ一は女としての本能的な恐怖に身が包まれる。
（ううっ、こんなの……信親さまも見てるのに……）
嫌だし怖いし恥ずかしいが、彼のために退くわけにはいかない。おずおずと手ごろなペニスに手を伸ばし、想像以上に熱かった肉棒を握り込みぎこちない手つきで前後にしごく。
「おおっ、いいぜぇ……嫌そうな顔もまたそそるな」
「すぐにチンポが欲しくてたまらなくなるぜ、女ってのは最後には男に屈服する生き物だからよ」
（勝手なこと言って……！　誰がこんなの欲しがるもんか、今に見てろっ！）
焼けつくような怒りを抑え、椿は懸命に手で奉仕していくがすぐに男たちから注文をつけられる。
「おいおい椿よ、手だけじゃ俺らをさばききれないぜ。せっかくそんなでかい胸乳をしてんだから、こっちでも気持ちよくしてくれないとな」
「ちょっ、やだ……きゃあっ！」
忍び装束越しに、三尺ある椿のバストが下忍に揉みしだかれる。
格下の男に胸を触られるという不快感と嫌悪感が、くノ一に年頃の女の子らしい悲鳴を上げさせた。
「へへへ、きゃあだってよ。村娘みたいな反応しやがって」
「忍者たるものこのくらいで悲鳴上げてどうすんだよ、やっぱ感情を抱いた忍びはダメだな」
が、もちろん下忍たちはお構いなしに椿の豊乳を装束越しに堪能していく。
無数の指が沈み込み、服の上からでも彼らの薄汚い劣情が乳肉の中へ染み込んでいくようだ。ひたすらに気持ち悪く、腹立たしい。
「うっほぉおお、やわらけぇ……これが椿の乳か、手に吸いついて押し返してくるぜ」
「なんつう大きさだ、これで色を使っていたわけだな」
「やだっ、寄るなっ、触るなっ、言うなぁあ……んああっ！」
好き勝手に自分のバストを評する格下の忍者たちに、恥ずかしさとさらなる怒りが湧いてくる。
椿は処女ではあるものの、色仕掛けの際にわざとターゲットの男性に胸を触らせることくらいはあった。
その時は恋人もおらず、任務だからと割りきれていたものの、今はたまらなく不快で気持ち悪いといった感情しか抱かない。
その一方で、一つだけ自分を慮る視線が届いていることも感じさせられた。
「へへっ、ほら見ろよ椿、お前の未来

の主君もその乳に釘付けだぜ」
「羨ましそうに見てやがるぞ、本当は自分も揉みたいと思ってんだろうなぁ」
「あっ……や……信親さま、見ないでっ……」
身動きの取れない信親もまた、彼女の胸から視線を外せないでいた。
この時代、男性は二十を回っていれば子どもがいない方が珍しい。おそらく信親にもすでに世継ぎがいて、女性経験も当然あるのだろうが、それでもやはり若く美しいくノ一の豊満なバストには目を奪われてしまうのだろう。
そんな女忍者の乳房が、無遠慮に格下の下忍たちに揉みしだかれる。
三尺の胸は装束越しに揉まれるだけでなく、服の上から乳首をこね回され、肉棒の先端を押しつけられ、あげくには顔を埋められたりと格下男どもの玩具のように扱われる。
「おおっ、いいぜ椿……一度お前に奉仕させたいと思ってたんだ」
「俺らより早く中忍になりやがって、どうせ里長に媚びたんだろその乳でよ」
「ほら手を止めるな、ちゃんとしごけ」
勝手なことばかり並べたて、下忍たちが椿の全身を肉棒でまさぐっていく。
（覚えてろっ、里を抜けたらお前たちなんかっ……）
反抗的な目つきで格下の忍びたちを睨むくノ一だが、今の彼らにとってはそれも劣情をいっそう掻き立てるものにすぎない。
そして限界を迎えた男たちの下劣な感情が、次々と堰を切って椿へぶちまけられていく。
「うおおっ、出るぞ椿！」
「こっちも出すぞ、その装束にぶっかけてやる！」
どびゅっ！　ぶびゅるるるっ、ぶびゅばぶぶっ、びゅぐるぅ！
「うあっ、やだっ、熱いっ……！」
（く……くそっ、信親さまの前で、こんな奴らの慰み者にされてっ……悔しいっ……でも、耐えなきゃ……）
四、五人の精液を顔に、髪に、忍び装束にかけられ汚され、椿自身の心も穢されていくように思えた。
しかし、下忍たちはまだまだ残っている。長篠の三段撃ちのごとく、射精が終わった肉棒は引っ込んで未射精のペニスがずらりと並んでくるのだ。
「へへっ、さっきはよくも川に落としてくれたなぁ椿。たっぷりお返ししてやるぜ」
「膝に手裏剣をくれやがって痛いのなんの。礼をしなきゃならんよな」
先ほどの逃走時に椿にしてやられた下忍たちも、怒りと性欲をみなぎらせて肉棒を突きつけてくる。
（や、やらなきゃ……こんなの、なんてこと、ないっ……）
必死に気持ちを奮い立たせ、己より弱い男たちの性器に自分から奉仕していく椿。
そうして彼ら全員をようやく満足させ、全身を精液でベトベトにされたところで丑寅は不吉に笑いながら言う。
「ククク、なかなかやる。ならばいよいよ試練の本番と行くか」
「はあ、はあ……ま、まだ何かあるっていうの……」
「――申酉よ」
里長の呼ぶ声に反応したかのように先ほどの襖が再び開き、今度は豪奢な着物をまとった男と申酉が入ってくる。
その「客人」に、椿は驚愕した。
「なっ……どうして、この男まで」
「おお、儂の顔を覚えておったか。こうして見るとやはり、儂好みの顔と身体をしておるのう」
入ってきたのはかつて自分が篭絡しようとして失敗した、豚と猿を足したようなでっぷりした体格の男。
想い人の父であり暴君の、姉ヶ崎保親だった。
捕らえられて縛られている状態の信親とはあからさまに待遇が違う。
「ぐふふふ、儂も捕らわれたのよ。しかしこやつらの言う通りにすれば親子ともども助けると言うのでな」
「嘘だ！　椿殿、騙され……っ！」
信親が何か言おうとしていたが、一瞬で背後に回り込み喉元に刃を突きつけた申酉によって黙らされ、そのまま猿轡を噛ませられていく。
（まさかこの暗愚も、私への試練に一枚噛むというの……？）
嫌な予感が暗雲のように広がっていく。するとそこで、信親に猿轡を噛ませ終えた申酉が言い渡した。
「かねてよりの秘宝だが、保親殿との交渉の結果、条件次第ではお譲りいただけることと相成った」
「それって……」
「左様、保親殿は以前抱き損なったお前の身体を欲している」
申酉は監視役として、忍びの道に悖る椿の逢瀬を見張っていた。
その中で、実の息子と逢瀬を重ねる椿に対し、保親が並々ならぬ劣情を抱いていることも明るみに出る。
となれば、話は早い。
くノ一ひとりを代償に秘宝を得られるのならば、願ってもない条件だ。
椿が信親との恋に現を抜かしている間に、申酉は保親に接近して交渉を進めていた。
「お前がこの方を満足させることができれば、それにつき秘宝の隠し場所を一つ教えていただける――そのような約定が我らの間で交わされた」
つまり、椿が信親の身を案じて里を抜けたことも、この父子が捕らえられたことも、すべては現在の状況を作り出すべく丑寅によって仕組まれていたことだったのだ。
「分かっているな。お前が秘宝の在り処を聞き出し、我らの手にすべて収むることかなえば、お前と信親は解放してやる」
（くっ……卑劣なっ）
ちらと振り向くと、愛しい男が不安そうに自分を見ている。
彼も分かっているのだろう、目の前でこのくノ一が穢されていく未来を。

（信親さまの前で、汚されてしまうなんて……でもやらなきゃ、私がこのお方をお救いするんだっ……）

この状況下では従うしかない。

かくして、想い人の目の前で抜け忍へ課される「試練」が本格的に始まる。

「ぐふふ、見物も飽いたわ。どれ、その胸乳を堪能させてもらうかのう」

（保親……）

想い人の父でありもっとも触れられたくない男に身体を好きにされるのだ。

こいつさえ射精させればひとまず終わる、それだけが椿の心を支えていた。

「きゃあっ！」

乱暴に精液で汚れた装束をはだけさせられ、サラシで押さえつけられたバストがこぼれ出てくる。その白布も奪い取られると、隠すもののなくなった椿の生乳が男たちの注目の的になり、好色の視線と声が一極集中する。

「ぐふふ、いい乳をしておるのう。さすがはくノ一、乳で男を誑かすこともあろうからなぁ。どれ、触り心地はいかほどかのう」

「う、うるさいっ……勝手なこと言わないでっ……きゃああ！」

三尺、およそ九十一センチの豊満なくノ一バストが、脂っこい掌と太い指で揉み込まれ形を変えていき、白磁のような肌がほんのり紅く染まっていく。

不快感とわずかに混じる快感に、椿は顔を歪めて「んっ……」と声を漏らした。

「たまらんのう、くノ一の乳というものは。鍛えこまれて上を向き、張りがありながらそれでいて無上の柔らかさ。男に揉まれるためだけの一品じゃ」

「う、ううっ……やめてっ、そんなに揉まないでっ……んんっ」

本来ならば一瞬のうちに頸動脈を圧迫し「落とす」芸当もできるのだが、囚われの愛しい人を前に滅多な真似はできない。

とにかく耐える、耐えていれば必ず機は訪れると自分に言い聞かせ、甘んじて保親による乳揉みを受け続ける。

やがて我慢ならぬとばかりに保親は着物の帯を解くと、そこから彼の欲望そのものの器官が露出する。

「ふふ、これほどまでに男の欲を満たすものなれば、儂の逸物もその乳で奉仕してもらうとするか」

バネ仕掛けのように飛び出したそれは、およそ人間の男性の平均を大きく上回る凶暴なモノだった。

一尺一寸はあろうかというともすれば人外のそれに、処女くノ一は「ひっ……」と青ざめて本能的に後ずさる。

「里長に術をかけてもろうたのよ。お主の試練に加担する見返りとしてのう」

陰茎増大の術をかけられている保親の肉棒は、今にも爆発しそうなほどに屹立していた。

「さて、早よう挟まぬか」

「は、挟む、って」

「紅葉合わせも知らぬのか？　このようにして、その胸乳で魔羅を包み込んで奉仕するのだ」

「ああっ、やっ！」

ずりゅずりゅと谷間を往復する、保親の強化肉棒。先の下忍たちにたっぷり出された精液が潤滑油となり、卑猥な音を立てつつも抵抗なく椿の胸が性器となって雄の逸物を受け容れ吐精を促す。

（こ、こんな男に……！　信親さまの命がかかっていなければ、こんなことっ……）

「おぉお、いいぞ椿、お主の乳はまさに男を悦ばせるためだけにあるのよのう、この淫乱な巨乳くノ一め！」

三尺の胸であってもすべてを包み込むことかなわない長大な肉棒、その先端を少女の口にねじ込み、パイズリフェラを強要して快楽を貪る保親。

かねてより執着していた息子の想い人を、息子の目の前で陵辱している功名心と征服感に酔いしれ、中年大名の腰の動きが早まっていく。

（やだ、やだ、やだぁああ！）

「ぬおおおっ、出るぞ射精すぞ椿っ、椿っ、椿ぃいい！　儂の精液をすべてその身で受け止めよっ、おぉおお！」

びゅぐるるっ、ぶびゅぶっ、どぼびゅぶりゅりゅるるるっ！

（う、うああっ、なに、この量っ……まだ、まだ出てるぅ……）

先の下忍たち数十人分、あるいはそれ以上の濃厚な奔流が椿の全身を穢していく。

「うぉお、椿、椿ぃいい！　穢してやるぞっ、儂の精で余さず穢してやるわっ、おぉおお……！」

明らかに秘術により精力増強されたものであり、常人の出せる量ではない。

（止まって、止まってぇ……こんなの浴びてたらおかしくなるっ、これ以上こんな男の精液で汚れたくないっ……）

徹底的に自分のものにしてやると言わんばかりの濁流を全身に受け、汚れていないところがないほど汚汁まみれにされたところでようやく射精が終わる。「ぬふぅうう……」と満足げに保親は椿の胸内からペニスを引き抜いた。

恍惚とする暴君に、申酉が横から静かに声をかける。

「……保親様」

「おお、そうじゃった、約束だな。なれば……」

申酉の見立て通り、保親は秘宝そのものには愛着がないようだ。

忍者にしか使えず、見た目も綺麗なものではないので売ることもできず、ただ先祖からの言いつけでなんとなく隠し持っているだけ。執着していた椿を抱けるのであれば簡単に手放す。

「……行け」

「はっ」

情報を引き出した申酉は下忍たちに命ずると、複数の忍びが秘宝を取りに屋敷から消え、一刻ほどして戻ってきた彼らは申酉に何かを差し出す。

「間違いないな。これこそ里に伝わる秘宝の一、窮奇眼……椿、まずはよくしてのけた」

射精が済んでも名残を惜しむように

延々と保親に胸を揉まれ続け、いまだ困憊している椿は自分の任務達成に喜ぶ余裕もない。
その秘宝はどのみち自分の手に入らない上に、あと六回は任務を果たさなければ自分も信親も囚われたままだ。
「保親様、本日はお越しいただいたばかりでお疲れでしょう。別室を用意いたしましたので、今宵はそちらでお休みくだされ。……『試練』は翌日以降も続きますゆえ」
「おお、そうかそうか。であれば休ませてもらうとするかのう」
取引がまずは成功したことに気をよくした申酉に案内され、保親は着物を整えながらどこかへ消えていく。
残されたのは精液でドロドロになった椿と、依然として縛られたままの信親のみ。
脱出する気力も体力も残っておらず、忍者少女はぐったりしていた。
（う、うう……こんな、ひどいことっ……信親さまの、前で……）
想い人の前で何人もの下忍に奉仕し、白濁を浴び。
加えて我欲の極みである男、それも想い人の父である男に屈辱の胸奉仕からの大量射精を受けて全身を汚濁汁で汚されてしまった。
愛しい人の前で醜態を晒してしまい、消え入りたいほどの恥辱と屈辱にまみれる若きくノ一。
「お許しください、信親さま……ひとえに私が、あなた様をお慕いしてしまったがゆえ、このような……」
とても彼に顔向けできない。
恥ずかしくて、申し訳なくて、情けなくて、涙があふれてくる。
それでもせめてと、椿は彼の猿轡を外して身体の拘束を解く。
しかし自由になった彼の口から出てきた言葉は、椿を叱責するどころか真逆のものだった。
「すまない。俺が未熟なばかりに、そなたには辛い思いをさせてしまった」
「お……おやめください！　信親さまが、謝ること、じゃ……」
目上に謝られるなどただでさえ畏れ多いのに、それが憧れの相手であるとなれば当然戸惑いと、過分なほどの幸福感が沸き起こってくる。
信親は笑って続けた。
「椿殿は、俺のために里を抜けるという並々ならぬ決断をし、今もこうして身を挺して俺の命を守ってくれたのだ。かたじけない」
「あ……わ、私っ……ううっ、も、勿体ないお言葉……ああ……」
温かい涙が止まらない。
こんな状況でも自身より椿のことを案じ、感謝までしてくれる男に椿はますます惚れ込んでしまう。
（やっぱり、私はこの方にお仕えしたい……すべてが終わったら絶対に、里を抜けて信親さまの忍びになるんだ）
どんな屈辱がこの後に襲ってこようが、絶対に折れはしない。
心の底から忠誠を誓い、思い慕う彼のために、椿は絶対に耐えてみせると決意を新たにするのだった。
とはいえさすがに一日ではショックから立ち直りきれないまま、椿は翌日の晩に丑寅の部屋へと呼び出される。
そこで老忍者より申し渡された二つ目の任務に、処女くノ一は身をこわばらせた。
「貴様にもそろそろ房中術を仕込まねばならぬと思っていたところよ。本来ならば吾輩自らが奪うのが決まりなのだが、此度は格好の相手がいるもの。保親と交わり、処女を捧げるのだ」
「っ……」
自分は忍び、それも女忍者だ。くノ一として、くノ一にしかできない任務こそが「色」を使って情報を引き出すことであり、その際には初めてを里長に奪われる習わしがあることも前々から聞いていた。
しかしここにきて椿には、初めてを信親に捧げたいと、分不相応な女の子の感情が生まれてしまっていた。
（よりによって、あんな男と……）
暗澹たる気持ちを抱え、処女忍者は彼の休む部屋へ赴く。
忍者屋敷らしく客人用の閨も簡素な造りではあったが、間取りは広くすでに布団も敷いてあり、保親はその上に寝間着で胡坐をかいている。
「おお、待っておったぞ椿。それも忍び装束とは分かっておるのう」
この格好がもっとも保親の劣情を促すらしい。もちろん忍び装束は機能性の他、敵と鉢合わせした際に男の目を惹き隙を作る目的もあるため多少はそういうところがあるが、それでも彼のねちっこくまとわりつくような視線がただただ気持ち悪い。
「初物を賞味あれということでのう、ここの忍びは客人に対して気が利いておるわ。今宵のお主は儂のものというわけじゃ。どれ、近こう寄れ」
命令されたのでおずおずと椿が近づくと、保親は彼女の腰を掴んで抱き寄せる。
「ふふふ、近くで見ると実に美しいのう。信親などには勿体ないわ」
――そなた、忍びであろう。そなたのような美しい女子が斯様な危険を冒すのは、敵ながら感心しないな――
同じ「美しい」という言葉なのに、どうしてこうも心への響きは違うのだろう。清廉な信親と違い、この男の言葉には自分を犯したいといった下心しかないゆえか。
昨日とは違い、ここにいるのは自分と保親だけだ。逃げようと思えば逃げられる。
しかし信親がどこに捕らえられているのか分からない上、姿はなくとも監視役の上忍、申酉の気配がある。
（今からすることも、見られてるんだ……）
結局、逃げることはできないのだ。
この醜悪な男に抱かれるほかに道はない。

「ぬふふ、まずは昨日も堪能した胸乳を揉ませてもらうかのう。あの柔らかさが忘れられぬのじゃ」
　またも装束の前を広げられ、サラシを解かれてくノ一の豊乳があらわになる。それに保親はいきなりしゃぶりつき、顔を胸に埋めて狂ったように乳内で暴れる。
「ひ、ひいいっ！」
「むほぉおお、乳、乳っ、椿の乳よぉお！　たまらん、たまらんのう、これじゃのう！　この大きさ、張り、弾力、そして何より柔らかさ！　幾人もの女を抱いたが、お主こそが至上の乳よ！」
　巨大な赤子のように顔全体で胸に甘える保親に、生理的な嫌悪感さえ覚える。執着心が尋常ではなく、背筋に冷たい物が奔る。できるなら今すぐ逃げ出したい。
　存分に顔全体で椿の胸を堪能した後、彼は彼女の下半身に手を伸ばしていく。
「さてと、昨日は乳だけであったが」
　装束は丈が短く生足が覗いている。その短い裾を広げると、くノ一少女の純潔を守る最後の一枚――純白の褌が露出する。
「やっ……」
「むふふ、やはりくノ一には褌が似合うのう。どこまでも儂の好みを熟知しておるわ」
　恥じらいに身をよじるも、腕を押さえつけられてしまう。
　まじまじと顔を近づけ、褌に覆われた股間を凝視する保親。
　布地越しに太い指を縦に這わせ、秘裂をなぞっていく。感じたくもないのに女の敏感な部分を愛撫され、忍びの口から艶声が漏れる。
「んっ、あぁ……」
「ぬふふ、褌越しにスジをなぞられて感じておるのか。淫乱くノ一め」
　たちまちのうちに純白の褌にシミができ、男を勃起させる雌の匂いが閨に広がっていく。そして下から上へと、保親は汚い舌で褌の上から椿の秘所をベロリと舐め上げた。
「ひっ、やぁああ！」
「んふぅ……褌越しに舐め上げる女陰の味もまた乙なものよのう。どれ、次は直に」
　褌をずらされ、ついにくノ一の純潔部がお目見えする。あまりの羞恥に「やっ……見ない、で……」とか細い声を絞り出すのが精いっぱい。
　どんな場所にも潜入し、幾人もの大名や武士を暗殺してきた冷徹にして有能なくノ一にしては、あまりにも弱々しい抵抗だった。
「ぐふふふ、ぴっちりと閉じておるのう。これぞ純潔、未通女の証よ」
　そう言って保親は、今だけしか味わえない少女の清らかな雌穴に顔を近づけ、狂ったようにしゃぶりつくす。
「はむっ、じゅるるるっ、じゅぶっぞぉおお！」
「いっ……やだっ、やめて、直接っ……いやぁああ！」
　気持ち悪い。
　気持ち悪い。
　なのになぜか、どこかで気持ちいいと感じてしまっている。
　こんなことがあっていいはずがないのに、女の快楽を抑えきることができない。
（な、なに、私の身体、おかしい……こんな奴に舐められて感じるなんて）
　処女肉丘を味わい上げて興奮の極みにある保親は、そこで一日ぶりとなる巨大ペニスをズルリと取り出す。
「ふふ……さればいざこそ、儂の魔羅でお主の初物を頂くとするかのう」
「っ……」
　ごくり、と椿は唾を飲み込む。昨日の段階で丑寅にかけられた肉棒肥大および精力絶倫の術はまだ解けていないようだ。
（あんなモノが、私の初めてを奪うというの……）
　元のサイズであればまだマシであったろうが、これから起きる惨劇に気分が悪くなる。
　忍者少女が黙っていると、保親は機嫌を悪くしたかのように言う。
「ほれ、いかがしたのだ。儂が魔羅を出したのならば、お主は女らしくねだらぬか」
　そもそも、無理やり犯すつもりであろうにどうしてこのように和姦であるかのように仕立て上げるのかの意図も分からない。
　なにより、自分から憎い男のペニスをねだるなど、信親を裏切ってしまうようでたとえ演技でも口にしたくない。
　焦れている処女くノ一に、保親はあからさまに苛立った口調で言い放つ。
「そうか、そこまで嫌だと言うのか。もうよい、興が醒めたわ。嫌なら下がるがよい。任も果たせぬくノ一めが」
「っ……」
「お主のせいで儂も、信親も殺されるのだ。もうよいわよいわ、勝手にせい」
　任務を果たせない、それすなわち彼の言う結果を招いてしまうことになる。
　自分の羞恥や嫌悪感から、愛する主君を喪ってしまう――。
　それだけは絶対にできない。
「ま、待って……なんでもするからっ、だから……その、どうしたらいいのか教えてっ……」
　涙を呑んで、この醜悪な暴君に椿はすり寄った。しおらしく袖をつかむくノ一の姿に保親はニヤリと笑うと、彼女の耳元にでっぷりした唇を近づけて恥ずかしすぎる言葉を囁く。
「……っ、く……」
　もう迷っている時間はなかった。ずらされていた褌をことさらに横へ押しやり、あらわになった女陰を広げて。
「お、お願い申し上げます……保親様の逞しい……お、おちんぽを……椿のいやらしい女陰にお恵みください、ませっ……」
　処女忍者は声を震わせ、そう言った。
（ううっ、恥ずかしい、こんなこと言わせてっ……最低っ、こいつは最低な男だっ……）

このような恥ずかしいおねだりまで強要する保親に、どうして恋慕の情など抱けようか。憎悪ならいくらでも湧いてくるのだが。

（絶対に殺してやる……！）

しかしその言葉がよほど必要だったのか、彼は満足げに頷いて怒張しきった雄の象徴を近づけていく。

自分は今から犯されるのだ。

操を守れなかったのだ。

心の中で未来の主君の顔を思い浮かべながら、せめて目の前の下衆に負けまいと強気で保親を睨む椿。

それが彼の、強い女を屈服させたいというねじれた願望を煽るものだとしても。

「おおっ、お……なんという狭さ、これをかき分けて……ふんっ、ぬぅ！」

「あ……ああっ、が……！」

だがその表情は、彼の巨大肉棒がねじ込まれた瞬間に崩れ去った。

焼けた鉄の杭を打ち込まれたかのような鈍痛と、メリメリと何かが引き裂かれる鋭い痛み。

（こ……これが、私の初めて……信親、さま……）

捨て去ったはずだ、感情など。

忍びが忍びたるために、最も不要なものだったはずだ。

あのとき彼に出会ってから、彼の思いに触れてから、自分は弱くなってしまったのだ。

今もそうだ。

破瓜の痛みなど、これまでの厳しい修行に比べればそれ自体はなんということのない痛みのはずなのに。

今はあまりにも痛くて、辛くて、涙があふれてくる。

「ぐふふ、奪ってやったぞ、このくノ一の初物を儂が！　お主の処女を奪ったのは息子ではない、この儂なのだ！」

「う、ううっ……こんなの、あんまりだっ……」

満足この上ないといった保親に反して、椿は涙が止まらない。

自分の初めては信親に捧げたいと思うようになった矢先に、それをこの最低な暴君によって淡い恋心ごと引き裂かれたのだ。

（お許しを……お許しください、信親さま……）

「おぉお……それにしても、なんという締めつけか。さすがは鍛えられた忍び、具合がそこらの女とは全く違うわい。それでいて肉のヒダがうねり、膣全体で魔羅に吸いつき精を根こそぎ搾り取ろうとしておる……なんたる淫乱な雌膣、気に入ったぞ椿……！」

初物を奪い、処女膣の感触に驚きつつもその絶品さに打ち震える保親。

ブルっとした腰の震えが肉棒を通じて椿の膣に伝わり、気持ち悪いことこの上ない。

「そうじゃこれじゃ！　これが儂のものとなったのよ！　椿、お主は儂のものじゃ！　儂の女じゃあ！」

「くうっ、うう……！　うるさいっ、誰がお前の女なんかにっ……」

勝手に犯しておいて所有物扱いする振る舞いに、怒りと殺意ばかりが募る。

これが信親であればそれこそ彼の私物として、ボロボロになるまで使ってほしいと心の底から願えるのに。

「あんたなんかにっ、身体を……たとえ処女はあげても、心までは渡すもんかっ……」

「ほう、まだ生意気な口をききよるのう。じゃがいつまでその減らず口が叩けるか、とくと見せてもらうとするか」

気持ちだけは負けてはならないと、男の太いものを受け容れながらも涙目になって保親を睨みつける椿。

しかし、殺気をほとばしらせても卑劣漢はひるまず言ってのけ。

「さればその心が砕けるまで、丸太で城門をこじ開けるがごとく突いてやるとするかのう！」

「何を……んあっ、あああ――っ！」

そしてその後には、暴力的な快感が襲い掛かる。

それも一回で終わらず、二度三度と連続して。

保親の巨根が、椿の膣内を前後し子宮口を力任せに叩き続けるのだ。

「どうじゃ！　儂の強化された魔羅は！　お主の奥の、感じるところに当たるじゃろう！　ふん、ふんっ！」

「い、いやっ、やめてぇえ！　なんでっ、こんな、やだぁああ！」

気持ちいい。

嫌なのに気持ちいい。

この男の醜悪で巨大なモノが、自分の一番奥を抉ってくるのが気持ちいい。

「たまらんのう、城と女を攻め落とすのは！　難攻不落であればあるほど面白い！　攻めて攻めて、攻め落とすまでの過程、それがなんとも武士として、男としての支配欲を刺激するのじゃ！　どうじゃ椿！　そろそろ身体を、その心も明け渡す気になったか！　ふんっ！」

「ああっ、ああっ、あぁああ！」

（な、なんでっ、私の身体、こんなので気持ちよくなってぇ……！　こんなはずっ、こんなはずないのにっ、どうしてっ……！）

思い当たる節が一つある。

自分は里長の間に立ち寄って試練の内容を聞かされてから、保親の閨へ赴いている。

よもやそのとき、丑寅に術をかけられたのではないか。感度を数十倍にする淫蕩術か何かを――。

そうとしか考えられない。でなければこのような醜悪な男とのまぐわいで感じるはずもない。

（ダメっ、ダメっ、流されちゃダメぇえ！　こんな男ので気持ちよくなんかならないっ、こんなので感じたりしないいいい！）

必死に自らを律そうとするが、増幅された感度によって脳に送り込まれる雌快楽の激流は物理的に耐えられるものではない。

これは丑寅の術によって感じやすくなっているのと、彼のペニスにも強化

術がかけられているせい。
そう思って耐えようとしても、脳を焼き焦がす快楽がまともな思考を許さない。
「ほれほれ落ちるか!? 落城か椿よ、お主の本丸が快楽でイキ落ちるのか!」
(こ、このままじゃダメっ、快感に流されちゃダメぇ……!)
とはいえ任務自体は「この男を満足させる」ことであり、自分が感じても感じなくても関係ない。
ならばいっそ、ここでは快楽に甘んじてしまってもいいのでは——そんな考えさえ、くノ一の頭には去来する。
(だ、ダメダメ、耐えるのっ、信親さまのためにっ……!)
必死に愛しい男の顔を思い描き、快楽に流されてはならないと踏ん張る。
するとそこで、まるで心を読んだかのように保親は腰の動きを止め、息子に対して言及した。
「ぐふふっ、信親はたわけた男でのう。国の基盤を固め民を安んじるまで色事を絶つなどと言いおってからに、いまだに女を知らぬのだ」
「え……」
元服したら世継ぎを作ることが一般的なこの戦乱の世において、彼は頑なに操を守っているという。
それほどまでに自国の現状を憂い、民のために己を戒めているということだ。彼の篤実さに椿は胸が痛む。
(信親さまが、女を知らない……)
「まあそのおかげで、儂がお主の初物を頂戴できるというものだがのう! ふんっ!」
「うあっ、あああ!」
思考に囚われていた椿に、容赦ない一突きが襲い掛かる。
「どうだ椿、儂の責めは! 愛しい男の父親に犯されている気分はどうじゃ! 天にも昇る心地よさかっ!」
「やっ、あっ、あはぁああ! かっ、感じてなんかないっ、気持ちよくなんかないっ……んぁああ!」
「想い人に初めてを捧げられず無念よのう! お主の純潔は儂が奪ったのだ! 極上の肉体を儂が最初に賞味したのじゃ! ぬおおっ、油断するとすぐに達してしまうわ! この膣は具合がよすぎるようでのう!」
好きになった男は国と民のため克己復礼しているというのに、自分は処女を守れないばかりか初めての強姦肉棒で感じてしまっている。
あまりに申し訳なくて、情けなくて、気持ちよくて、まるで自分が信親を裏切っているかのようだ。
「秘宝を全て忍びどもに渡してお主と愚息が解放された暁には、その膣で奴の初物を食ってやるとよかろう、儂の魔羅でこなれきった女陰(ほと)でのう! ふんっ! ぬんっ!」
「い、いやぁ、やめてっ、やめてぇえ! やだっ、気持ちよくなるのやだっ、やだぁああ!」
これが信親との初めてどうしのまぐわいであればどれだけよかったことだろう。
優しく抱いてくれて、技巧よりも愛する人と繋がれたことの嬉しさから甘い絶頂を重ねていたことだろう。
だが現状は、その男の父親に無理やり犯され、術によって無理やり気持ちよくさせられている。
「そうじゃそうじゃ、簡単に落ちてはつまらぬ! 忍びであろう、忍ぶのであろう! 忍者たるもの耐えねばならぬ、その上で儂のものにしてくれようぞ!」
「んぁああ、あああ……言われなく、たって……あんたなんかに、負け、な……あはぁああ!」
処女が喪われた以上、あとの自分にできることは殺意を力に変えて彼が満足するまで耐え、この悪夢のような夜を終わらせることだけ。
(殺す……必ず殺してやるっ……)
だが夜はあまりにも長く、無理やりねじ込まれる快楽はあまりにも強く、術をかけられた少女が気持ちだけで耐えられるものではどだいなかった。
「ふふふ、そろそろ『来る』かのう」
「ああっ、んっはぁ……ふぇ……?」
すぐ近くに、人の気配がする。
音を立てず忍び足で屋敷を移動しているようだが、気配に敏感なくノ一であれば分かる。これは訓練されていない人間が物音を立てないよう気をつけている「つもり」の歩き方だ。
忍者屋敷において、そのような歩法をする人間など内部にはいない。
いるとすれば——。
「儂の倅(せがれ)がうろついておるようじゃのう、まったく無謀の極みよ」
「う、うそっ!? 信親さま……!?」
彼以外に考えられない。
しかし、いったいどうして——。
「ふふふ、聞いたところによると申酉とやらがわざと牢の鍵を開けておいたらしいな。それでお主を探しているというところじゃろ」
保親が腰を振りながら種明かしをする。信親は椿を助けるため、敵地——それも罠だらけの忍者屋敷の中を捜索しているというのだ。
(う、嬉しいけどっ……こんな私を心配してくれるのは、嬉しいけど……)
その気概に胸が熱くなるも、このような醜態を見せるわけにはいかない。
向こうは自分を信じてくれているのに、自分はこのようなところで嫌いな男に犯されて感じさせられているなど、見られたら言い訳もできない。
「ほれ、そこの障子を少し開けて確かめてみるとよかろうて」
正常位で犯していた保親が肉棒を引き抜き、彼女を自由にさせる。
巨根ピストンから解放された椿は、フラフラと障子の前まで歩いてそっと外の様子を確認し——。
(やっ……嘘っ、本当に……!)
そこに、刀も帯びずに危険な敵地を徘徊している若い侍の影を見る。
やはり気配は彼のものに間違いなかった。このまま気づかれて、淫らな姿

を見られてしまうわけにはいかない。
だのに、保親はここぞとばかりに後ろから再度挿入し、椿に大きな嬌声を上げさせる。
「やっ、やだっ、今はやめっ、やめ……んはぁああ！」
「お主がそのような尻を見せておるから悪いのであろうっ、ふんっ！」
保親に背を向け障子の向こうを見ながら三尺一寸の尻を突きつけていたのだから、もはやこれは後ろから犯してくださいと言っているようなもの。
「おねがっ、今だけでっ、いいからっ、んぁああ！」
「そんなに止めて欲しいのか？　しかしお主のマンコが気持ちよすぎてのう。止めることなどできぬ、わっ！」
どんなに抑えようと思っても、巨根による子宮口への突き上げを受けてしまえば否応なしに嬌声を上げてしまう。
これはもう「女」という男に犯されるための性別であれば例外はなく、くノ一である椿もまた然り。
「んぁああ――！　やめてっ、聞かれちゃうっ、信親さまにバレちゃうぅうう！　んあっ、あはぁああ！」
「想い人の父の魔羅でよがる淫乱忍者だということがか？　さればいっそ、獣の鳴き真似でもするとよかろうて」
依然としてピストンを止めないまま、保親はそう言ってのける。
（わ、私に動物の鳴き真似で喘げっていうの……）
忍者は声真似が巧く、敵に見つかりそうになった場合は犬や馬の鳴き真似で注意を逸らす技術がある。
修行で培った鳴き真似をこのような形で披露する屈辱。
しかし、鬼のような勢いの抽送に声を我慢することはできない。
それに、先ほどの雌声を聞きつけたのか信親の影はこちらに向かって歩いてくる。
（やだっ、来ないで、来ないでぇ！）
のっぴきならない状況だ。
ならばいっそ、思いきり喘いでしまった方がいい――。
「ほれほれどうした、こうしているうちにも倅が近づいてくる、ぞっ！」
「んあぁああ――！　あ、あああ……わんっ、わんっ、わふぅうう！」
ついに快楽が忍者としてのプライドも押し流し、椿は犬のように吠えながら雌声を上げてしまう。
（お願い、戻って信親さま、こんなところ見られたくないっ、こんな姿見せたくないいいい！）
番犬が不審者を追い払うがごとく、必死に獣の咆哮を上げて愛しい男を遠ざけようとする椿。
「おほっ、犬の鳴き真似とな。それもこうして目の前で聞いていても犬と聞き違うほどよ。いやさすがは忍びよのうっ、ならば存分に鳴け雌犬！　ふんっ！」
「んおっ、わおっ、わぉおお――んっ！　わうっ、わうっ、わふぅうう！　わうっ、あうんっ、わふぅうううう！」
（こ、こんな真似……こんなことで感じてぇ……信親さまも、近くにいるのにっ……！）
嫌で嫌で、恥ずかしくて仕方がない。
けれど声を我慢する必要性だけはなくなり、思いきり鳴きながら快楽を貪ってしまう。
声を出すと気持ちいい。思いきり声を上げて犯されると気持ちいい。
獣のように犯されて、獣のような声を上げると気持ちいい。
そんな人としての尊厳の向こうにあった禁断の快楽を覚えてしまい、椿は何度も何度も雌犬の咆哮を上げながら立ちバックで感じまくる。
（ダメ、ダメダメダメほんとにダメぇえ！　バレちゃうっ、バレちゃうっ、淫らなくノ一だって思われちゃうぅうう！）
ここに自分がいないことを知らせるためには獣の声を上げるしかないのだが、それはつまり淫らな雌獣声を聞かせてしまうことになる。恥ずかしさと快楽にまみれながら、無我夢中でくノ一は犬の鳴き真似でよがり狂う。
「どうじゃ！　どうじゃ獣よろしく交尾するのは！　淫乱雌犬にはこうやって犯されるのがたまらんのじゃろう！」
「んおっ、んおっ、わほぉおお！　わうっ、わうっ、わふぅうう！　へっ、へっ、へっ、へえっ……んおほぉおお――！　あぉおおお――んっ！」
成す術もなく快楽に呑まれ、必死に獣の声を上げ、後ろから激しく犯され三尺の胸をだっぱんだっぱんと上下に揺らして乱れる椿。
そんな極限状態の中、襖の隙間からは信親の背中が小さくなっていく様子が見て取れた。
（ああ……信親、さま……お許し、ください……）
痴態を見られることを回避できた安堵感、助けを求めることもできなかった無力感、何より想い人のすぐ近くで何度も絶頂してしまったことの恥ずかしさから、椿は一瞬だけ気が抜けて。
そこを、いよいよ限界に達した男の猛烈なピストンが襲う。
「ぬぉおっ、あのうつけも行ったことだし儂も限界じゃ、お主の膣にしこたま子種汁をぶちまけてくれようぞ！」
「ふぇっ……ま、まって、膣内はっ、膣内はダメぇえ！　やあっ、あっ、あはぁああ――！」
気が緩みかけていたところにこれまで以上の肉棒突きを受けてしまい、背骨が折れるほどの勢いで反り返って特大絶頂への階段を駆け上がり。
「ぬぉおおおお――！　椿っ、椿ィイイイ！　儂の、儂の種汁をっ、儂の精を膣内で受けよっ、うぉおおおお！」
「ああっ、あはぁああ――！　だめ、だめ、だめぇえええ――！」
どぶばびゅぶぶぶっ、びゅぶりゅりゅるるっ、ぼぶぶびゅぐるうっ！
「んぁああ――！　イクっ、イクっ、イっぐぅうう――！　こんな奴にっ、膣内射精されてぇえええ――！」

男のペニスが膣内で爆発し、子宮口に密着されたまま鈴口から迸る熱塊が椿を強引に最大絶頂へと押しやる。

「うぉお……おおっ……これが忍びの女の膣内か……どんな女の女陰よりも精を搾り上げてくるわ、淫らくノ一め……おおっ、まだ出るわ……！」

びゅぶっ、びゅぶるるるっ……。

延々と出続ける精液に、椿は心までも白濁に穢されていく気さえした。

一刻も早くこの悪夢が終わってほしいと、それだけをただ願う。

（悔しいっ……こんな奴に犯されて、初めても奪われて、おまけに無理やりイかされるなんて……）

くノ一としてのプライドが、女としての尊厳が、処女膜ごとズタズタに引き裂かれていくような屈辱。

犯されるだけならまだ不可抗力であったかもしれないが、嫌いな男によって絶頂させられるなど自分が淫乱女になったかのようで認めたくない。

ようやく射精の終わった保親が、そんな彼女の心情を見抜いたかのように言葉で責める。

「ぬふぅ……達したな椿よ。儂の魔羅で突かれ、膣内に出されてのう」

「ちっ、違う……これは、違うっ……イって、ない……」

否定しようにも声と口調はあまりにも弱々しく、余韻でびくんびくんと跳ねる肢体とほんのり薄紅に染まる全身の肌は誰がどう見ても強制絶頂させられたことが明らかだ。

「斯様に意地を張るところもまた愛い奴よのう。ならば今一度、いや何度でも犯してやろうぞ。お主が『果てた』と認めるまでのう」

「ひ……っ」

たった今、椿の膣内で射精し終えたはずの肉棒が硬度を取り戻し――否、射精前よりもさらに大きく硬くなっているのを感じ取る。

負けを――絶頂を認めるまで何度でも犯そうというのだ。

（ま、負けないっ、今のはたまたま気が緩んでいたところをイかされただけっ……もう絶対に負けない、無理やりイかされたりなんか……！）

震えながらも、保親を睨みつけるくノ一。

だが一度でも絶頂した女の二度目というものは、面白いほどに呆気ない。

「ふんっ、ふん！　ふんぬぅう！　どうじゃ椿よ、まだ認めぬか！」

「ああ――っ、あ――っ、あはぁああ――！　またっ、またイっ……んぁああ――！」

「この淫乱抜け忍め！　まだ降伏せぬか、強情な女よのう！」

「やっ、んあ……あはぁああ――！　だめっ、ほんとにっ、もう……あぁああああ――！」

それから朝方になるまで実に十五度、椿は保親の寝所で体位を変えてイかされ続け、そして膣内・膣外に溺れるほどの精液を吐き出された。

「どうじゃ？　そろそろ果てたことを認める気になったかのう？」

「はぁ……あはぁあ……ま、だ……イって、な……ひ……」

半脱ぎの忍び装束はドロドロに汚され、潰れた蛙のようなみっともない格好で仰向けにビクビクと痙攣しながら、精液を秘所から垂れ流しゼイゼイ息を荒げ、それでも椿は敗北を認めない。

そこまで意固地な忍者少女にかえって気をよくした保親によって、任務の達成が認められた。

「まこと強情な女よ。ますます愛おしくなるわ。よかろう、お主の初物を頂いた礼と、その身体を存分に使わせてもろうた礼をせねばな。二つ目の秘宝『麒麟角』の隠し場所じゃが……」

その情報が引き出されるや否や、姿を消してこの場にいた申酉が動く気配がした。秘宝を回収しに向かったのだろう。

「それにしたところで、信親も愚かな息子よのう。すぐ近くにお主が犯されていたというのに、それに気づかず去ってゆくとは。いや鈍い男でよかったのう、淫乱な本性が割れずに済んで」

「っ……！」

死ぬほどの絶頂感で半ばぼんやりしていた椿だったが、保親のその一言が彼女を一気に冷たくさせる。

次の瞬間には、そばにかけてあった保親の脇差を瞬時に抜いて彼の喉へと白刃を突きつけていた。でっぷりした男の顔に冷や汗が滴る。

「私のことをなんて言おうが構わない……けど信親さまを愚弄しないで、たとえ父親のお前でも」

その瞳は突きつけた刃以上に鋭く、今まで獣のように犯されてよがっていた少女の眼光とは思えないほどに研ぎ澄まされていた。

「私は、あのお方の忍びなんだっ」

未来の主を侮蔑し、彼の誇りを穢すことは椿にとって最大の屈辱。

できるならば、ここで本当に殺してしまいたい。しかしそのようなことをすれば信親は無事では済まないだろう。

「おお……恐ろしや恐ろしや。さすがはイキ狂ってもくノ一、その芯の強さになおのこと惚れ込むわ」

あれほど絶頂させてもまだ精神は屈服していない忍び少女に、保親はますます劣欲の炎を滾らせる。

「今のでより強く、お主のことを身も心も堕としたくなったわ」

「この身も心も、信親さまのもの……身体はともかく、心だけは渡さない」

椿は静かに脇差を下ろす。こうして心は折れていないということを示す以外には何もできない現状が悔しかった。

けれど、まだ自分は戦える。

彼の立場を、名誉を守るために。

（私は、絶対に負けないっ……）

さんざんな目に遭い、椿は朝靄の立ち込める忍者屋敷の中をフラフラと歩いて自分の寝室へ向かうところで、ばったりと信親に遭遇した。

「椿殿ではないか。かなり憔悴してい

ると見えるが、大丈夫か」
「あっ……うう……」
とても顔向けできない。
彼のためにとっておいた純潔を無残に散らされ、あげくに自分を探しに来た彼のそばで障子越しによがり狂い、獣の声を上げて絶頂を重ねていたのだ。
恥ずかしくて情けなくて、合わせる顔がない。身は清めたが精液臭くはないだろうかと不安になる。
忍少女がうつむいていると、信親は申し訳なさそうに言った。
「昨晩、幸運にも俺の牢は鍵が外れていてな。そなたを探していたのだが、悲鳴のような声が聞こえて……」
「……!」
「もしや椿殿かと思ったが、そこで俺の動きを察されたのか番犬が放たれたようでな。刀さえあれば……」
「さ、さよう……でしたか」
よかった、あの時の犬の鳴き真似で絶頂したのはこの愛しい男にバレてはいないようだ――そんな安堵感がくノ一の心を包み、脚の力を抜いていく。
そしてそれ以上の背徳感が、純真な忍者少女を責め苛んでいった。
(このお方は私なんかのために丸腰のまま危険を顧みずに探してくれたのに、私はなんてことを……)
そんな申し訳なさに落ち込む椿の肩に触れ、信親は優しく声をかけた。
「俺の知らぬところで、そなたはそれこそ死よりつらい試練を受けていたのだろうな」
「っ……ううっ」
こんな自分を慮ってくれる温かい言葉に、忍びの目にも涙が浮かんでくる。
(あんな男の嫡子とは思えない……本当にお優しいお方……)
申酉は秘宝を回収しに行っている最中のはず、今なら少しくらいは大丈夫だろう。彼と言葉を交わし、わずかな安息を得たかった。
「父上に代わって、俺が非礼を詫びよう。……あれでも父上は、母上がご健在であった頃はまだまともであった」
聞くと、信親の母であり保親の正室は流行り病によって信親を生んで数年で亡くなったとのこと。
そこから、保親は酒と女に溺れて国を傾けるようになったらしい。
「胸の内は分からないでもない。しかし、だからと言って民を泣かせるような真似は国主としてあってはならぬ。俺はたとえ修羅となろうとも、父上を追放し民が笑って暮らせる国を取り戻すつもりだった」
だった、と過去形で言うのは今の自分が囚われの身でどうなってしまうか分からないといった不安から来ているのだろう。
「すまぬ、椿殿。俺はどうなってもいい、しかし民をあのまま放っておくわけにはいかない。最悪、そなたが父上を殺め、そのかどで俺が殺されてでも暴政を止め……」
「なりません！　絶対に信親さまはお助けします、だから……」
だから、その際は貴方様のそばに――そう言おうとして少女は言葉を呑み込んだ。その言葉は自由になってから口にするべきだと思ったのだ。
「だから、弱気にならないでくださいませ」
「ああ、かたじけない。……そうだ」
そこでふと思い出したかのように、信親は懐より握り拳ほどの、くすんだ緑色の石のようなものを取り出し椿に手渡す。
「これをそなたに」
決して綺麗ではないのだが、手に取ると不思議と力が湧いてくることから、くノ一は目を丸くしつつも確証を得る。
(こ、これって……秘宝？)
「幼き頃より父上から持たされていたものだが、あの時の話を聞く限りこれも忍びの秘宝だったのだな」
三つ目の秘宝は、信親が所持していたらしい。かの国の先代国主の遺言によれば、宝は分散して隠すべしとのことで、信親自身がその隠し場所の一つというわけだ。
思いがけないところで、秘宝の一つを手に入れた椿。
「霊亀甲というらしい。忍びではない俺が持っていても仕方がないし、何かの役に立つやもしれぬな」
(……忍びの秘宝は、確か七つ揃って真価を発揮するって書物で読んだ)
一つ一つに効果があるが、七つ揃うと禁断の力を得られるらしい。
つまり、自分が一つ持っている限り里長は目的を達成できない。
丑寅のこと、七つの秘宝を集めた後には用済みとして自分たちを殺す可能性もあった。
しかし自分がこれを握っていれば秘宝が揃った解放の折、丑寅に対していくらか有利に交渉を進められるはず。
「あ……ありがとう、ございます。私、嬉しい……」
これは椿にとって切り札であると同時に、自分を信じてくれた信親の想いそのものでもある。
絶対に彼を裏切るわけにはいかない。
そう固く誓い、椿は秘宝・霊亀甲を装束の懐にしまい込んだ。
「さて、今宵もお主で愉しませてもらうとするかのう」
つかの間の幸福感を塗りつぶすかのように夜が訪れ、またも保親による「試練」が始まる。
残る秘宝は四つ。あと四回の試練に耐えなければ、信親は助けられない。
しかし、秘宝の一つを椿は握っている。これが今の彼女の心の支えだった。
「では行くとしようか。今日は里長に許しをもろうておるでのう」
「い、行く……？　どこに……」
不安でいっぱいの彼女の疑問は、すぐに身をもって分からされることになる。
「ふふふ、月明かりに白い肌が照らされて殊の外淫靡よのう」
「こ、こんな格好で外を歩かせるなん

てっ……」

里のふもとの農村を、椿と保親は徘徊していた。

椿は全裸で首輪をつけられ、手綱は保親が握っている。

あまりにも屈辱的な引き回しの刑だ。

「昨夜は見事な獣の鳴き真似を披露してくれたからのう、それで思いついたのじゃ。動物のように、裸にして首輪をつけて歩き回ってみようとな」

いくら明日の農作業のため早めに休んでいるとはいえ、いつ村人が来てもおかしくない。

少女の心もちはあまりにも不安定で、いかなる時でも明鏡止水たれといった忍者のそれとはかけ離れていた。

「は、早く帰らせて」

「何を言う、まだ一刻ほどしか経っておらぬぞ」

月がまったく動いていない。夜はまだまだ果てしなく長く、野外での調教は始まったばかり。

「いつ誰ぞに見つかるやもといった状況がたまらぬであろう？　お主も内心期待しているのではないか？　ん？」

「そんなわけないでしょ……！　裸でこんな外を歩かされてっ、これじゃあ術も使えないっ……」

何かあった際に戦えないどころか抵抗すらできないというのは、くノ一からしてみれば死活問題。

自分は村娘や姫君ではなく忍者だ、戦う女だ。なのにこのように全裸にされ、男の欲望を満たすための道具として引き回されている事実に悲嘆を禁じ得ない。

畑の案山子すら人と見間違ってビクっと身をすくませる全裸少女に、保親はさもおかしいと言うように笑う。

そうして気が遠くなるほど村中を全裸で歩かされた後、保親は椿の首に巻きつく縄から手を離し、そばにあった木に括りつけていく。

「な、なにして……」

「ぬふふ、ここからが試練の本番ぞ。お主はここで一晩過ごすのじゃ」

あろうことか、保親はさんざん野外で椿を連れ回したあげく、農村に放置して自分だけ帰ってしまう。

（なっ、嘘でしょ……こんなところに捨て置いていくというの）

「村人に見つかっても助けを求めてはならぬぞ。お主は獣だ、人語を話した時点で信親の命はないと思え」

さらに置き土産のごとく、任務の条件を追加して暴君は去っていく。

おそらく申酉もこの場にいて、気配を消して監視しているのだろう。保親の趣向に沿わない振る舞いをした時点で、信親に危害が及ぶ可能性が高い。

ともあれ、椿は街灯どころか篝火もない真夜中の農村にたった一人、それも全裸で残される。心細いことこの上ない。

首輪から伸びる縄は大木に括りつけられ、その上から符まで貼られる。

丑寅から渡されていたのだろうか、この符は忍者にしか見えない結界のようなものを展開し、椿が縄に触れてほどこうとすると強い痛みが奔るのだ。

「ううっ……！　こ、これさえ剥がせれば……」

首輪そのものも外れないし、木に括りつけられた縄にも触ることができず、八方ふさがりだ。

そうしてどうにか逃げようと考えを巡らせている中、ガサガサと草の鳴る音がして。

「な、なんだこいつ。声がしたから来てみりゃ、裸でつながれてるべ」

「変態女か、気でも触れてやがるのか」

「ひっ……！」

先ほどまでの自分たちの話し声に気づかれたのか、農民たちが数人やってきていた。

（さ、最悪……なんとかして逃げないと、こいつらにもっ……）

彼らは怪訝な顔をしつつも、若く美しく豊満な全裸少女に近づいていく。

「はぁー、こりゃえらい別嬪さんじゃのう。それに乳や尻がでかいのもそうだが、身体がえらい鍛えこまれとる」

「ただの女じゃねえな。けどやんごとなきお方ってわけでもなさそうだべ」

（やめて……じろじろ見ないでっ）

できるならば、この村人たちに助けを求めたい。忍者が力のない農民に救いを求めるなど恥だが、それ以上の恥辱に苛まれているのだ。

しかし、今回の「試練」は人語を話してはならないときている。

（くうっ……どこまで私を辱めれば気が済むの、あの男は）

「わ……わうっ、あうぅ……」

「な、なんだこいつ。本当に犬みたいに鳴いてやがる」

せめて表情と声色で助けてほしいといったメッセージを伝えようとするのだが、彼らからしたら全裸の美少女がワンワン鳴いているだけで「助けてくれ」などといった声なき言葉は聞こえない。

「へへへ、犬語でしゃべられても分からねえや」

「おらたち農民だってもうちっとは読み書きできるのによ、こいつはそれ以下の畜生だべ」

夜の闇に男たちの嘲笑が響き、椿はただ耐えることしかできない。

そして事態は最悪の方向へ転ぶ。

「どうせ畜生と同じなら、犯したって構わねえよな」

「……！」

「殿様が姦淫はならぬなんてお触れを出してるけどよ、人じゃねえなら問題ねえべさ」

「頭はともかく、上玉の女を抱けるんだ。なんだって構わねえ」

（い、いやっ、やめて……）

人ならざる人へ向ける視線に憐憫などなく、それでいて「女」としては劣情を抱き楽しもうと考えている手前勝手な村人に、椿は本能的な恐怖を覚える。

これから自分は、「人ではない女」として慰み者にされてしまう。

「へへ、まずはそのデカ乳だ。こんなに大きく育ったのはなかなかないべ」
「乳首も上向いてよぉ、全然垂れてねぇ。こいつぁ極上の乳だ」
全裸ゆえに隠すものも全くない状態で、まず目につくのはやはり椿の三尺の胸。
それを間近で視姦されたのち、農民たちの汚い手が出色の雌果にむにゅうっ……と沈み込んでいく。
「いっ、や……んあっ、わうっ、わうぅうう……」
思わず人語で悲鳴を上げてしまいそうになり、ギリギリのところで犬の声を出して耐える。
男の手でも余る乳肉は自在に形を変え、至高の柔らかさと相まって農民たちを大いに喜ばせる。
「うっほぉお、なんつう柔らかさだ。こんな上物なのに頭がやられてるなんざ勿体ねえなあ」
「まあそのぶん、後腐れなく使えるってなもんだ。うおっ、すげぇ……たっぷたぷで手に吸いついてくる」
「うっ、わうっ、わふぅう……」
（わ、私の胸は……こんな奴らのためにあるんじゃないっ、のに……）
好き勝手に胸を揉みながら評する農民たちに、下忍どもの時と同様に怒りが収まらない。
「あぁ、すっかり勃っちまっただ。次はコイツを気持ちよくしてもらうか」
「おらもチンポがいきり勃ってしょうがねえ。この雌犬で溜まってるの抜かせてもらうべさ」
やがて粗末な麻の着物を脱ぎ始め、次々と勃起肉棒を椿の鼻先に突きつける農民たち。
（う……やだっ、臭い、汚いっ……）
民家に浴室などあるはずもない時代だ。銭湯という存在が発展するのも江戸時代からで、この頃の農民は身を清めるとしたらせいぜい行水する程度。
農作業によってすっかり汗ばみ汚れきったそれは、鼻がもげるほどの悪臭を放ち椿の嗅覚を攻撃する。包皮には抜けた陰毛が挟まり、カリの下には酒粕のような白いカスまみれで、とにかく不潔で不衛生だ。
「へへへ、雌犬ならチンポが汚くたって気にしねえよなあ」
「さっさと咥えるべ！　この変態雌家畜！」
「んぐっ、んぶうぅう――！」
しびれを切らした農民の一人が、チンカスまみれの肉棒を少女の口にねじ込む。反射的にえずいてしまい、ゲホゲホとむせ込む椿にもう一度ねじ込み直し、頭を両手でガッチリ固定し強制奉仕させていく。
「吐き出すんじゃねえ！　女は男のチンポに心を込めて奉仕するだ！」
「んっ、んっ、んんん――！」
別の農民は椿の豊満な胸を揉みしだき、また別の農民は三尺一寸のヒップを撫でまわし、幼さの残る非処女秘裂に指を無造作に突っ込んでかき回す。
「おほっ、くちゅくちゅいってらぁ。こんなふうに無理やりされて感じてんのか。なんつういやらしい女……もとい、雌だなぁお前はよ」
（いやっ、こんなことされて……気持ちいいわけ、ないのにっ！）
丑寅の術によって感度倍加させられているばかりか、放置プレイによって羞恥心からすっかり敏感になってしまっているその身体は、農民に嬲られているだけで火照り濡れそぼっていく。
「乳首も桜色で綺麗だぁ。ド淫乱のくせにそれほど使い込まれてねぇのか？」
「髪も黒くてツヤツヤしてら、畑仕事してる娘じゃねぇ。どこの女なんだ」
「腋も甘酸っぱくてたまんねぇ。肌全体が白くてよぉ、こんな女滅多にお目にかかれねぇぜ」
三尺の胸に顔を埋められ、張り出した尻をひっ叩かれ、髪を嗅がれ腋を舐められ、汚い農民によって穢し尽くされていく抜け忍少女の肢体。
（やだっ、やだ……私の身体、全身嬲られてぇ……汚れてないとこ、なくなっちゃう……）
そうしてついに、余すところなく舐められ触られてきた椿は、格下も格下の非力な農民たちによって犯される。
「へへっ、それじゃあそろそろぶち込んでやるとすっぺ。この動物女のマンコになぁ」
「ひ……っ、ひいっ、い……」
やめてと叫びたいが、それすらもできず。
つながれた雌犬くノ一は、そのまま農民に挿入されてしまう。
「んぁあああ――！　ああっ、あはあっ、あはぁあああ――っ！」
「うおおっ、すげぇ気持ちええぞぉ……！　ガバガバの売女かと思えば締め付けがすごくて、おらもう出ちまいそうだ……！」
どびゅるびゅぶぶびゅっ、ぶっびゅぐりゅるるるるっ！
（ああ……っ！　ひどい、ひどいっ……なんでこんな目に……）
とうとう農民にも膣内射精されてしまい、屈辱が忍びの心を穢していく。
しかも、これだけで終わるわけでもなく。
「つ、次はおらだぞ！」
「俺もこの娘に種付けするだ！」
（や、やだっ、輪姦なんか……）
数人の男に次々と犯される恐怖に、椿は女としての恐怖から身震いしたが逃げることすらできない。
どうしようもないまま、二本目、三本目の農民肉棒が少女の淫膣にぶち込まれ、膣内に精液を注ぎこまれていく。
「おらっまだ出るぞ雌犬！　俺らの精で孕めっ！」
「その絶品マンコに、おらの汚ねぇ農民種汁をぶちまけてやるべ！」
（ひっ、ひどいっ、みんな私のことっ、欲望と苛立ちのはけ口にしてっ……）
兵農分離が一般化するのはもう少し後で、この頃の農民は場合によっては戦の際に徴兵され、雑兵（ぞうひょう）として最前線に突っ込まされる。

そんな過酷な境遇で生きる名もなき民が、全裸の美少女という格好のストレス発散玩具を見つけたことでペニスを何度でも勃起させる。
（許さない、こいつら……下賤の農民のくせにっ……）
こんな農民もしくは雑兵レベルの男たちなど、本来であれば起爆札を貼ったクナイでも投げつけて一網打尽にしてやれるというのに。
（た、耐えなきゃ……信親さまの、ために……私は忍者、忍び耐える者なんだからっ……でも、でも……身体が、熱い……）
今はただ犯されることしかできなくて、あまつさえそれによって女の肉体が反応してしまっていることが情けなくて、恥ずかしくて――気持ちいい。
女であれば例外なく抱いている、屈辱的な目に遭うことで快感を得るマゾ欲望が、椿の中で眠っていたそれが徐々に花開いていく。
（ちっ、ちがうっ、私は犯されて悦ぶ女じゃないっ、淫乱くノ一じゃないい……！　こんな奴らに、格下の農民どもに犯されてっ、気持ちよくなんか、なら、ないぃぃ……！）
だが、いくら心の中で否定しようと、女の肉体に絶えず襲い来る雌快楽はどうにもならず、口から出る下品な獣の喘ぎが抑えられない。
「おおうっ、おうっ、おおおぉお！　んおっ、おっ、あぉおおお――！」
「犬って言うか豚だなぁ。おら雌豚、ブヒブヒ鳴いてみろ」
「っ、うぅう……」
今度は豚の鳴き真似をしろと命じられる。動物の声であればなんでもいいのだろうが、犬以上に屈辱的な真似をさせられる所業に頭が煮立つ。
（こ、殺してやる……こいつらなんか）
怨嗟（えんさ）の念を浮かべるも、現状はどうしようもない。
自由になったら火遁で村ごと焼き払ってやると決心し、震えた唇から可愛らしく「ぶ……ぶひぃ」と鳴く。
「ケハハハ、ほんとに豚の鳴き真似したぜ。狂ってやがる」
「命令は聞くくせに人の言葉は喋れねえのか。それとも喋らないのか？」
「まあなんにせよ、まだまだイけるからよぉ。その身体で引き続き楽しませてもらうべ、豚女よぉ！」
再び村人肉棒が容赦なく突き挿れられ、椿は「ぶひいいっ！」と甲高い声を寝入った村に響かせる。
「おらおら、どうだ人間様のチンポは！　淫乱雌豚女には最高の馳走じゃろうが！」
「しゃぶれ豚！　農民様のチンポをありがたく食べろや！」
「ぶ、ぶひっ、ぶっひぃいいい！　んむぶっ、んん――っ、ん――――っ！」
前後から容赦なくピストンされる不衛生なペニス。しかし敏感な少女の肉体はそんなものでも反応し悦んでしまい、膣を締め上げ舌を絡ませ、男どもから精を搾り取る。
「うおっ、また出るべこの口に……おら飲めっ、子種全部飲み干せ！」
「こっちも出すぞ豚女、農民様の種付け汁で豚の赤子孕めぇえぇ！」
ぼびゅっ！　びゅぶるるるっ、ぶばびゅっ！
どぼぶゅるるるっ、ぶぼびゅっ！
「ぶひっ、ぶひっ、ぶっきぃいいいいいぃ――！　ぶひいっ、ぶっ、ぶひゃぁあああああああ――っ！」
彼らの射精に合わせて椿もまた豚声で絶頂してしまい、口内・膣内射精による雌の悦びを同時に味わってその場に崩れ落ちる。
そればかりかあまりの快楽に気が緩んだのか、それこそ犬のようなポーズで片足を上げて木の根元へ温かい尿をぷしゃぁあぁ……っと漏らしてしまう。
「あ……あへぇ……へぇえ……」
「うわっ、こいつ小便漏らしてやがる」
「犬みたいな格好でよぉ、本当に獣に育てられたんじゃないのか」
「なんだよこの締まりのねえ顔はよ、遊女（あそびめ）以下だな」
気持ちいい。
人前で失禁し、だらしない顔で尿を漏らしてしまうのが心地よい。
（や、やだぁ……こんなことで、気持ちよくなっちゃ、いけない、のに……おしっこ……止まらない……）
そんな、忍者どころか人間の矜持をどこまでも捨て去った快楽に溺れる椿の黒髪を農民の手がつかみ、無理やり引っ張って彼らは告げる。
「おうおうまだ伸びるには早いぜ豚女、まだ種汁が金玉に残ってんだからよ」
「夜は長いべ、もっと楽しませてくれや、なぁ」
「あぁ……あ……ぶひっ、ぶへぇ……」
朦朧（もうろう）とする意識の中、再度ペニスを無理やり挿入させられる。
それだけで雌の快楽が脳を揺らし、本来自分に到底及ばない非力な男たちに犯される被虐欲がくノ一少女をどこまでも堕としていく。
「ほれ孕め雌豚！　俺の子種つけられて豚の子孕め！」
「お前はずっとおらたちの家畜だべ、催したらいつでもマンコ使うからな！」
「んひいっ、んおぉお、おおっほぉおおお――！　ぶひっ、ぶひいっ、んぶいっひぃいいいいいぃ――！」
何発も何発も上下の口に射精され、そのたびに淫らな女忍者の淫らな膣がわなないて快楽の頂点に達し、野太い獣声を農村に響かせる。
（き、気持ちいいっ、気持ちいい……耐えられない、こんなの我慢できないぃ……こんな奴らに犯されてっ、私、悦んじゃってるの……）
「ぶひっ、イグっ、ぶほぉおっ、んむおっほぉおおおおお――！　ほおっ、おっ、おおっほぉおおおおおお――！」
朝日が村を照らす間際まで、椿の肉体は下賤な農民によって汚され続け、忍者少女は雌獣の絶頂感に幾度も酔いしれた。

お集まりいただきありがとうございます!!
ドォォォ……
ドォォォ……
会場は満員!それもそのはず
おおー!!
オオオオ……
いいぞー!!
わが組織【ゴブリン】を苦しめる
バン!!
スーパーヒロイン【閃光のティナ】を見られるからでしょう!
カッ
フッ
それでは参りましょう!!
ザワ
ザワ
プリル
トプン
ゲイッ
キュ
恋人の命を懸けた……
正義のヒロイン★陵辱ショー開幕!

【閃光のティナ】ドスケベショーの始まりです!!

オオオオオ…

ははっ！バカなポーズだ！

……

くっ 下種(げす)どもめ…見せ物にするなんて…

タプ タプ

恥ずかしい…クソォ…

ガパッ

ギッ

プルン

ムチ ムチ

キュッ

グッグ…

犯してやるぜっ！

ピシッ

好き放題言って…

閃光のティナは負けない

漫画(COMIC)／アへ丸(まる)

悪の組織【ゴブリン】の賛同者が

こんなにいるなんてっ…

ゾロ ゾロ ゾロ ゾロ

私はゴブリンの悪事を阻止する正義のヒロイン

【閃光のティナ】としてずっと戦ってきた

ドカッ

ある時…

恋人【圭太郎】の存在がバレてしまい

あはは♪

イチャ♪

イチャ♪

ヌッ

キャッ

圭太郎を人質にされてしまう

ゾロ

ゾロ

ティナ 俺の事はいいから戦ってくれ!!

ゲッ

ギシッ

圭太郎を助ける為

ムチ♪

ムチ♪

ムチ♪

ティナ!!

ゴクッ…

他の選択肢は無かった

まず最初は【ガニ股耐久ゲーム】です!

ガニ股ポーズを30分維持できればクリア

ゲッ

……

ゲームを1つでもクリアできれば

恋人と無事帰る事ができるのです!!

タプ♪

タプ♪

私を甘く見すぎよ ゴブリンども

日々の鍛錬で30分 なんて楽勝よ！

グッ

待っててね圭太郎

すぐに助けて あげるから

……

素晴らしい体幹で 微動だにしません！

プリン♡

プリ♡

さすがスーパーヒロイン【閃光のティナ】!!

早く やれよっ!!

ピタ…

つまんねーぞ!!

ですが これから始まる 妨害に耐えられるか！

ふんっ！

何をされたって…

ガッ

ビクッ

ムニィ♡

ムニィ♡

んなっ!!?

ちょっと！何揉んでんのよ！
ポーズ取るだけと思っていたなら甘い！
悪の組織らしく卑怯に妨害します！
圭太郎以外に触られるなんて
スケベな肉付きだ
ティナの体を触れるなんて 最高だぜ
おっと 体揺らしてどうしたよ？
乳首やめろ気持ち悪い…
正義のヒロインも乳首は感じちまうか？
クソォ…!!
クソォ…!!

ほら 彼氏くん失神してないで起きろよ
ああ…
まぁあれだけ電撃食らえば気絶するわな
見ろよ お前の為に頑張ってる

【閃光のティナ】の姿をよ
あ～ん もっと突き上げてくださいい 2本を中でゴリゴリ擦りまくってぇ
キス好きぃ♥興奮するぅ♥
マンコ締め付けヤベー!!
ケツ穴チンポに絡みつきやがる
んぱぁ♥気持ちいぃ
壊れてもいいからもっともっとぉ♥
なんて乱れ方だよ 正義のヒロインだろ？
んぱぁ♥ レロォだってぇ♥
浮気エッチ良すぎて仕方ないのぉ♥

彼氏が意識無いからって楽しみ過ぎだろ

2穴サンドぉ♥ヤバすぎぃ♥

イってるから子宮ずっとイキまくり♥

絶頂したら恋人が苦しむってのによ

コッチ向けよ

圭太郎もわかってくれるはず♥

こんなに気持ち良すぎるの我慢無理だから♥

だってよ彼氏くん？

え？

サキュバスキャッスル
耻辱の淫魔城
SUCCUBUS CASTLE
姫を助けようと奮闘する勇者に迫るM性露呈ミッション！
小説 NOVEL／高岡智空（たかおかちから）
挿絵 ILLUSTRATION／魁李（かいり）

「あれがそうみたいね」
「うん……ここから見てるだけで、妖しい空気が伝わってくる」
暗雲に覆われた夜の暗がり、そこに浮かぶ瘴気の立ち込めた古城を見上げ、一組の男女が囁き合う。
「あそこに王女様が……」
ゴクリと生唾を飲み、緊張感に身を引き締める少年の名はディア。艶やかな黒髪がサラリと風に靡き、城を見上げる大粒の瞳は覇気を湛えて輝く。
見目麗しい少女のような外見で、背丈も低いが、その華奢な体躯に秘められるのは、魔を撃ち滅ぼすとされる勇者の力だ。封印から解かれようとしている伝説の魔王、その再封印を施すため、彼は一人の相棒とともに、大陸中を旅して巡っている。
「さっさと助けに行くわよ、ディア」
「う、うん……そうだね、ビビアン」
相棒の名はビビアン――ディアの幼なじみでもあり、生まれた国から共にここまで旅を続けてきた、類稀なる魔法の才を持つ、美貌の魔女だ。
側頭部に結わえた真紅の髪は燃えるように鮮やかで、キリリとツリ上がった瞳は凛々しさと強さを思わせる。背も女性にしては高く、激しく強気な性格も相まって、ディアですら彼女に雄々しさを覚えるほどだった。二人の性別が逆になったとしても、そこに違和感を覚える者は少ないだろう。
もっとも、ビビアンのボディラインはあまりに艶めかしく、ワンピースローブから覗く豊満な胸元の谷間や、ミニスカートから伸びる美麗な脚線、ムチムチとした魅惑の太ももに、ツンと張り膨らんだヒップラインを見れば、彼女の女性らしさを否定することなど、誰にもできはしないのだが。
「一応、明かりは消していこう」
「そうね。中は魔物の巣だろうから、気づかれないようにしないと」
魔法のライトを消すと、周囲にはさらに闇が広がる。押し寄せる妖しい瘴気も濃度を増したようで、呼吸するたびに喉や肺が、甘ったるい感覚に包まれ、舐め上げられるようだった。
そんな場所を二人が訪れた理由は、近隣を治める王国の女王より、王女奪還を依頼されたからである。
旅路の途中、王国に立ち寄ったディアたちは、助力を乞うため王宮に赴き、先日起こった魔族による襲撃と、王女誘拐の話を聞かされた。襲撃の被害により救出の目途も立っておらず、一刻を争う事態だという。
それを聞いたディアは、王国軍に代わり、王女救出の任を引き受けたのだった。魔族に苦しめられる人々を救うことこそ、勇者の力を持って生まれた自分の義務なのだから――。
「ほんと、安請け合いしちゃうんだから……もしものことがあったら、世界から勇者の力が失われるのよ？　もっと自分を大事にしなさいよね」
古城へと歩みを進めながら、隣のビビアンが呟き、こちらを睨む。
「わ、わかってるけど……ビビアンもいてくれるし、きっと平気だよ」
相棒への全面的な信頼を滲ませるディアの言葉に、ビビアンもまんざらではなさそうに、頬を赤く染めた。
「――まぁね。なにがあっても、あたしがあんたを守ってあげる……だから安心なさい、可愛いかわいい、あたしの大事な勇者様♪」
「か、可愛いとか……やめてよ……」
からかうような彼女の言葉に、ディアはカァッと耳を熱くさせる。仄かな恋心を抱く相手から、庇護対象として見られるのは複雑ではあるが、大事に思われていることは嬉しかった。
「と、とにかく、まずは王女様を助けないと……そろそろ城門に着くし、周りを警戒しておこうね」
「そうね、哨戒の魔物がいるかも。ただ、王女もいることだし、中で守りを固めてるんじゃないかしら」
そんな話をしているうち、巨大な城門まで到着した二人は、改めて不気味な古城を見上げる。そこに漂う瘴気は煮詰められたように一段と濃くなっており、得も言われぬ高揚感が、ディアの鼓動をドクドクと高鳴らせた。

◇

かつては小国の王城だったという古城は、外見から想像されるより広く、そして天井の高い建造物だった。とはいえ内装はボロボロで、美しかったであろう滑らかな床や壁には、亀裂や崩壊が目立っている。ガラスの失われた窓枠はひしゃげ、外の暗がりと一体化しているようにさえ見えた。
それでも、不思議なことに一部の床は整然としており、歩くルートだけは確立されているように思える。魔物たちが踏み均した獣道のようなものなのか、それとも自分たちを誘い込む罠なのか。どちらも考慮しつつ、ディアとビビアンは慎重に足を進め、広間の中央に置かれる階段へ向かう。
けれど――。
「ん、あれ？　ここ、壁が……」
何事もなく階段の前に辿り着いた勇者は、その正面を覆う、奇妙な膜のような感触に気がついた。手を触れれば柔らかく沈み込むのだが、貫通することも破れることもなく、外部からの侵入を阻んでいる。これまでに何体もの魔物を切り伏せた剣を突き立てるが、やはり膜はびくともしなかった。
「だめか、どうしよう……」
「――ちょっとディア、これ見て」
剣を鞘に収めたところで、背後を警戒していたビビアンが声を上げる。振り返ったところで彼女が見つめているものは、崩れた柱だと思っていたのだが、どうやら石板だったようだ。
「なにか書いてあるの？」
「ええ。ご丁寧に、城主の魔族が用意したんでしょうね……階段を通る方法、つまり結界の説明書みたいよ」
言われて目を通してみると、自分たちが来るとわかっていたかのように、人間の言語で文字が刻まれていた。

「謎……明かさば、道は開く……『杯を性なる雫で満たせ』だって」
「え、誤字？」
ビビアンの呟きに読み直してみると、確かにおかしな字面である。
「聖なる、の間違いかな……じゃあ、聖水を注げってことだよね」
「買っておいてよかったわ。あとは杯ってのが見つかれば――ん？」
石板を調べていたビビアンが、なにかを見つけて首を傾げた。見れば、石板の下部がレリーフのように膨らんでいるようだが、よくよく見ればそれは浮彫装飾ではない。小さな金属製グラスの縦半分が石板に埋め込まれ、組木細工のように嵌まっていた。
「ここか……やってみるわね」
「あ、ボクがやるよ」
なにが起こるかわからないからと、ディアはビビアンに代わり、突きだされた杯へ聖水を注いでいく。
「ん……ん、あれ？」
注ぎ込んでも周囲に変化は起きなかったが、おかしなことに、杯にも変化が見られなかった。注がれた聖水が杯に溜まることはなく、砂地が水を吸い込むように消えていってしまう。やがて聖水の小瓶は空になったが、杯には一滴の聖水すら残っていなかった。
「ど、どうなってるの……？」
「そんなの、あたしにだってわかんないわよ。注ぎ方か、聖水って解釈が間違ってるんだと思うけど……」
そう言いながらビビアンは石板から離れ、周囲の瓦礫や壁のほうを調べ始める。杯と雫、それに関する新たなヒントを探しているようだ。
「気をつけて、ビビアン。あんまり壁際に近づくと、外に魔物がいたら、気づかれるかもしれないし……」
「わかってるってば。それよりディアも、その辺り探してみてよ」
促されたディアは頷き、なにげなく背後を振り返る。石板を柱と勘違いしたのは、向かい合うようにして、似たような瓦礫が立っていたからだ。なにかあるとすればそこではないか――おそらく、ディアの無意識がそう判断したのだろう。けれど、振り向いた瞬間にディアはギョッと目を見開き、思わず剣を抜いて身構える。
「う、うわぁっ!?」
「どうしたの、ディア！」
慌てた声でビビアンも駆けつけてくるが、幸い、二人が攻撃を仕掛けるような事態にはならなかった。浮かぶように佇んでいたその人物は、二人を前にしてニコリと微笑み、優雅にスカートの裾を摘んで一礼する。
『驚かせてしまい、申し訳ございません……お二方はもしや、ニーファ王国より参られた方でしょうか？』
穏やかさと気高さを兼ね備え、それでいて愛らしい響きを持つ声が、耳に優しく広がった。思わず跪いてしまいそうになる凛とした声に、彼女が口にしたニーファ王国という名前――まさかと思い、ディアは口を開く。
「は、はい！　それでは、あなたは……アリア様、なのですか？」
ニーファ王国のアリア王女、女王から聞いていた名を確認すると、パァッと彼女の表情が華やいだ。
『その通りでございます！　ああ、よかった……このままこの城で、朽ち果てることになるのかと……』
安堵の表情で呟く王女だったが、不意にハッと表情を強張らせ、再びその顔を暗く曇らせる。
『騎士でないお二方がいらっしゃったということは、まさか……王国になにかあったのでしょうかっ!?　民は、母上は無事なのですかっ!?』
「ご、ご安心くださいっ、女王陛下はご無事です！　ただ、騎士団にはケガ人が多く、再編が難しいとのことでしたので……ボクたちが救出の任を引き受けて参りました」
『まぁ……ということは、旅のお方なのですね。我が国の難儀にお手をお貸しくださり、ありがとうございます……感謝の言葉もございません』
そう言った王女はまたスカートを摘み、恭しく頭を下げた。
「いえ、当然のことをしただけで……それより王女様、よくご無事で――」
そこまでを口にしたところでディアは、王女に人としての気配が希薄であることに気づく。当然、ビビアンもすでに気づいていたのだろう。油断なく王女を睨んだまま、ディアを庇うように立ちはだかり、杖を突きだした。
「――その王女殿下は、どうしてそのようなお姿に？　気配もそうですが、触れられぬほどに実体が薄れ、まるで消え入りそうなご様子ですが？」
警戒を露わにするビビアンだが、王女は気を悪くした様子もなく、背後を振り返るようにして、さらにその姿を薄れさせていく。
『それは――おそらく、ご覧いただいたほうが早いでしょう。どうぞ、こちらへいらしてください』
「なにを……えぇっ!?」
スゥッと風景へ溶け入るように王女は姿を消し、そこに残されたのは崩れた柱と――その壁面へ埋められるように置かれた、丸い手鏡だった。
「き、消えた――」
「違うわ。これは……なるほど、そういうことだったのね」
「え、ど、どういうことっ？」
戸惑うディアの言葉に応えるより先に、ビビアンは無造作に柱へ近づくと、そこに軽く嵌め込まれていた手鏡を掴む。杯のほうとは違い、少し力を入れるだけで、簡単に外れた。
「……こちらに捕らわれていらしたのですね、王女殿下。無礼な物言いを致しましたこと、お許しください」
『いえ、よいのです……それよりも本当に、よく救出に来てくださいました。心より感謝いたします』
鏡と会話するビビアンの姿にディアが呆然としていると、それに気づいた彼女は、鏡をこちらへ向ける。そこに

著者近況　すっかり読み切りMモノ書いちゃうおじさんと化してしまいましたが、まだまだノベルズ系も書きたいと思っています。いつか、きっと、おそらく、そのうち……頑張ります。

映っていたのは自分の顔ではなく、先ほどのシルエットで目にした、アリア王女のご尊顔だった。

『……おわかりになりましたか？　魔族の魔法によって、わたくしはこの鏡に捕らわれているのです。少しの間であれば、先ほどのように鏡の外へ姿を映せるのですが……』

肉体を外にはだせない、ということだろう。悲しそうに顔を伏せる王女の態度に、ディアはギュッと胸を締めつけられるようだった。

「ご安心ください！　ボクたちが必ず、お救いしますので……ね？」

「ええ、もちろん……王女殿下、なにを隠そうこのディアは、魔王を封印する力を持って生まれた、今代の勇者様なのです。いかなる魔族が相手でも、きっと討伐してご覧にいれます。さすれば、この封印も解かれるでしょう」

ディアの訴えとビビアンの慰めに、王女の白肌がポッと朱に染まる。

『まぁ、あなた様が……お噂は王国にも届いておりますわ。その勇者様にお救いいただけるとは、なんと心強いことでしょうか』

王女の両手が胸元で固く結ばれ、祈りを捧げるように瞳が閉じられた。

『どうか勇者様に、神のご加護を……なにとぞ、無理をなさいませんよう、お気をつけくださいませ』

「はい、ありがとうございます」

お姫様らしい振舞いと気遣いに、ディアは思わず耳を赤くしてしまう。そんな勇者をニヤニヤと見つめ、ビビアンがわざとらしく声を上げた。

「あらあら～？　ディアってば真っ赤になっちゃって……王女様に、一目惚れでもしちゃったのかしら～？」

「なに言ってるの、ビビアン!?」

誤魔化すように叫んだディアは、話を逸らすように鏡へ問いかける。

「そ、そういえば王女様……奥へ進む階段が、どうやら封印されているようなのですが……攫ってきた魔族は、なにか言っていませんでしたか？」

『階段……そういえば、王国は騎士団含めて女ばかりの国、であればここを突破できないだろう……と、そのようなことを話していましたわ』

「ふぅん……？」

その言葉になにか気づいたのか、ビビアンは訝しむように声を上げ、チラリとディアのほうを見やった。気づいたディアも顔を上げるが、彼女の視線は顔から身体、そして下腹部へと向かい――やがて頬を赤く染めると、フイッと背けられる。

「え、どうしたの、ビビアン？」

「……ううん、別に。それより、なにかヒントを探しましょう。急がないと、王女殿下の身体にご負担がかかるかもしれないわ」

『わたくしもお手伝いいたします。どうぞ手鏡をお持ちになって、周囲に向けてくださいませ』

そうして、ビビアンが手鏡を持って周囲に向けながらの、変則的な三人での探索が始まった。その甲斐あってか、瓦礫の奥に小部屋が隠れているのが見つかり、三人はその奥へ向かう。

「……なにもいないわね」

『魔族たちは、二階より上を住処としているようで……わたくしも入れないよう、置いていかれたのですね』

鏡だけを持って帰られても、その封印を破られない自信があるのだろうか。やはり封印は、首魁の魔族を倒さなければ、解けなそうである。

（もしかしたら、あの階段もそういうことなのかな――ん？）

そんなことを考えながら、小部屋に並べられる崩れた本棚や机を調べていると、比較的新しい羊皮紙が一枚、ヒラリと舞うように落ちてきた。

「これは……？」

「なにかあったの？」

駆け寄ってきたビビアンに羊皮紙を見せてみると、その冒頭部分をサラリと流し読み、ふむと小さく唸る。

「日付からして、数年前……ここに盗掘に来た冒険者の手記みたいね。入口の封印はその頃からあって、解除に苦労したから、メモを残しておいたってこと……ら、し……いっつ!?」

「え、どうしたのっ？」

不意に言葉に詰まったビビアンの顔が、みるみるうちに、耳まで赤く染まっていった。ディアが羊皮紙を覗き込もうとすると、長身を活かして遠ざけ、見えないように隠してしまう。

「ちょっ、ボクにも見せてよ！」

「い、いや、でも……」

「王女様を助けるためだよ！　そこにヒントが書かれてるんだよねっ？」

ディアが縋りつくようにして訴えると、ビビアンもそれはわかっているらしく、困った様子で逡巡している。

『ビビアン様、わたくしからもお願いいたします……』

「……わかったわ。とりあえず、さっきの杯のところまで行きましょ」

王女の訴えに折れたビビアンに促され、石板の前まで戻ったディアは、彼女から手渡された羊皮紙に目を通し――そして先ほどの彼女と同じように、目を見開いて言葉を詰まらせた。

「え――えぇぇぇぇっっ!?」

「……まぁ、そうなるわよね」

恥ずかしそうにビビアンが顔を逸らすのも当然だ。なぜなら、羊皮紙に書かれていた解除方法とは――。

「……杯に、男の……せ、精液を、注ぐこと……って、嘘でしょっ!?」

想像だにしなかった行為を提示され、ディアは思わず赤面して叫ぶ。

確かに、杯は普通のものより小さく、二度も射精すれば精液で満たされそうだ。その行為を想定していたからこそのサイズなのだとすれば、書かれていることが事実である可能性は高い。

「……やって、みる？」

「っっ……それは……」

ビビアンの気まずそうな提案に、ディアは口ごもり、逡巡する。

それも当然――精液を注ぐということ

著者近刊　Mものだとドリーム文庫『性感淫魔エステシリーズ（1・2・F）』『抜きコキ ハニトラエステ』などで大活躍！
陵辱作だとノベルズで『光魔少女メイ　拘束魔具の虜』『軍属麗奴ツバキ 淫れ散る三戦華』など。
好評発売中！

とは、ここで性器を露出させ、それを刺激し、自ら杯に精を注ぐ、最低の姿を晒すということだ。
背丈が低く、童顔と中性的な顔立ちのために、年齢より幼く見られるディアではあるが、思春期真っ只中なだけあり、自慰行為は経験済みである。
とはいえ、それは人に見られないことが前提で、ビビアンとは別室にしている宿などで密かに行うべきもの。
こんなところで、想い人や高貴な姫君に見せつけるように行うなど、破廉恥極まりない低俗な行動だ。
（い、いや、別に見せなくてもいいんだけど、それでも――）
封印が解ければ、実際にしたことは知られてしまう。二人が気遣って話題にはしなかったとしても、ディア自身が気まずさや羞恥に苛まれるのは、おそらく避けられないはずだ。
（た、ただ……っ……これ――）
城に入ったときから抱えていた問題を意識し、ディアは思わず下腹部を撫でるように押さえる。服の下ではズクンズクンと衝動が湧き立ち、甘い快楽をそこに注ぎ込んできていた。
「はっ、あぁっ……」
思わず喘いでしまい、口を噤むディア。その声に気づいたのか、ビビアンはチラリとディアのほうを見つめ、逡巡しつつも口を開く。
「……こんな言い方したくないけど、あんたさっき、自分で言ったわよね。王女様を助けるためだって……だったら、やるしかないんじゃない？」
「――っ！」
手鏡の王女を見れば、彼女も相応の知識はあるらしく、モジモジと身を捩りながら頬を赤くしていた。
『あ、あの、勇者様……そのように、ご無理をなさらずとも……』
その反応の艶めかしさが、またもディアの下腹部に、そして股間に、ドクドクと血流を流し込むようだった。
「う、くぅ……わかった、やるよ……やるしか、ないんだもんね……」
勇者としての自覚がディアの背中を押し、覚悟を決めさせる。カチャカチャと音を立ててベルトを外し、ズボンと下着を脱ぎ下ろすと、ヒヤリとした夜の空気が股間を撫でた。
（あ、あぁぁ……こんなところで、ボクッ……うぅっ、裸にぃ……）
上の服は着ているものの、下半身だけが未着用の状態は、逆に羞恥が増してしまう。その恥ずかしい状況にありながら、どういうわけか股間はガチガチに屹立してしまっており、なにもしていないのに快感の熱がグラグラと煮え滾っていた。
ペニスは真上を向いてヒクヒクと震えっ放しで、先端には透明の雫が滲みだし、ディアの興奮を訴えている。
ただ――そのサイズはかなりの小振りで、握ろうとすれば簡単に覆い隠されてしまう程度の長さと太さしかなかった。周囲の恥毛も、ディア自身の体毛と同じで非常に薄く、生えているかどうかもわかりづらい。
包皮も長く伸び、亀頭の半ばまでが覆われており、その亀頭も愛らしいピンク色を晒している。先走りで濡れ光る様子は、雄々しいというより、情けないという印象を与えていた。
「はぁっ、ふっ、うくぅ……」
腰を引き、手の平を被せ、そんな情けない勃起を隠そうとするディアだったが、興味からしっかりとそれを覗いていたビビアンは、恥ずかしいというより期待外れというように表情をしかめ、小さくため息をもらす。
「ねぇ……なにもしてないのに、なんで勃起してるわけ？　っていうか、勃起してるのよね、それ？」
「ふぐっっ……え、と……」
無造作な言葉に心を抉られながら、ディアはこの城に近づいてから感じていたことを、素直に説明する。
「その……よくわからないんだけど、この城の周りの瘴気……あれに触れてると、身体が熱くなって……その、勝手に……こうなっちゃって……」
「ふぅん……まぁ、なんだっていいけど。勃起してるなら、好都合なわけだし……ほら、ちゃっちゃとやっちゃいましょ。自分でできるわよね？」
「う、うん……それより、あんまり見ないでほしいんだけど……」
目を逸らしておいてほしいと暗に訴えるが、ビビアンはまたもため息をもらし、苛立ち混じりに答えた。
「あのねぇ……そんな無防備な状態で、放っておけないでしょ。周りとあんた、両方見張っておかないと、なにがあるかわかんないじゃない」
「そ、それは、そうだけど……」
なおもディアがモジモジと逡巡していると、ビビアンの我慢も限界に達したのか、服を掴んで強く引っ張る。
「いいから、さっさとやりなさいって言ってんの！　勇者ともあろうものが、ウジウジとみっともない……王女様のためでしょ、頑張りなさい！」
「ひあっっ!?　あっ、うぅっっ……わ、わかったよ、もうっ！」
石板に埋まった杯の前に立たされたディアは、ヤケになったように手を離して腰を突きだすと、小さいながらも限界まで膨れ上がったペニスの先端を、その縁に触れさせた。
「ひっ……うっ、んぅっ……」
ヒヤリとした感触に腰が引けそうになるが、これ以上の情けない態度を見せてなるものかと、すんでのところでこらえ、勃起に指を添える。そのまま握るのではなく、指先だけで肉竿を挟むようにし、小さな動きでシコシコと扱き始めると、隣からビビアンの声がボソリと響いた。
「……へぇ、握るんじゃないのね」
「っ――はっ、あっ……んっ……」
ビビアンの言葉はまるで、男性の自慰行為を知っているかのようだった。いや、魔女という職業柄、男性のそうした行為や生理欲求についても、色々な文献で知る機会はあるのだろう。

だからこそ――その探るような、確認するような言葉の気配に、ディアは興奮を煽られ、腰を跳ねさせる。

（あっ、はぁっ……ビビアン、知ってるんだ、これぇ……ボクの……あっ、恥ずかしい、やり方ぁっ……）

握って扱くのではなく、指先だけで扱く――それがディアにとっては、自分のサイズに合った快感の貪り方だった。その際には皮を伸ばし、亀頭を包んで磨くように擦る、俗に皮オナと呼ばれる、男子にとっては色々な不具合をもたらすよくないやり方である。

よくないとわかってはいても、ペニスを蹂躙するような強い刺激はあまりに甘美で、一度それを味わってしまったディアは、すでに何十回とその行為を繰り返していた。身体が覚えてしまった自慰方法は、頭でやめようと思っても、すぐには止められない。

（んっ、あぁっ、見られてるぅっ……ビビアンに、オナニーしてるとこぉっ……はぁっ、うぅぅっ……）

顔を覆いたくなる羞恥に晒されているというのに、どこか背徳的な快感が込み上げ、肉茎を扱くスピードはどんどん上がっていった。先ほどから絶頂寸前にまで興奮していたペニスは、たちまち射精準備に入ってしまい、睾丸が快楽に震えて持ち上がってゆく。

「……ま、ディアのって平均より小さい感じだもんね。手だとちゃんと握れなそうだし、非効率的なのかしら」

「くぅっっ、んっっ……」

ポツリと彼女が呟いた感想に、ドクンッと肉棒が跳ねた。自分でも自覚はあったが、平均的な男性器より遥かに小さいペニス――そのサイズをはっきりと指摘され、羞恥と情けなさが込み上げるにも拘らず、なぜか切ない快楽が下腹部に募り、尻穴の奥がキュゥゥッと疼いてしまう。

（なっ……ん、かぁっ……ふっ、ぐぅぅ……いつも、よりっ……ひっ、あっ……気持ち、いっ……んぅっ……）

刺激に促され、射精欲求に煽られ、ディアの指はさらに動きを激しくさせていた。亀頭を覆う先走りが飛沫を散らし、指先にも濡れる感触を広げながら、必死な手つきが包皮を上下に滑らせる。見られていることも忘れたように、ディアは興奮から呼吸を荒くし、はしたなく腰を突きだしてしまう。

『激しい手の動きですね……荒々しく、懸命で……ただ、なんというか……少し、滑稽？　でしょうか……』

（っっ……そう、だ……王女様も、これ……見て、るっ……んっ……）

鏡から囁かれる王女の言葉で、彼女までが自分を眺めていたことに気づかされ、羞恥の炎が熱く燃え盛る。

「……ね、それ気持ちいいの？」

「――っ!?　んっ、あぁぁっ！」

その熱くなった耳朶を、ビビアンの甘い吐息が柔らかく撫でた。ピチャリと唇を舐める水音と、生温かいウィスパーボイスが、羞恥で真っ赤に染まっていたディアの耳穴を舐め上げ、脳の奥に甘い痺れを注ぎ込む。

そしてなにより――密着してきた彼女の温かさが腕を伝い、胸の柔らかさがムニュリと押しつけられ、官能的な興奮が一気に膨れ上がった。

「ふっっ、くぅぅっっ！　んぁっ、はっ、だめぇっ……イクぅっっ！」

――ブピュッッ、ブビュグッッ、ビュルッッ、ドピュゥッッッ！

「――――えっ？」

その刺激に、快感の堰は呆気なく決壊させられ、半ば暴発のようなタイミングで、ディアのペニスは指の間で大きく爆ぜた。先端を押さえる間もなく放たれた白濁は、杯を大きく外れて宙へ放たれ、石板にビタビタと降り注ぎながら、その一部だけがトロリと杯へ注ぎ込まれていく。

（い、いけないっ……うぅっ！）

慌ててペニスを押さえるも、激しく脈動する肉塊はそれを跳ねのけ、暴れ回るように牡液を撒き散らす。もはやなりふり構っていられず、ディアは石板を抱くように密着し、腰を突きだして、杯の中へ肉棒を捻じ込んだ。

「はぁっ、んぁっ、あぁぁっ……」

小さな杯でもペニスを嵌め込んでしまうと、指を触れさせることはできない。やむなくディアはそのままカクカクと腰を振り、まるで壁と性行為しているかのような仕草で、杯に亀頭を擦らせながら、残った白濁をトプトプと吐きだしていく。

「んぁっ、うくっ、くぅぅっ……」

「うわ……ちょ、ちょっとディア、なにやってるのよ……」

戸惑った――というよりも、ディアの突然の痴態に引いた反応を見せ、ビビアンが冷たい声で囁く。

「え、嘘でしょ、もう出ちゃったの？っていうか……フフッ、なにそれ……なんで壁に腰振ってるわけ？」

「やっっ、あっ、ちがっ……んっ、これっ……な、中にいっ、注がないと、だから……あっ、あぁっ……」

鼻でせせら笑われながらも、ディアは腰を動かすことを止められず、ペニスの脈動が治まるまで、必死でその中に射精を続けるしかなかった。

（あっ、あぁっっ、こんなっ……ビビアンも、王女様もぉっ……み、見てるのにっ、あっ……こんな、ことっ……んんぅっっ！　あぁっ、これぇ……グラス、ヌルヌルして……き、もち、いいっ……んんぅぅっっ！）

精液の感触だけでなく、杯の内側には、妙に有機的なヌルつきがびっしりと張り巡らされており、そこに擦りつけることで、得も言われぬ肉悦がペニスを撫で上げていく。その快感に思わず表情を蕩ますながら、ディアは二人の前で腰を振り続け、みっともない喘ぎをもらし続ける羽目になる。

「はぁっ、んっふぅぅっ……あっ、またぁ……出るっ、うぅぅっ……」

そうして、射精の快楽に腰や膝をガクガクと震えさせ――やがて衝動が収まったところで、荒い息をもらしなが

ら、ディアはゆっくりと腰を離した。抜かれた肉棒は、濃厚な牡液がネットリと糸を引いて、テラテラと艶めかしく濡れ光り、ディアが味わった濃厚な快感を見せつけている。だがやはり暴発のせいか、注がれた精液は射精量に比して少なく、杯は半ばほどまでしか満たされていない。

「うっ、ふぅっ、んぅぅぅ……」

しくじったこともそうだが、あまりの早漏ぶりを披露してしまったことが恥ずかしくてたまらず、ディアは真っ赤になった顔を伏せる。そんな勇者の耳元へ、ビビアンの落ち着いた声が、嘲笑とともに浴びせられた。

「フフッ……ねぇ、ディア？　色々言いたいことあるんだけど、全部言わせてもらっていいかしら？」

肩を抱かれ、胸を密着され、耳元に囁く彼女の視線は、間違いなくディアの股間に注がれている。そこには、射精を終えたはずなのに勃起したままのペニスが、浅ましい牡欲を示して、ヒクヒクとみっともなく震えていた。

「とりあえず――頑張って射精してくれたみたいねぇ、お疲れ様♪」

響きは冷たいのに、妙な優しさを持った猫撫で声が、ねっとりと絡みつくように耳をくすぐる。とはいえ、わざわざ前置きまでした彼女が、そんな労いだけで済ませるはずがない。

「ただ――イッちゃうの、早すぎるんじゃない？　そのせいで、全然違うとこに射精しちゃってさぁ……せっかく頑張ったのに、また頑張らないといけなくなっちゃったみたいよ？」

クスクスと笑いながら囁かれ、羞恥で真っ赤になったディアは、消え入りたくなるほど身を小さくする。だが、それでビビアンの追及が止まるなどということはなかった。

「っていうか、最初からそのつもりだったのかしら？　射精したら萎えちゃうものだって聞いてたけど、あんたのそれ、全ッ然そんなことないみたいだしさぁ……クフフッ♪」

「あっ、やっ……んぅっっ!?」

止める間もなく、肩を抱くのと反対の手が股間に伸び、彼女のしなやかな指先がペニスを摘む。まだ精液汚れが残っていることもいとわず、そのヌルついた感触を潤滑油に指を押しつけ、緩やかに上下へ扱き立ててくる。

「あはぁぁっ！　んっ、あぁっ、だめぇっ……ビビ、ア……んっっ！」

「そんなこと言ったって、結界を解くにはもう一回くらい射精してもらわないといけないんだもの、しょうがないでしょ？　それにあんたに任せて、また失敗されたら時間がもったいないじゃない……まぁ、でも――」

わざとそうしているのか、射精を直接に促す動きではなく、亀頭部分だけを包皮で磨くような刺激をゆっくりと繰り返しながら、ビビアンはクスクスと嘲笑を響かせた。

「さっきみたいに早く射精してくれるなら、どっちにしたって、そこまで時間かからないわよねぇ♪」

「んっっ、ふぅっ……くふぅぅ……」

早漏――と指摘するような言葉に尻穴がキュゥッと締めつけられ、その奥に息づく牡の性感帯が、蕩けるように熱く疼く。甘い波が尻穴の奥からジワリと広がり、睾丸や肉棒に募る快楽が後押しされ、先ほど果てたばかりだというのに、またもディアのペニスは射精の予兆に震えだしていた。

（あっ、やっっ……だ、めぇぇ……ふぐっ、んぅぅっ……また、こんなぁ……あっ、すぐ、なんてっ……）

射精をこらえようと慌てて腰を引くが、そうはさせまいとビビアンが器用に腰を支え、無理やり股間を突きださせてくる。同時に指先がペニスを強く押さえつけ、先端を杯の縁へと擦りつけながら、それを扱く指の動きも次第に大きくなってきた。亀頭だけでなく、肉竿の半ばまでを扱いて包皮を剥き下ろしながら、身体は密着させ、唇は耳元へ添えたままで言葉を紡ぐ。

「なにへっぴり腰になってるのよ……狙いがずれちゃうじゃない。ちゃんと突きだしなさいよ、ほら」

「あぐっっ、ああぁぁっ！」

熱く湿った吐息が、いやらしく耳をしゃぶり立てた。指に与えられる快楽だけでも抗いがたいというのに、耳から頭へ響くような音の快感が、ディアの官能を狂わせ、理性を淫熱で蕩かす。さらに、女性らしい身体と乳肉の柔らかさで背中を覆われ、ムニュリと押し潰される刺激を感じさせられると、突きだされた腰が大きく跳ね、膝がみっともなく、ガクガクと震えさせられた。

「ほぉっ、おっ、あぁぁ……」

「なぁに、その声は……そうやって、あんまり情けない声だしてたらぁ……フフッ♪　王女殿下にも、嫌われちゃうわよぉ……ですよね、殿下？」

（あっ――そ、そうだ、王女様っ……王女様にまで、こんな――）

ビビアンの囁きに、王女の存在を思いだしたディアは、慌てて視線を動かして彼女を探す。

と――彼女はすぐに見つかった。

『あぁ、勇者様の……その、なんというか……愛らしい男根が、ビビアン様の指で扱かれて……先ほどから透明のおつゆが、おもらしのように……』

肩を抱いたビビアンの手に握られている鏡、そこから王女が顔を赤く染めたまま、大きく瞳を見開いて、ディアの股間に熱心な視線を注いでいる。それに気づいた瞬間、言いようもない羞恥と背徳的な快感がゾクゾクッと背筋を駆け抜け、恥辱の証が尿道を一気にせり上がってくるのがわかった。

「あっっ、ひっ、いぃっっ……」

先ほどの射精を終えてから、新たな快感を与えられ始め、まだ数えられるほどの時間しか経っていない。すでに早漏れの汚名を着せられているディアだが、それを上回るような醜態を晒すわけにはいかなかった。

（だ、めぇ……少しでも、長くっ、う

ぅぅっ……が、我慢っっ……）

歯を食いしばり、尻穴を強く引き締め、腰を突きださせられながらも懸命に内股になり、射精をこらえる。その仕草こそがどうしようも情けなく、女々しく、ビビアンの呆れを誘うものではあったのだが、ディアには気づく余裕もなかった。ハッハッと犬のような吐息をもらして呼吸を抑え、快感に抗おうと踏ん張り続ける――が。

「……王女殿下。時間も惜しくありません、ご協力を賜りたく存じます」

『え――あ、はい……それがよいですね、承知しました……』

小声でそんな短い言葉を交わし、乞われた王女はディアに囁く。

『あの、勇者様――ディア様？　どうぞこちらを、ご覧くださいませ』

「へ――な、に……ひっっ!?」

王女に名を呼ばれ、反射的に目を向けてしまったディアの目に飛び込んできたのは、大きく膨らんだ柔らかな白肌が形成する、艶めかしいたっぷりとした肉谷間だった。肩を覗かせる大胆な造形のドレス、その胸元を鏡の外へ覗かせた王女は、そこを隠す布地を指で引っ張り、自身の乳谷間をさらに大きく覗かせている。

片方の乳房ですらディアの両手に余るほどのボリューム、それがキツく締めつけられたドレスに圧迫され、溢れだすほどにたわみ潰れていた。

双丘の滑らかなラインが柔らかくひしゃげ、鏡の全面に大迫力で押しつけられている。圧倒的な存在感を目の前に突きつけられ、ディアの本能は乳肉へ釘づけとなり、これ以上、官能の暴発を抑え込むことはできなかった。

「はっっ、あぁっ、出るっっ……んっあぁぁっっ、イクッ、うぅっっ！」

――ドビュグッッッ、ビュルビュルビュルゥ～～～～ッッ！　ドプッドプッドプッッ、ドビュルッッッ！

「……フッ♪」

肉欲の決壊を訴え、叫び、腰を突きだした瞬間、耳元に小さな笑いが響くのを、確かに聞いた。痴態を見下すその響きに煽られ、淡々とした指の動きに何度も肉竿を扱かれ、カクカクと腰をはしたなく躍らせながら、ディアは大量の白濁を撃ち放ち、今度は狙いを外さず、杯に注ぎ込んでいく。

「んぁっ、あぁっっ、イクッッ……うぅぅっっ、んぁっ、はっ、やっっ……あいぃぃっっ！　と、止めてっ、へっっ……んぁぁっ、イクぅぅっっ！」

ペニスが数回脈動し、放たれた白濁で杯が満ちても、ビビアンの指の動きは止まらなかった。自らが吐きだした生温かい牡液の中へ亀頭を浸けられたまま、そのヌルつきを包皮の中へ染み込まされるように、粘液をグチュグチュと絡め、さらなる快楽の証を搾り取られていく。

「やべっ、てっっ、てぇぇっ！　い、いっへる、のっ、にぃぃっ！　おぅぅんっ！　んぁっ、はぁぁっっ！」

ビビアンの腕から逃れようとしても、快感に蕩けた身体はまるで力が入らず、彼女の腕に抱かれ、腰と身体を押さえつけられ、無防備な肉棒を弄ばれ続けるしかない。繰り返される絶頂の躍動に、杯から白濁を溢れさせながら、ディアは新たな精液をまさに際限なく吐きだし、表情を崩す。

「ほぉっ、おっ、あぁぁぁ……」

『ディア様ったら……そんなにビビアン様の指が、気持ちいいのでしょうか……舌を垂らして、涎まで垂らして……とても物欲しそうに見えますね』

ボソリと囁かれた王女の言葉に、痴態を見つめられていることを自覚し、またも激しい羞恥に苛まれた。

鏡の中の王女は少しだけ身体の位置をずらし、ディアに胸元を曝けだしたまま、覗かせた顔はしっかりと股間に向けている。その鏡はビビアンによって眼前に固定されているため、視線は胸元から逸らせず、王女の目から絶頂姿を隠すこともできない。

『……わたくしの乳房で、それほどに興奮した……の、でしょうか？』

「そ、れはぁ……んふぅぅっ……」

肯定も否定もできない中で、肉棒だけが素直に肯定し、新たな精液をドプンッと杯に吐きだした。そこでようやくビビアンの指が動きを止めたが、もはやディアは立っていることすらままならず、ズルズルと滑るように体勢を崩して、そこに膝をつかされる。

「はぁっ、あっ、ふぅぅぅ……」

「……成功したみたいね。結界、消えてるわよ？」

存分に晒してしまった醜態への言及が一切なく、冷静に進路を見つめているビビアンの反応が、改めて自分の浅ましさやみっともなさを指摘してくるようだった。

（こんな、とこで……ぅくっ、ふぅぅぅ……二回も、あんな簡単に……しかも、ビビアンの手で……お、王女様の、おっぱいでぇ……んあぁぁ……）

淡白な指の刺激や、白肌の膨らみを思いだしただけで、股間がズクンッと鈍く疼いた。気づけば股間はまたも大きく膨らんでおり、大量の精液を吐きだして間もない睾丸は、十数日も吐精されていないかのように、ズシリとした重みをぶら下げている。

そのことに気づいているのかいないのか――股間を隠すように背を丸めたディアの腕を取り、ビビアンが無理やりに立たせようとしてくる。

「ほら、行くわよ」

「あっ、うっ……んぅっ、ちょ、ちょっと待って、まだ――」

息が整っていないこともあるが、脱いだ服がそのままだ。せめて着替えをと抵抗するが、杯と階段への道を見比べ、ビビアンが舌打ちする。

「っ……時間がないわ。満杯になったら結界は外れるけど、ザーメンが減ってきてる。これ、空になったら結界が戻るわよ、急いで抜けないと！」

「えっ!?　そ、そんなっ……あ、待ってよ！　ああ、もうっ！」

年間首席の座をかけた〝ミッション〟は
〈チンポ〉を使ったセクハラの連鎖！
ミッション・チンポッシブル
Mission Chimpossible
小説／峰崎龍之介
挿絵／草上明

「――いよいよ、ですわね」
そびえ立つ巨大な塔を見上げて、少女はぽつりと呟いた。
カリーナ・メティス。名門・メティス魔術学園に通う三年生である。黄金から紡ぎ出したかのような金色の髪は入念なセットの結果、彼女のお気に入りの髪型――くるくると巻かれた形をばっちりキープしている。宝石を思わせる碧眼には確かな意志と自信がきらきらと輝き、唇は紅など引かずとも最高の血色で、ぷるりと艶すら醸していた。
顔だけではなく、学園指定の制服に覆われた肉体も素晴らしい。不敵に組まれた腕に持ち上げられた乳房は迫力満点。また短めのスカートと膝上まであるハイソックスの間では、白く瑞々しい太腿がちらりと覗いていた。若さゆえの肌の張りとむちむちの質感を併せ持った、正しく完璧な肉体である。
「……なんだ。早いな」
と――問答無用、完全無欠の美少女カリーナの背を、ハスキーボイスが小突いた。振り返ると、そこにはどこかきつい印象の美女が立っている。
「早い？　違いますわよカイエン先生。あなたが遅いのです」
ぴしゃりと告げる。すると女――イライザ・カイエン教師はくすんだ銀髪を撫でつけつつ、これ見よがしに懐中時計を取り出して見せた。
「集合時間の十分前。やはり君が早かっただけだ。これで遅刻魔呼ばわりは心外だな。まあ、最後の年間首席の座がかかった試験に挑もうという朝だ。張り切る気持ちはわからんでもない」
イライザの言葉に、カリーナはうぐと喉の奥で唸った。
年間首席というのは、学年の中で最も優れた生徒に与えられる称号のようなものだった。ペーパーテストの成績や最大魔力量、実際に魔術を行使する制御力などを総合して、進級や卒業の際に決定される。カリーナはこの年間首席の座を、一年生と二年生の時に連続で射止めていた。そして卒業見込みとなった現在においても、彼女は年間首席に王手をかけている。
ペーパーテストでほぼ満点の成績を収め、魔力量においても次席の生徒の倍近い数値を叩き出した。あとはこれから挑む実技試験さえしくじらなければ、年間首席の座はまず間違いなく彼女のものとなる。
ゆえにカリーナは今日、とてつもなく張り切っていた。ただそれを認めるのは気恥ずかしくて、彼女はぷいとそっぽを向いた。
「べ、別に……私はいつも通りですわ。『メティス』の家名に恥じぬよう、粛々と試練に挑むまでです」
「……ふ、そうか。頑張れよ」
イライザは多くは語らずささやかな激励だけを口にした。それからすっと真剣な顔になり、厳かに告げてくる。
「ではこれより、卒業試験・実技の部を開始する。事前の通達通り、会場はこの『試しの塔』だ」
イライザは先ほどまでカリーナが見上げていた、巨大な塔を指差した。威厳すら感じさせるその塔は、名門・メティス魔術学園の象徴である。もっとも、ただの象徴ではない。学外の一流魔術師が修行に訪れることもある、難度の高い修練の場でもあるのだ。そしてだからこそこの塔は、『試しの塔』と呼ばれている。
（そんな場所で行われる試験。いったいどれほどの難度なのでしょう？　ふふ……腕が鳴りますわね）
内心不敵に呟いていると、イライザが塔の入り口である重厚な鉄扉に手を当て、小さく呪文を口にした。教師の権限を用いた特殊な開錠魔術だ。
ごうん……。
見た目通りに重々しい音を立てて、鉄扉が少しずつ開いていく。
いよいよ試験が始まる。徐々に高まる緊張感に、カリーナはごくりと生唾を飲んだ。だが臆することはなかった。覚悟ならとっくに胸の中にある。この学園で積んできた修練に嘘はないし、後悔もまたなかった。
（あとは学んだ全てをぶつけるのみ、ですわ！）
内心で気合いを入れ直して、カリーナは力強く『試しの塔』に踏み込んだ。
そして――
「……はい？」
それを見た彼女は、思わず呆けたような声を漏らした。
――それは、言うなれば『肉の崖』だった。何人、いや何十人もの男たちが肉体そのものを組み合わせ、一塊となって崖を構成している。しかも身に着けているのが漆黒のブーメランパンツ一丁のみという、ほとんど裸に近い格好である。
「――き、きゃあああああああ!?」
気づいたときには、カリーナは悲鳴を上げていた。一瞬で真っ赤になった顔を両手で覆い、目の前のイカれた光景を視界から締め出す。
「カイエン先生！　なんですのこれ！　なんなんですの、これはぁ！」
ちょっと涙目になりながら叫ぶと、背後から至極冷静な声が返ってきた。
「なにと言われてもな。あれは試験に使う備品だ。ちょっと生々しいというかぶっちゃけ生きた人間そのもので、もっと言うならペーパーテストの点数が足りなくて協力せざるを得なくなったうちの生徒だったりするが、まあ気にすることはない」
「わかりません！　なにひとつ、本当になにひとつわかりませんわ先生！　この汚らしいオブジェで、いったいなんの試験をするとおっしゃいますの!?　あと人権！　この学園の人権の扱いはどうなってますの!?」
ブーメランパンツからはみ出かけていた『もっこり』のシルエットを脳内から追い出しつつ、喚くように言う。イライザは肩をすくめた。

著者近況　金髪ドリル＋天才魔術師＋強気なお嬢様。これでアナルが弱くないわけがないですよね（偏見）

「君にはこれから、この塔内でみっつの試練に挑んでもらう予定になっている。そしてそのひとつめの試練がこれ――魔術を駆使してこの崖を登る、というものだ」

「の、登る？」

今度は叫ばずに訊き返す。イライザがあまりにも淡々と話すので、さすがに少し落ち着いてきた。人権についてスルーされたのは気になったが。

「そうだ。ただし使っていい『足場』は限定される。四肢や胴体に掴まると反則だから注意しろ」

「四肢や胴体は反則って……ま、まさかあれに掴まって登れと!?」

「ああ。身体強化魔術を自分ではなく、あれらのペニスに付与して『足場』にする。高いレベルの制御力が問われる、難しい試験だ」

あまりのことに、カリーナは声も出せずに頭を抱えた。

イライザの言葉はある意味正しい――他人に強化魔術を使うのはセンスが問われるし、部分付与となると難度が跳ね上がる。確かに難しい試験だと言えるだろう。だが――

「む、無効。無効ですわこんな試験！試験内容の変更を要求します！」

だからといって、あの卑猥なオブジェを肯定できるわけでもなかった。なんというか、常識的に考えて。

「誰が考えた試験か知りませんが、これは歴史ある『試しの塔』に対する冒涜行為ですわよ！　第一このような破廉恥な試験、学園長がお許しになるわけがありません！」

「そう言われてもな。この試験を用意したのは学園長ご自身だぞ」

「……え？」

ぴたりと喚くのをやめて、やや高いところにあるイライザの顔を見上げる。『冗談ですわよね？』と、必死に目で訴えた。しかし無情にも、イライザ教師は首を横に振る。

「事実だ。『孫娘だからこそ厳しい試練を』と、直々に試験内容をお考えになられた。立派な心掛けだ」

「お、おじいさま……」

色んな意味で絶望的な気分になって、カリーナは呻いた。だがイライザはこちらの様子など気にもかけず、淡々と話を進めていく。

「で、どうする。棄権するなら追試が必要になるが」

「……！　わかりましたわ！　やればいいのでしょう、やれば！」

カリーナは捨て鉢な気分で吐き捨て、卑猥なオブジェへと歩み寄った。馬鹿馬鹿しいことこの上ないが、年間首席を目指している人間が追試を受けるなどあってはならないことだ。こうなったら腹をくくるしかない。

（……だ、大丈夫。これはあくまで『足場』なのですから。恥ずかしがる必要なんてありませんわ……って、あら？）

と、言い聞かせるように内心呟いてから、彼女はふと首を傾げた。

「あの……先生。あれを『足場』にするとおっしゃいましたが、あんなふにゃふにゃのものに強化魔術を施しても、形状的に『足場』にはなりそうもありませんわよ？」

「そうだな。あのままでは使い物にはならないだろう。『足場』にするには勃起させる必要がある。これを使え」

言って、イライザは懐から小さな水晶玉を取り出した。これは魔具と呼ばれる魔術を内包した道具の一種で、目の前のものを拡大し、近くの空間に投影する効果がある。広い場所での授業でよく使われる、教師の必須アイテムだった。

「君は魔術的にも優秀だが、容姿も優れている。少しばかりサービスした姿を見せてやれば、彼らは簡単に勃起するだろう」

まったく嬉しくない誉め言葉と共に、魔具を手渡される。カリーナは半眼で担任教師を見つめたが、相手が『文句は一切受け付けない』という顔で腕組みし始めたので、結局なにも言えずに終わった。

（……こ、この私が。メティス家の子女たる私が、なぜこのような辱めを……）

怒りと情けない心地を持て余しつつ、カリーナは水晶に魔力を送り込んだ。すると水晶がひとりでに宙に浮き、同時にぽう……と淡い光が中空に広がる。光は平面に広がり続け、やがて魔力鏡面を形成した。

「い、いいですかあなたたち。これはとんでもない幸運ですわよ。せいぜいありがたがって刮目なさい！」

赤面しつつ、カリーナは襟元を留めているタイを解き、制服のボタンを外していった。そして全てのボタンを外すと、カリーナは一瞬だけ脱衣の手を止めた。気の強い彼女も、こんな大勢の前で肌を晒すのには躊躇した。

それでも彼女は怖気を振り払い、ブラジャーを外してみせた。

ぷるん……と。爆乳と呼んで差し支えないであろう大きな乳房が外気に晒された。と同時に中空の魔力鏡面にも、まろやかな谷間やほんのりと色づいた愛らしい乳首が、カリーナの恥ずかしそうな表情とともに大写しになる。

『肉の崖』を構成している男子生徒たちは一斉に魔力鏡面の方へと顔を向け、大迫力の爆乳に熱い視線を注いだ。するとペニスが一本また一本と勃起していき、黒いブーメランパンツをぐぐっと押し上げていく。

とてつもなく異様な光景だった。だがこれでひとまず、『足場』を作ることはできた。

（……み、見た目は最低ですが。これは要するに魔術を併用したクライミングの試験。予め使う『足場』の位置を決めておく必要がありますわね）

カリーナは努めて冷静にペニスの位置を確認し、最初の『足場』に適切なものを二本選んで、ぎりぎりまで近づいて屈み込んだ。すると独特の匂いが鼻を貫く。汗だけではない、なんとも

著者近刊　『超昂神騎エクシール　～双翼、魔悦調教～』『ダンジョン暮らしの元勇者』1～3巻　好評発売中！

形容しがたい匂いだった。
ごくり――カリーナは我知らず生唾を飲んだ。それから意を決して手を掲げ、呪文を呟く。
「身体強化（ストレティン）」
強化魔術が発動し、掌から放出された魔力がペニスに勃起とは別の……頑丈さという意味での硬さを与えていく。そうして確保した最初の『足場』に、カリーナは靴を脱いで――さすがに土足で急所を踏むのは躊躇（ためら）われた――足を乗せた。
「うぐ……」
「うっ……」
と、呻き声がふたつ聞こえた。ペニスを踏まれているふたりの男子生徒のものだ。そしてそこでようやく気づいたのだが、彼らは猿轡（さるぐつわ）をされていた。『備品』になりきるためだろう。
（……なんだか、心なしか顔が嬉しそうな気もしますけれど……いえ。考えない方が良さそうですわね）
余計な思考を脳から締め出した。それから予め目をつけていた次のペニスに手を伸ばし、また強化魔術をかける。
（問題はここからですわね……）
次からは足場（ペニス）を手で掴んで登っていかなければならないから、心理的ハードルは足で踏んだ初手よりも遥かに高かった。だが迷っている時間はない。ペニスにかけた強化魔術の効果は有限だ。もたもたしていると『足場』ではなくなってしまう。
「……う、うう」
カリーナはおっかなびっくり手を伸ばし、次の足場（ペニス）を根元から掴んだ。すると生々しい熱さと微かな湿り気が、掌にぴたりと張り付いた。
（こ、これが……殿方の、お……おちんちん……？　凄い、ですわね。布を隔てているはずなのに、とても熱くて硬い……）
どくん、どくん。脈打つ感触もまた、掌から伝わってきた。
「……あの。少しだけ我慢してくださいましね」
律儀に断りを入れつつ、握ったペニスを強く引いたり握ったりした。そうして強化魔術の効果を確認してから体重をかけ、ゆっくりと身体を引き上げる。そして掴んでいるペニスよりも下に位置するペニスに強化魔術を施し、強度を確認してから足を置いた。
それを何度も繰り返した。するとカリーナの額に珠の汗が浮かんでくる。
「ふぅ、ふぅ……」
息も少しずつ乱れてくる。しかしカリーナは黙々とペニスを辿り続け、順調に肉の崖を登っていった。
だが登りきるまであと一手というところにまで至った時、カリーナは大きなミスを犯した。最後の最後で失敗したくないがゆえに、ペニスの強度を執拗に確認してしまったのだ。
「……うっ！」
類稀（たぐいまれ）なる美少女の手でペニスを弄（いじ）られまくった男子生徒が、情けない声で呻く。と同時にペニスそのものがひくひくと脈打ち始めた。
「え？　ちょ、ちょっとあなた、まさか……！　ま、待ちなさい。我慢するのですっ！」
嫌な予感を覚え、慌ててペニスから手を離す。だがそこでにミスが重なった。手を引いた時、ブーメランパンツに指を引っかけてしまったのだ。
「――なっ!?」
目の前に登場した生ペニスの迫力に、カリーナは身を縮こまらせた。そしてそれと同時に、
びくんっ！　びくびく、びゅるるっ。
いきり立った肉槍は大きく跳ね上がり、何度も脈打ちながら、その先端から熱い雄汁を激しく迸らせた。
「きゃあっ」
飛んできた精液は、硬直していたカリーナの自慢の巻き髪部分に思い切り着弾した。
「わ――私の髪になんてことを!?　馬鹿！　このお馬鹿！　慌てん坊！　ああもう最低。最低ですわ！」
怒りが収まらないカリーナだったが、喚いてばかりもいられなかった。ペニスが射精して萎えたことで、足場として使えなくなってしまったのだ。これでは『肉の崖』を登りきることができない。
「……あ、あなた。いまの無礼は忘れてあげますわ。ですから『足場』を復活させなさい！」
命じるのだが、男子生徒は情けない声で呻くばかりだった。萎えたペニスはうんともすんとも言わない。
「……っ。こうなったら……！」
迷っている時間はないと、カリーナは水晶を動かした。自らの股間が最もよく見えるよう画角を調整する。
「……う、うう……！」
恥ずかしさで涙目になりながら、カリーナは下着に指を引っかけ、下へとずり下ろした。すると背後の魔力鑑面（スクリーン）に初々しくもいやらしい女の花弁が、はっきりと映し出される。しかも後ろからの画角なので、美しいお尻のラインもばっちり映っていた。その効果は絶大で、つい先ほど射精して萎えたばかりのペニスがたちまち再勃起し、『足場』として復活した。
「す、身体強化（ストレティン）！」
すかさず手を伸ばして強化魔術を発動した。そして今度は触りすぎないよう気をつけつつ握り込み、体を持ち上げた。ブーメランパンツがずり落ちているので生ペニスを掴むハメになったが、いまは気にしていられなかった。
「はあ、はあ……っ！」
強引に『肉の崖』を登りきって塔の二階部分に至ったカリーナは、仰向けに寝転がって荒い息を吐いた。すると箒（ほうき）に跨ったイライザが――飛行魔術であとを追ってきたらしい――隣に着地しつつ言ってくる。
「ふむ。途中で『備品』が射精した時はどうなることかと思ったが、機転とエロさで見事乗り切ったな」
「……え、エロさは余計です……」

遂に見つけたわ…
ゴゴゴゴ
ここが幻のお宝が眠るという迷宮ね…！
なんで私がこんな辺鄙な所まで宝探しなんか…
ハァ…
私は泣く子も黙るあの「赤い炎焔」よ？
全く…ギルドのマスターからの命令とは言え
なんでも珍しい鎧もあるらしいぞ
よしアイリスお前探してこい
私は戦闘が専門なのに…
ガーン
ええ、
ビシ
宝を見つけたら私のモノにしちゃおうかしら
マスターにはナイショでネコババしてやるわ
ピコーン
にしし…
そうと決まればサクっと見つけてきてやるんだから
私にかかればどんな迷宮でもチョチョイのチョイよ
ズン
ズン
女剣士アイリス
恥辱の遺跡でエロミッション！
漫画 COMIC 翡翠石

中は薄暗くてジメジメしてるわね…
ん？
この先に進みたくば迷宮の指示に従い3つの試練を越える必要がある
先ずはこの宝箱を開け中の防具を装備するのだ
なにこれ…？
石碑と…宝箱…？
ハァッ!?
ここれに着替えないといけないのぉッ!?
でもこの扉 押しても ビクともしないし…
先に進むためには…
着てみるしかない…わよね

ううっ…
何よこのヨロイ…
ほとんど身を護る部分がないじゃない…
ドキ
ドキッ
プルン
プルン
かぁぁ
あぁっ
インナーもなんだかデザインがエッチだし…
チッ
チッ
チッ
しかも武器は持ち込めないなんて…
凄く薄くて密着して切れ込みが鋭くて食い込んじゃう…
キュン

君はその鎧をつけて
先に進まなければならない
なお迷宮の宝を
手にするまで
決して外すことはできない
ん？また
石碑が…
なんて悪趣味な……っ
だけど……従って
行くしかなさそうね
うわっ扉が
開いた…!!
ゴゴゴ
とにかく
これで
先に進めるわ…
えっ！
なに…？
鎧とインナースーツが…
急に…動いて…っ
ぶるぶる
ウネ
キュウウウ…

んほおおおおうううっ♡
イクっ♡ イクうううっ♡
ロープにオマンコいじめられてイっちゃうううーっ♡
ビクビクッ
プシュッ
ガクッ
ぶしゃあああ♡
ぱっ
ガクッ

んおおおっ♡ おっぱい
イジっちゃだめぇえっ♡

乳首コリコリっ♡
されたら…あっ♡

ガニ股
スクワットにっ…

集中できなっ♡
いのおっ♡

もうちょっと♡

もうちょっと
だからあぁっ♡

んはあっ♡

あと…
いっかい…♡

これで…

ごじゅっ…

ドチュンッ

舞台は地上の闇へ……
変幻装姫、絶体絶命!!

変幻装姫 シャインミラージュ 外伝
絶望のバイオレンス編

第五話 陰りゆく希望の光。ゴミと化す正義の使者

小説 NOVEL／でぃふぃーと
挿絵 ILLUSTRATION／高浜太郎（たかはまたろう）

第1巻～第2巻も好評発売中!
二次元ドリームノベルズ
変幻装姫シャインミラージュ

変幻装姫が悪意ある者達の見世物にされてから幾日かが経った。
当然、関係のない人々の時間も同様に経過している。
正義の守護者を失った世界。しかし何も変わらずに日常だけが過ぎ去っていく。表面上だけは。
「ねぇ、シャインミラージュが負けたって本当なのかな……」
「画像も動画も本物らしいし……本当なんじゃない？」
「じゃあダークライムが襲ってきたらどうしたら……」
どこかで聞こえてくるのは、変幻装姫の敗北を知る者の不安の声。
シャインミラージュがグラッドに敗北した画像や動画は、その日のうちにネットの海に流出。
初めのうちは偽物だという声が大きかったが、実際に居合わせた者も多数存在し、すぐに本物であるという方向へと傾いていった。
つまり、今の自分達の平和は仮初のモノ。悪の組織が現れただけで容易く瓦解する積み木のような状態。
そう認識しているからこそ、多くの人々の表情は暗い。
「人間共ォ!!　こっちを見やがれェッ!!」
突如として駅前の広場に響くグラッドの大きな声。生み出された闇から現れた仮面の男の存在に、人々は騒めき、そして声の主から離れていった。
「今日はいいモンを見せにきてやったぜェ」
シャインミラージュを相手に戦う際に見せる、異常な狂気を含む笑いはないが荒っぽい口調に変わりはなく、それだけで多くは気圧されてしまうのは仕方のないこと。
ダーククライムの言葉を信用するということが無茶であり、グラッドの言葉を気にする余裕もなく、恐怖の表情を浮かべ叫びと共に人の数は減っていく。
「まぁ逃げたい奴は逃げてもいいがな」
黒い手袋に包まれたままの指でパチンと音を鳴らすと、グラッドを中心として大きな闇が拡がり始め、周囲を覆い尽くした。
何が起こるのかとその場に残る者達の視線が向けられる中で、大仰な機械音を立て、グラッドの背後から見せたいモノが姿を現し始める。
「う、嘘……」
「あれは……シャインミラージュ……？」
人間の身長など軽く超える巨大な台座。その上に十字架に磔にされる一人の少女の姿があった。
多くの口から漏れたシャインミラージュという名前。今まで彼女が見せてきたフォームのどれとも違うモノではあったが、桃色のバイザーやそのプロポーション。このタイミングで連れてこられるということはと、変幻ヒロインを知る者であればすぐに連想するのは難しいことではない。
グッタリと項垂れている様子から意識はないのだろう。人々の前で磔にされ、口々にその名を呼ばれているというのに当の変幻装姫からの反応はない。
「人間共がてめェの名前を呼んでるぜェ。反応してやらねェとなァ。オラッ!!」
ドズゥッ!!
「おぶぅぅぅぅッ!?」
トンっと軽くシャインミラージュへと近づいたグラッドが、剥き出しになっている柔らかな腹部へと拳を突き立てた。
内臓が破裂してしまいそうな重い一撃に、闇に呑まれていた変幻令嬢の意識が覚醒する。
「……あぐっ……ぐ、グラッド……!!」
目を覚ましたシャインミラージュの注意が、一番に憎き敵であるグラッドに向くのは当然だった。
しかしそれも束の間。囚われた正義のヒロインが現状を理解するのに時間はかからない。
「……ぁ……み、皆さんッ!!　はやくここから離れて!!　逃げてくださいッ!!」
僅かな混乱の後に変幻ヒロインの口から出たのは人々の安全を望んでのモノ。
拘束され何もできない状況で街を破壊されるという、脳裏に浮かんだ最悪の光景。いかに遠くに逃げたところで意味はないのだろうが、それでもそう叫ばずにいられなかった。
今の言葉でシャインミラージュであるという確信を得た人達は、正義のヒロインの敗北という事実を改めて覚え込まされながらも、速度はバラバラながらに遠ざかっていく。
「流石は正義のヒロインシャインミラージュだ。人間共もしっかりと言うことを聞いてくれるなァ」
逃げていく無力な存在達に対して何をするわけでもなく、ただ仮面の男は正義のヒロインの存在の大きさを褒めるだけ。
「……何が狙いだというんですの……!?　もしあの方達に手を出したりすれば、わたくしが許しませんわよ」
逃げていく人々の後ろ姿を見てほんの僅かではあるが安堵の表情を見せる変幻ヒロインは、バイザーの下の青い瞳でグラッドを忌々しく睨む。
囚われ、神聖なエナジーの自由すらも奪われた今の自分に何ができるのか。
正義のヒロインとして戦うことは難しいかもしれないけれども、それでもその意志が消えたわけではない。
今日まで多くの苦痛や屈辱を味わわされてしまっていたとしても、最後まで逆転の可能性を諦めてはいなかった。
「アレだけ無様な姿を晒してやがった癖に、いつも

著者近況　Twitterを始めてそれなりに長くなりますが、多くの作品に触れるきっかけになっています。そして新たな性癖も……どこかで色々と書いてみたいですね

登場人物紹介

シャインミラージュ
悪の組織ダーククライムと日夜戦う正義の変幻装姫。

グラッド
ダーククライムの凶悪怪人。圧倒的な戦闘力をもつ。

ドルコス
ダーククライムの幹部。肉弾戦を得意とする、パワータイプ。

デブロ
タキシード姿の豚型の人獣。ドルコスと同じく幹部のひとり。

ミスティ
ダーククライムの幹部。可愛らしい見た目のゴスロリ少女。

前回のあらすじ
コロシアム最終戦の相手であるミスティに自らのコピー技を浴びせられるシャインミラージュ。既にボロボロの彼女に勝ち目はなく、アナルまで蹂躙されて敗北。特別サービスと称した観客達からの暴行を受けコロシアムは閉幕したのだった。

口だけは一丁前だよなァ。ま、その強気な態度がいつ崩れるのか楽しみだけどよォ」

グラッドに敗北し、多くの調教を受け、更には地下での見世物ショー。

いくつも存在するダーククライムに囚われてからの最低な記憶の数々。いくら敗北から逃れられない出来レースであったとはいえ、口にしてしまったのは自分自身なのだから、それを思い返すだけで心が押し潰されそうになる。

事実であることは変わらずに言い返すこともできずにギュッと唇を強く合わせ、ただ悔しさに満ちた表情で睨むだけの変幻ヒロイン。

（わたくしが何をされようとも、せめて他に被害が出ないようにはしませんと……!!）

いかな非道な調教を受けようとも、この街や罪もない一般人だけは守らなければ。

「んんっ……!! くぅ、んぅぅ!!」

十字架磔によって、スレイヴフォームの状態で無防備な敗北姿を晒す変幻ヒロインは力を込めて脱出を試みるも、背後の十字架は僅かに揺れることさえしなかった。

「んむぅッ……お、おひゃめらひゃい……!?」

グラッドの手によって両の頬を掴まれ強く圧迫され、強引に口を押し出されるような惨めな姿。

言葉も満足に発することができず、むしろ無様さが際立つ始末。

「まァ安心してくれ。今日の狙いは人間共じゃなくお前だからなァ」

「ら、らんれふっへ……」

仮面に隠れたグラッドの口から紡がれる、挑発としか思えない、段々と速度を落としての言葉。

この場で行われるのはシャインミラージュへの次なる調教なのだと、そう言っている。

「観客がこれ以上減る前に始めるとするか」

パチンと、グラッドによる今日二回目の指鳴らしによる合図。

「な、今度は何を企んでいるんですの……!?」

地震を思わせる揺れは間違いなくこの巨大な装置によるもの。

つまりはこれだけ大仰な仕掛けを用いて、人前での調教をするというのだ。

一体どんな仕掛けなのか。それを考える間もないまま、台座となっていた部分が変形を始める。

「お前以外は楽しいことってとこかね。ほらよッ!!」

ズブブゥッ!!

「んひいいいいッ!? お、お尻いッ!!」

十字架も同様にその姿を変え始め、一度シャインミラージュの拘束が解かれた。

しかし、グラッドの手によって逃げることは許されず、それどころか一度コスチュームの尻部分が引っ張られたかと思えば、極太のバイブが尻穴へと挿入されてしまう。

「んあぁぁ……ぬ、抜きま、せんとぉ……んふぅ……きゃっ!? んぐぅっ……あぁぁ……ど、どれだけ、変態のようなことをぉ……」

震える足場の上で内股になりながらも、尻穴を犯す凶悪な黒バイブを抜こうと手を伸ばすが、それは容易く阻まれた。

十字架の内部から紐状の物体が射出され瞬時にシャインミラージュの身体に纏わりつく。

排泄穴からの肉悦に満足に力が入らない変幻ヒロインは抵抗らしい抵抗もできないまま、Gカップの爆乳を強調した状態で両脚を大きく開脚、更には後ろ手で拘束されるという『亀甲縛り』で上から吊るされてしまった。

（んんっ……な、縄が喰い込んで……バイブの入ったお尻がぁ……わたくし、お尻で感じるだなんて、あってはいけませんのにぃ……）

全身に強めに喰い込む縄が卑猥な玩具を内部へと押し込み、特に大きな尻悦を変幻令嬢へと刻み込む。

こんな変態的な刺激で感じてはいけない。そう思ってはいるのに、あの日怪物に犯され、調教を受けてからアナルは既にただの排泄器官ではなくなってしまっていた。

ただ押し込まれただけで腸壁が擦られて鋭い尻悦が生まれ、ビリビリと脳天に抜けてしまう変態的な刺激。

再びの拘束に自身で引き抜くこともかなわず、縄によって常に押されている状態が継続する。

「変態ねェ……」

含みのある呟きは変幻ヒロインに聞こえはせず、グラッドは揺れる足場から地面へと降りた。

吊るされるシャインミラージュ以外誰もいなくなった台座。その足場がスライドして消え、内部が丸見えとなる。

「み、水……?」

シャインミラージュの目に映るのは、巨大な台座の中に溜め込まれていた液体。

著者近刊 『変幻装姫シャインミラージュ 砕かれるプライド、穢される存在』『変幻装姫シャインミラージュ2 汚辱に染まりゆく光』 好評発売中！

博士の開発した特殊な液体でもない限りは、これはただの水なのだろう。つまりは、台座となっていた場所は巨大な水槽だったということ。
（わたくしを窒息させようというんですの……）
自由を奪われ吊るされた状態で、下には大量の水。そうなれば今から行われることはある程度は予想がつく。水責めによる窒息が狙いなのだろう。
「大体察してるとは思うが、これからその水で楽しんでくれよなァ。なァに、殺したりはしねェから安心はしてくれ。俺もまだ楽しみてェからよ」
変幻ヒロインの思考を読んでいるかのようなタイミングで、グラッドが自分勝手な言い分を含みながら笑う。
やはりというべきか、殺意がないのだけがせめてもの救いだろうか。
「さて、じゃァ始めるとしようぜ」
「んひいぃあぁぁぁッ!? お、お尻ぃ……!! お尻で、暴れてぇえぇッ!?」
グラッドの言葉を合図にしてか、突如として尻穴を占領する黒バイブが激しい振動と前後運動を開始した。
ただ震えるだけならばいざ知らず、生物のように内部で暴れられてしまえば、ただただ被虐の悦感を叩きつけられるだけ。
「くふぅあぁぁッ!! お、お尻……おやめなさいぃぃッ!! あ、んんぅッ!! な、縄が、強くぅ……!!」
巨大な肉悦にビクビクと卑猥に縛られた身体を暴れさせる変幻ヒロインだが、それは余計に縄をキツく喰い込ませるだけ。
自ら受ける刺激を大きくしているだけでしかないのだが、バイブの刺激を受け続ける限りどうすることもできない。
「ケツ穴でそンなに喘ぐなンざァ、変態なのはどっちかねェ」
嘲笑するようなグラッドの声が下から届く。
「はひぃっぃぃ!! こ、これは、あなた達、がぁ……んひぃあぁ!! あ、あ、あぁっひぃ!!」
怪物に犯され、ミスティにレイピアを突き刺され、その後も今日まで暇があればアナルに悪戯をされてきた。
その結果が排泄穴の望まぬ快感。他の誰でもない、ダーククライムの仕業に他ならないというのに、まるで最初からの変態だったような言い分に変幻ヒロインは怒りを覚える。
「そんなの知らねェなァ。今アへってンのはお前なンだから、ケツ穴で感じてる事実は変わらねェだろう？ 変態ヒロイン様よ」
「な、何を勝手なことをぉ……んひぃぁぁッ!! んおぉぉ、おぉっひぃぃ!?」
言葉も満足に言い切れないほどの強烈なバイブ振動に、変幻ヒロインは堪らずに下品な嬌声を響かせた。
振動が、ピストン運動が、排泄の為の器官から濃厚な変態刺激を送り込んでくる。
これが初めてであれば声も抑えることができたかもしれないが、何度も弄ばれてしまった今ではそれも不可能。変幻ヒロインは巨大な水槽の上で亀甲縛りで吊るされながら、無様な悲鳴を響かせ続けた。
「こ、これ、激しすぎますのぉッ……!! んんぅ、んおぉぉ!! ひゃひぃあぁ!! んぅっぐ、はんぅあぁッ!!」
そう、まるであの時の怪物を思い出させる、短くも激しい前後運動に腸壁が乱暴に摩擦される。
恥部以外で肌に食い込む黒縄が痛みを生み出しているが、それも巨大な快感の前では吹き飛ばされてしまっていた。
（だ、誰かに、見られているかもしれませんのにぃ……で、でも声が、勝手にぃ……）
ここがダーククライムの基地内ではなく天下の往来だということを理解はしているが、それでも閉じようと合わせた唇はすぐに上下に引き離される。
身体の奥底から押し上げられる被虐の恍惚が、凛とした正義のヒロインとは思えない下品な嬌声を押し出していた。
こんな姿を誰かに見られてしまいでもしたら……そう思っていても耐えることができないほどに、尻穴を蹂躙する玩具は力強く動いている。
一分一秒でも早く変幻装姫の身体に限界を与えんと、ダーククライムの用意したアナルバイブは暴れ続け、一切弱まる気配を見せない。
「んんんぅっ!! だ、ダメ、ですのぉ……これ、こんな、強くされてはぁぁ……くほぉおぉ!! んぅひぃ、あ、あぁっはぁ!!」
（か、身体が、限界にぃ……このままでは、頭、真っ白にぃ……）
このまま続いては、もうすぐにでも快楽のボルテージが振り切ってしまう。
ギチギチと、重力に従って爆乳をたぷんと釣鐘状に垂らす卑猥な姿で縛られながら、誰かに見られてしまっている状態で尻穴で絶頂を迎えるなんてしたくない。
そうは思っていても、アナルから全身を駆ける淫らな熱はどんどん肥大化して脳内までもを汚染してくる。
「なんだ……シャインミラージュが変な声を出してるぞ……」
「どういうことだ？ 一体何が……」
「……えっ……ど、どうして……あぁっひぃ!? に、逃げて、来ないでぇぇ……!! んおぉおぉ!!」
逃げていたはずの人々。しかし全員が全員遠くまで逃げていたわけではない。

物陰に隠れて様子を窺っている者もおり、ダークライムの破壊行為が始まらず、今日まで耳にしたこともなかったシャインミラージュの嬌声が聞こえて少しずつ姿を見せ出したのだ。

「少しだが観客も来たみてェだな。今日は何もしないでいてやるから、見てェなら見てていいぜェ。シャインミラージュの無様な姿をなァ」

異世界からの悪の言葉など信じていいはずはないのだが、希望の象徴たる正義のヒロインは敗北して囚われてしまっている。

どうせ逃げ場などないのだからと、近くにいる者達。特に男は、ゆっくりとであるが巨大な水槽の上で喘ぐ敗北ヒロインという餌に集まってきた。

「シャインミラージュの胸でけぇ」

「あんな縛り方されて……ケツで何か動いてるのか？」

自身の危険よりも今の状況の確認をと、よく見ようと近づく男達。

元より豊満なボディを持つ正義のヒロインに関心を持つ者達にとって、今の変幻ヒロインの姿はあまりにも目に毒であり、興味をそそるモノだった。

「お、お願いですから逃げて……んぅっうぅ!! おぉっほ!! み、見ないでぇぇぇッ!!」

多くの視線を浴びながらも必死に叫ぶのは、本当に逃げて欲しいからというのもあるが、今の痴態を見せたくはないからというのもある。

しかし、熱を帯びた男達の多くの視線が突き刺さる度に、身体の熱が更に上がっているようだ。

（も、もう、限界ですのぉ……あ、頭、真っ白になってぇ……!!）

けれどももう無理だった。耐えようとする身体が悲鳴を上げ、特に尻穴が肛虐の悦感に浸って浮き上がることができない。

「み、見ては、ダメぇぇぇぇぇッ!! んひぃあああぁぁあぁぁッ!!」

最後の懇願で叫んだのを切っ掛けにして、シャインミラージュの身体は快楽に呑まれた。

顎を跳ね上げ、ビクビクと全身を痙攣させての被虐の絶頂。排泄穴を犯されての変態的な恍惚に満たされる変幻ヒロインは、人々に見られている中で脳内を白く染め上げてしまう。

「ヒヒャヒヒッ!!」

変幻装姫の絶頂を確認したグラッドが笑った。

ぶびゅうううぅぅぅぅ!! ぶびゅるるるるぅぅぅぅッ!!

「んほおおぉぉぉぉ!! あ、熱いのが、熱いのがお尻の中にぃぃぃ!! は、入って……おぉっほぉひぃぃぃ!!」

キュぅっと、絶頂の反動で巨大バイブを強く締めつける変態尻穴へと、火傷しそうなほどの熱を持った、濃密な白濁粘液が放たれた。

一瞬で直腸内を満たす擬似精液に敏感な腸壁が反応を示す。嫌悪よりも快感が優先され、変幻ヒロインは更なる汚辱液を欲するかのようにより強く締めつけた。

「おいおい、シャインミラージュが変な声上げてんぞ」

「アレ……イっちまってんじゃねぇのか？」

正義のヒロインどころか、普通の少女ですら発しない雌の声に、男達が戸惑いを見せる。

だが間違いないだろう。亀甲縛りで吊るされる上空の変幻ヒロインは、囚われた状態で絶頂をしているのだ。

「はへぇあぁぁ……んぶぅっうぅぅ!?」

白濁液を排泄穴に浴びての肉悦を覚えている最中に、急に支えがなくなり身体が空を切るのを感じる。

バシャァンっと盛大な音を立て、周囲に水飛沫を散らしながら変幻ヒロインは水槽の中に叩きつけられた。

「ごぽぉぉっ!! んぶぉおぉ、んぶっ!! ぐぶぶっうぅ!!」

（い、息が……ま、まだ、バイブが動いてぇ……!!）

逃げ場のない水中。息をとめて少しでも長く苦痛の時間を耐えようとするが、擬似バイブからの白濁液は注がれたままで腸壁を熱く穢し続けていた。

それどころか淫玩具はとまる様子も見せずに尻悦は大きくなる一方で、閉じようとする口がこじ開けられる。

シャインミラージュの口からは多量の泡が生まれ水面へと上がり、表情は酸素を失っていく苦しみを訴え始めていた。

「か、壁が透明に……!!」

変幻装姫が肛悦に喘ぎ水中で不自由な身体でもがく中、台座であった巨大水槽の壁面が透過し始める。

周囲の人々からも、水槽内のシャインミラージュが苦しむ様が見えるようになっていた。

「んぶぅっぐぅ!! ごぽぽっ!! んぽぉおぉおぉッ!!」

（く、苦しいぃ……い、息をとめることが、全然できないだなんてぇ……）

拘束された身体では満足に暴れることもできず、ただ排泄穴の中で暴れる黒バイブの快感に翻弄されるだけのシャインミラージュ。

口からは絶えず残しておかねばならない酸素が泡となって水面へと消え、ガクガクと全身が快感とは違う痙攣を見せ始める。

本来ならばもっと長い時間耐えられるはずなのに、アナルバイブの肉悦のせいでそれもかなわない。

「んぐぽぉ!! がぽっ!!」

（も、もう……なにもぉ……）

段々と薄れていく意識が限界を訴え、最後に大き

く口を開いて多量の泡を生み出したかと思えば、グルンと白目を――
「……んぶぅあぁッ!? げほっごほぉッ!! かはっ……げほっげはっ……!! はぁはぁ……ぁ……はぁ……」
完全に目の前がブラックアウトする寸前、一気に変幻ヒロインの身体が引き上げられて元の位置にまで吊し上げられた。
反射的に咳き込み、新鮮な酸素を欲して大きく口を開いて胸を上下させる。
「言い忘れてたが、お前がイクとケツに入ったバイブからいいモンが出て、更には水に飛び込むって仕掛けってわけだ」
「はぁはぁ……い、言うのが、遅すぎますわよ……んんぅっうぅ!! ま、また、バイブがぁ……ごほぉ、おぉッ!! くひぃあぁっ!!」
明らかにわざとであろうグラッドの後出し情報に怒りを覚える間もなく、意識を失う寸前に沈黙していたバイブが再び活性化を始めた。
絶頂によって更に感度を増した排泄穴が変幻ヒロインに被虐の悦びを刻み、ギチギチと強く縛られながらも尻肉が震える。
「シャインミラージュが尻でイっちまったってのか……?」
「濡れたシャインミラージュ……イイなぁ」
水分を含み肌に張りつく黄金色の髪とコスチュームが、変幻ヒロインの姿をより扇情的なモノへと変えていく。
アナルでイったという事実もあるが、僅かに弱った表情を見せながら汗水を滴らせるその姿に、人々は変幻ヒロインへの欲望を表面化させ始めた。
「んおぉっおぉ!! お、お尻で暴れてぇぇ……!! お、お尻、掻き混ぜられてますのぉぉ!! おぉっほ!! んひぃぃぃ!?」
痛烈なまでの排泄穴の悦感に、亀甲縛りで拘束される変幻ヒロインの全身が跳ねた。
恥部から、形のよい顎から、じっとりと濡れる髪から滴り落ちる水滴が、水面に多くの波紋を生み出す。
「やっぱりケツで感じてるんだ……ダーククライムの奴らに犯されちまってたってことか」
「どうせもうおしまいなんだ。シャインミラージュの変態姿たっぷりと見てやる」
敗北した正義のヒロインが今日まで何もされていなかったわけがない。
変幻ヒロインは悪の手で調教を受けて淫らな身体に変えられてしまったのだと、その場にいる大半の男達が思った。
むしろそうでなければ、尻穴を犯されてあんなにも乱れるわけがないのだから。
「は、離れてぇ……!! んひぃあぁ!! こ、こんなわたくしの、姿ぁ……んおぉっおぉ!! み、見てはぁ……くふぅぅひぃぃぃぃぃッ!?」
離れるどころか近づき始め、更には数も少しずつ増え始めてくる人々の姿に、嬌声混じりの懇願をする変幻令嬢。
これ以上の痴態を見られたくない。そう思いながらも口を開けば、最後には下品な喘ぎだけが響き渡る。
熱く燃える排泄穴の快感に悶え、注がれた擬似精液が撹拌されるのを感じてしまうも、それでも次なる肛門絶頂のボルテージが一気に上昇していくのをとめられない。
（さ、先ほどよりも、お尻、気持ちよくてぇ……こ、このままではまたぁ……）
マゾヒスティックな悦びが、快感の炎を更に熱く燃え上がらせて水浸しの変幻ヒロインを絶頂へと押し上げる。
気を抜いているわけではないのに、ズブズブと犯し尽くす肛門玩具がシャインミラージュの身体を悦ばせるのだ。
「あぁっ、あぁぁッ!! くひぃうぅ!! だ、ダメだめだめぇぇぇぇッ!! おぉっひぃぃぃぃぃぃ!!」
すぐに限界は訪れた。
泣いてしまいそうな叫びは、外から見ている男達へか。イってはいけないという自分自身へか。それとも意志のない玩具へか。
だが変幻装姫が尻穴絶頂をしたという事実だけは確実であり、それはイコールでその後の責めへと繋がる。
ぶびゅうぅぅぅぅ!! びゅぶぶぶぅぅぅぅぅ!!
「んほぉっおおぉおぉぉ!! ま、また、精液入ってきてぇぇぇぇッ!!」
（お、お腹がいっぱいにぃ……で、でている量が多すぎますのぉぉ……!!）
逆流したわけでもなく、噴出した分がそのまま直腸内からその奥にまで留まる白濁粘液。
再び熱い汚辱液の激感に全身が悦び悶え、ギュゥっと引き抜くべきバイブを愛おしく抱き締めてしまう。
括約筋に力を込めて、まるで人の肉棒から搾り取るかのように強く。
たった二度の射精で早くもぽっこりと下腹部が膨らんでいるのを感じながら、変幻装姫の身体は重力に従って落下を始めた。
「んぶぅっおぉおぉぉ!! おぼっぶぅぅ!! んぶぅあぁ、ごぼぼぉぉ!!」
（ま、また水にぃ……あぁぁ……お尻の中の精液、滅茶苦茶にされてぇ……お、お腹、熱いぃ……!!）
再び水槽に飼われる一匹の雌とされたシャインミラージュ。

追え――ッ！
泥棒だ――!!
ソユ王朝のネックレスとブレスレット
たしかに頂戴したわよ♡
貴方たちなんかに捕まるものですか♪
おのれ怪盗シャノワール許さんぞ！
何度も儂の財宝を盗みおって!!
イッツ
マジッ――ック!!
神出鬼没の女怪盗が華麗に退散――!?
怪盗シャノワール
屈辱の脱出ミッション
漫画 COMIC／ぱふぇ

ほら！
どいてどいて——!!
うおお
捕まえられるものなら捕まえてごらんなさい
待て！
くそっ
じゃーねー♡
違法な手でお宝を集めるのよくないわよ
然るべき所に戻しておいてあげるわね♪
おのれ…シャノワール
ワナワナ
許さんぞ…！
クク…
なんてな
調子に乗る子猫には
キツい躾をしてやるわ

きゃっ!?

な…腕が動かな…

首輪と腕輪に磁石を仕込んでおいたのだ

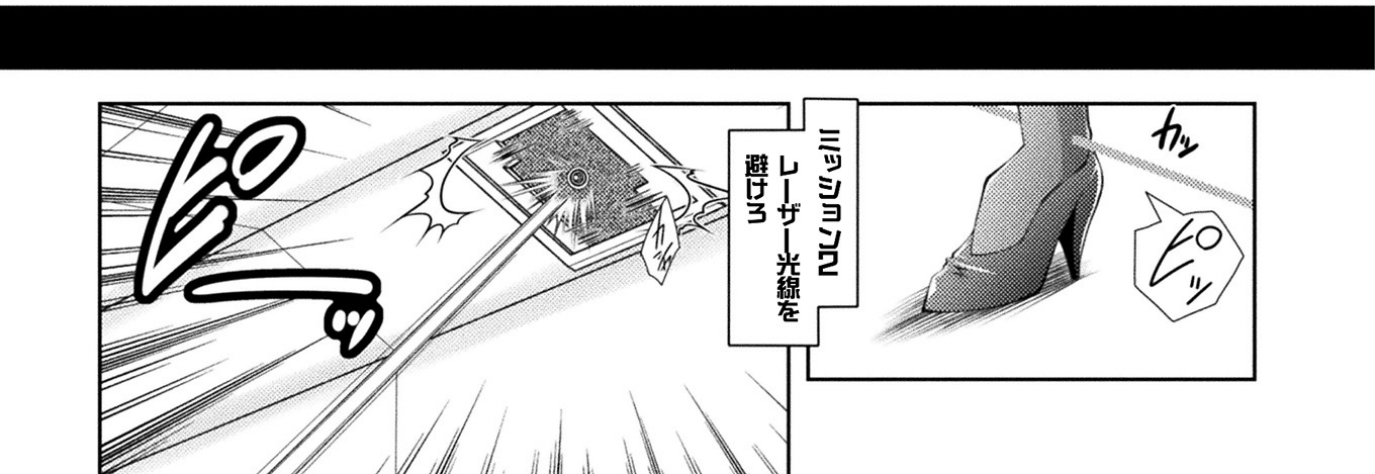
ハンデをつけさせてもらう

気付かなかったとは結構マヌケだな

うるさい!

手が使えないくらいどうってことないわよ!

すぐ突破してあげるからおぼえてなさい!!



ブス
ブス
!!
紙一重で
かわすとは
さすが
さすが！
さて
レーザーの
センサーを
止めるには
くっ
最初から
服を狙ったくせに
エロオヤジ
ガハハ
ハハハ
説明は
不要よ

しかし…気持ち悪ッ
シリコン？人肌みたいな感触ね
こんなくだらない物金かけて作って
金持ちって奴は度し難いわ
く…ッ
力いっぱい下げないといけないのね
滑って…これじゃまるで…
そのためにはしっかりくわえないとだけど…

やだ！
何よコレ
かけないで…よ！
やめ…っ
変に甘くてくさいし…
わはははは
引き続きミッション4
くッ！
調子に乗らないで!!
その容器を液体で満たせ
これを今ので…？
他の液体でも良いぞ
ぐふふふ

ハハハハ
気持ち良さ
そうだなぁ
ちがっ
くいっ
そんなに腰
振りおって
違うわけ
ないだろ
ふるえっ
振動…が
と…め…
えあああ♡
くうぅン
扉ッ
まだぁ!?
早くっ
早くぅ
あっ♡
ひい♡
だめえぇ!
感じちゃ♡
ビクビク
ビッ
は…あ
あはぁ♡
違うのぉ
感じてなん
か…ああ♡
い…やあぁ
見な…ひ
でぇえッ
ふるふる

だ…めええええ
ちが…
う…そ
イッヘな♡

くぅ――
悔しい…悔しい！
で…もこれで
あとは…
!!
ぐひひひ 良い恰好だなシャノワール
貴方は!!
何のつもりよ!?
最後のミッションだ
おぉぉッ
ズッ
ぷッ
あ～あ
あぁ
あぁ

sin 光臨天使
エンシェル・レナFD
FACE THE DESTINY
THE NOVEL
第三話 守る者、その末路
光臨天使たちの絆を嘲笑い、汚し尽くす!!
小説 NOVEL／黒井弘騎
挿絵 ILLUSTRATION／三色網戸。
原作 ORIGINAL／Triangle
原作PCゲーム
『sin光臨天使エンシェル・レナFD』も好評発売中!

「あ。あう……ふみゃあ……あ、ああ……」
それから、どれだけの時間が経過したでしょう。子供の身体では耐えられないぐらいの陵辱と快感に、わたしは気を失って倒れ込んでいました。
「うふふ、すごいね～レナちゃん。何十人の相手したの？　可愛いのにエッチなんだからぁ」
「親友のわたしたちを差し置いて、見ず知らずのおっさん相手に媚び売って……へへ。そんなんじゃ正義の変身ヒロイン失格だぞ、レナ？」
今までれなを犯していた人たちは、満足してその場を去りました。精液まみれで一人残されているわたしの前に、エンヴィーノイドが姿を見せます。
「あ……。みきちゃん……つかさちゃん……」
「それじゃ、これからはわたしたちと遊ぼっか？」
「レナにはまだまだ教え込んでやらないといけないからな。自分の身の程……ルシフェル・レナ様の玩具に過ぎないってことを、たっぷりとなぁ」
「……！」
ルシフェル・レナ――その名前で、わたしは思い出しました。
こんな事をしている場合じゃない……快楽に流されている時間なんて、わたしには少しもないって！
わたしには、やるべきことがあるって……！
「美樹ちゃん、つかさちゃん……。ごめんね……」
「？　何を言ってるんだレナ？」
「いまさら謝ったって、もう許してなんて……」
「……そうだよね。許してもらえるなんて……わたしも、思ってないよ……」
わたしは、覚束ない動作で立ち上がりました。子供のままの身体に力は入らないけど……ううん。
そんなの、本当は関係ありません。
こんな非力な子供の姿にされたこと……力が強いか弱いかなんて、そんなの、全然関係ないの。
本当に大事なのは、力なんかじゃなくって……！
「弱くてごめんね、美樹ちゃん。正義の天使失格だよね、つかさちゃん。でも、でもね……！」
――救いたい。
美樹ちゃんを、つかさちゃんを。大切な友達を。
そして、愛する人を……クーラちゃんを……！
「わたしは……光臨天使エンシェル・レナなの。わたしは決めたの……みんなを、守るって……！」
小さな子供の手で、わたしはカードを手にします。
そして祈り……誓います。
新たな覚悟……願いを……！
「お願いエンシェリウムカード！　わたしにみんなを守るための力を……。こんな弱くて情けないわたしだけど……その想いだけは、本物だから……！」
戦いに負けて、快楽に溺れて、何もかも忘れそうになってしまった情けないわたし……
けれど、そんなわたしの願いを……思いを……エンシェリウムカードは、聞き届けてくれました！
「？　何……この、魔力……!?」
「馬鹿な……ルシフェル・レナ様の邪精霊の力で、マギウスフォームの力は封印されているはず!?」
力が溢れます……。全知全能たる女神ラエリスの知恵と魔力、そのすべてが流れ込んできます！
「ありがとうエンシェリウムカード……。こんなわたしに、もう一度、力を貸してくれて……」
わたしはぎゅっとカードを握りしめると、大きな魔法の杖を手に、その言葉を叫びました！
「氷結と静止を統べる王……静かなる雪の女王リューネルフロン！　お願い、力を貸して！」
わたしが行使したのは、偉大なる氷の精霊王……時の流れさえ意のままに操る絶対の魔力です！
「ぐっ!?　こ、この魔力は……う、あああ！」
「レナ……これが、お前の、本当の……！」
呪われた時間は巻き戻され、正しき時の流れに修復される……幼くなっていたわたしの身体はみるみる元に戻り、おぞましく変質させられていたエンヴィーノイドもまた、正しき姿へと戻っていきます。
「ごめんね美樹ちゃん、つかさちゃん。わたしが弱いから……こんなにも苦しめて。でも、でも……！」
わたしは二人を真っ直ぐに見つめ、語ります。
「安心してね。今度こそ守るから……光臨天使エンシェル・レナは、みんなを救ってみせるから！」
完全に元の姿に戻ったわたし……光臨天使エンシェル・レナ・マギウスフォームは、ラエリスに授かりし魔力のすべてを一気に解放しました！
「精霊の聖なる力によって魔のみが滅ぼされ、罪なき少女たちは束縛から解き放たれますように……」
それは、本来、人の身には過ぎたる力……全知全能の女神のみが行使しうる、奇跡そのものの魔法。
わたしはすべての魔力と意志をもって、その力を今こそ顕現させます！
「偉大なる三界の精霊に告ぐ……今こそ、そのすべての力を！　オーバー・ザ・レインボゥ！」
リューネルフロンだけではありません。三界に棲

登場人物紹介

朋衛玲奈（エンシェル・レナ）
優しく純真、控えめで内向的な優等生。戦うことは嫌いだが大切なモノを守るために光臨天使となった。

エリカ・ラ・エティエンヌ
今は亡きエティエンヌ王国の王女。光の精霊を武装し、身の丈を超える長剣を優雅に操る。

アリシア・ヘリオゼネス（莉愛）
エリカの王国に仕える騎士。闇と復讐の武装精霊を操り、高い戦闘能力を持つ。

クーラ
マテリオネットと呼ばれる自律人工生命体。レナを救うため、あらゆる世界線を移動してきた。

坂下美樹、葉山つかさ
快活な美樹と優等生タイプのつかさ。玲奈の大切な親友でクラスメイトの少女たち。

前回のあらすじ
時間を操る邪精霊によって大切な学友の美樹とつかさを異形の魔導生体兵器に変えられ、自身は若年化されてしまったレナ。幼気な体を異形の親友たちに犯される中でレナは快楽と絶望に屈していく。

まいしすべての精霊たちの魔力が融合した、それはマギウスフォーム最大最後、究極の魔法です！

「う、うお……あああああああっ！」

七色の輝きが、エンヴィーノイドを、背後で邪悪な魔力を放ち続けるクロノエレドを包み込みます。

美樹ちゃんとつかさちゃんには傷一つつけず、優しく包み込んで悪しき呪いから解放し……邪悪に堕ちた武装精霊には、正義の裁きを下すのです！

「ギ、ギィィィィ――――！」

おぞましい絶叫を上げ、光の中に呑まれ消えていく邪精霊。ルシフェル・レナが放った時を司る武装精霊は、こうして完全に消え去りました。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……っ！」

わたしは杖によりかかってなんとか倒れ込むのを防ぎます。心臓が張り裂けそうなぐらいに早鐘を打ち、全身にどっと疲労がのしかかります。

「う……あぁっ。へ、変身が……解けちゃう……」

魔力が尽き果て、マギウスフォームのコスチュームが消えていきます。通常の光臨天使の姿はなんとか維持できていますが、もう、マギウスフォームへと変身することは出来ないでしょう……。

「でも……これで……っ！」

「ああ……。ありがとう、玲奈ちゃん……」

「信じてたよ、玲奈……あたしたちの、天使……」

二人も、肉体への負担は大きかったのでしょう。地面に倒れ込みながらも、美樹ちゃんとつかさちゃんは、わたしの名を呼んでくれました。

「頑張ってね……玲奈ちゃん。信じてる……玲奈ちゃんのこと、絶対に、信じてるから……」

「応援してるよ、玲奈……がんばれ……よ……」

二人は最後までわたしのことを案じながら、目を閉じました。生命に別状はありません……これだけの騒ぎです。すぐに治安部隊が駆けつけるでしょう。

「うん……ありがとう美樹ちゃん、つかさちゃん。二人の気持ち……受け取ったよ」

二人のことが心配なのは当然です。けれどわたしには、まだ、やるべきことがあります！

「見ましたか、ルシフェル・レナ！　これが貴方の見下した人の心の強さです。わたしたちは貴方の玩具なんかじゃない……一人の人間なんです！」

『ヒヒヒッ！　さっきまであんあん喘いでた牝犬が吠えるじゃねえかァ。雑魚の邪精霊一匹倒したぐらいで調子に乗るんじゃねえぜエンシェル・レナ！』

わたしの心に、邪悪な声が響きます。

光臨天使にとって心を通わせたはずの武装精霊……大切な仲間を失っても、なお楽しげに。邪悪な愉悦に、彼女は声を震わせていました。

『マギウスフォーム……確かに強力な魔力だ。しかしその力ももう使えない……そこで倒れてるくだらない友達とやらのせいでな。そんなザマでこのわたしの相手が務まるとでも思っているのか!?』

確かに、彼女の言う通りです。わたしは疲労困憊で、マギウスフォームは使用できないでしょう。そしてそれは、間違いなく大きな痛手になります。

でも……わたしには、何の後悔もありません！

「そんなの……関係ありません、考えてもいません！　わたしは大切な友達を……美樹ちゃんとつかさちゃんを助けたかった……それだけです！」

わたしは引きませんでした。

ルシフェル・レナの言葉を……わたし自身の声で語られる言葉を、わたしは全力で否定します。

わたし自身の心を、真っ直ぐにぶつけます！

「……ククッ。そうだよなァ……お前なら……いや。わたしならそう言うよな、その道を選ぶよなぁ！」

そんなわたしに対し、ルシフェル・レナは……。

憎悪とも憤怒ともわからない、凄まじい激情を滲ませて、吐き捨てるように叫びました。

「誰かのために自らを犠牲にする……すべてを失ってでも、大切なものを守ろうとする！　まったく狂ってやがる……それがお前だ朋衛玲奈！」

「……」

わたしは、何も言い返せませんでした。

狂っている――彼女はそう言いました。

確かに、わたしは自分を犠牲にしています……戦いなんて大嫌いなのに、光臨天使として力を振るい、命を奪い、そして自らも傷つき、汚されています。

それは今までも、そしてこれからも……わたしが光臨天使である限り、ずっと続くでしょう。

「そうだ！　誰もお前を理解しない、お前は決して報われない！　お前が……わたしが辿る運命の先にあるのは破滅のみ……だからわたしは変えたのさ。守る側から壊す側、破滅させる側に回ったのよ！」

「……ルシフェル・レナ。貴方はわたしとは違う……貴方には壊すものはたくさんあっても、守るべきものは何もない。貴方は……そんな……」

わたしには、彼女の考えは少しもわかりません。

誰かを傷つけて喜ぶなんて、少しもわからない。

けれど……彼女の気持ちは、少しだけ……。

『……はっ！　何をわかった気になってるんだよ。教えてやるよ、お前がどれだけ愚かで狂っているのか……来いよ、わたしの居城へ。お前の大事なお仲間もお待ちかねだからなぁ！』

怒りと憎しみを込めた声とともに、目の前の空間がねじれました。異次元空間へのゲートを簡単にこじ開ける……あまりにも強大すぎる魔力です！

「クーラちゃん……エリカさん……アリシア。待っててねみんな！　今すぐ、助けに行くから！」

けれどわたしは、少しも迷うことも恐れることもなく、その暗黒の扉へと飛び込みました！

※　※　※

「ククク！　よく来たなエンシェル・レナ……まぁ寛いでくれよ。何もない場所だけどなハハハハ！」

著者近況　SNSやネット掲示板などで「エリカ姫がエロすぎる」「とにかく弱い」「無様すぎる」「敗北者」などという愛溢れる意見をよく見ます。そんな熱心な姫様ファンの方は今回の活躍をぜひご覧ください！

「……ルシフェル・レナ……！」

わたしの住む世界とは異なる次元世界……ここが、ルシフェル・レナの元いた世界なのでしょうか。

まさに魔王の居城という佇まいですが……何もかも荒れ果て、寂寞としています。まるで彼女の心を表したみたいな……どこか寂しい、壊れた世界です。

「あ、ああっ……レナ、さん……！」

「っ……クーラちゃん！」

そして、そんな世界に、彼女はいました。

禍々しい玉座に腰掛け、邪悪な嘲笑を浮かべて……その腕に、クーラちゃんを抱きしめながら……！

「レナさん……あ、ああ。すみません、わたしがこのような不様な……ふあ、あ、あああっ！」

「おいおい、何調子こいてるんだダッチワイフが！ さっきまでアヘアヘイキまくってたのに、愛しいレナさぁん♪ の前じゃあカッコつけたいってか？ 揃いも揃ってお前らは本当によぉ～！」

「そ、そんな……言わないでください、レナさんの前でこんな……ふあぁぁ、は、激しいぃ～！」

ズボ、ズボズボズボボ！ ルシフェル・レナはわたしと変わらない細腕で、しかし力強くクーラちゃんを抱きしめて、激しく腰をぶつけ合います。

わたしと同じ女の子の身体なのに、股間からは大きなペニスがそそり立っていて……それが何度も何度も、クーラちゃんのあそこをえぐります。

「ひ、あっあっあっ！ だ、だめです……卑怯です、こんな相性良すぎるペニスで弱いトコばかりされたら……んはぁぁっまたイクっ、レ、レナさんが見てるのに……クーラは、またイってしまいますぅ！」

「！ ああっ……ク、クーラちゃん……！」

申し訳なさそうな、消え入りそうなほど切ない声を上げながら、激しく身体を痙攣させるクーラちゃん。その姿に、わたしは思わず声をなくしました。

「ヒヒヒッ！ 何だかんだ言っても身体は正直だよなぁ～。それに、大好きなレナさぁん♪ に見られて余計興奮しちまったか？ あれだけハメまくったのにすげえ締め付けで……ひひ、やっぱわたし専用のダッチワイフは最高だわ、ひゃはは！」

「うあぁ、そ、そんな……ひ、ぅぅ！ い、いやです……言わないで……み、見ないで。レナさん……こんなクーラを、見ないで……ください……！」

「……ルシフェル・レナぁっ！」

変わらずクーラちゃんを犯しながら、勝ち誇った表情でわたしを一瞥するルシフェル・レナ。

その瞬間、わたしの中で、何かが切れました。

「許さない……わたしの大切な人たちを……クーラちゃんをこんな目に遭わせて！ ルシフェル・レナ……貴方だけは、絶対に許しません！」

「おーおー、いいねぇその目、その表情！ それでこそお前だ、それでこそわたしだ！ 自分以外の誰かのために……大切なもののために自分のすべてを捨ててでも戦う、何もわかってない狂人の信念だ！」

怒りを爆発させるわたしを、楽しげに、そして冷ややかに見下すルシフェル・レナ。

やはり、彼女の言うことはまるで理解できません。大切なものを守るために、自分を犠牲にしてでも戦う……そんなの、当たり前に決まっています！

「かけがえのないものを破壊し、弄び、蹂躙する……超次元の魔王ルシフェル・レナ！ 武装天使の聖なる力によって、正義の裁きを受けなさい！」

湧き上がる激情に任せ、わたしは駆け出しました。先の戦いの疲弊もあります。魔力も消耗しきっています。けれど、そんなもの関係なく……魔王が座する玉座へと、わたしは真っ直ぐに迫ります！

「ははっ！ そうだ、それでいい！ そんなお前を……何も知らない愚かな自分を叩き潰すのは一番の愉悦だ。さぁ行け、犯し殺せリーネシャヘル！」

主の声に応え、邪悪なる武装精霊……イーブルたちが虚空から姿を顕します。

頭足類の頭部を持った触手まみれの巨大な怪物……わたしの知る姿とはまるで違いますが、エリカさんが契約している光の精霊王、そのイーブルです。

「貴様が光臨天使エンシェル・レナか。ふむ、少しは愉しめそうだな。この雑魚どもとは違ってな」

傲慢に囁きながら、邪精霊リーネシャヘルは触手を蠢かしました。するとその内部から、無数の糸で雁字搦めに拘束された、二人の少女の姿が見えます。

「う、あ……れ、レナ……」

「気をつけて……こいつの能力は……う、ああ！」

どれだけの苛烈な陵辱を受けたのでしょう……。二人は見るからにボロボロで、全身白濁した粘液まみれです。疲弊しきりながらも快楽に上気したその表情には、普段の凛々しさの欠片もありません。

「エリカさん、アリシア！ 待ってて……すぐに、助けるから！」

立ちはだかる巨大な敵を前にしても、わたしは勢いを止めることはありません。

二人を倒したこの邪精霊は、恐るべき強敵に違いありません。対してわたしは、先程の戦いで魔力を使い果たし、マギウスフォームは使用不可能。けれど光臨天使には、まだ残された力があるのです！

「お願い、エンシェリウムカード……！」

わたしはカードに、新たな祈りを捧げます。

それは光臨天使に残された、もう一つの力。

どんな巨大な敵にも怯まない決意と勇気……ラエリスの戦女神としての側面の顕現です！

「ラエリスの炉を開き、その猛々しき勇気を……武装天使の威光をもって……光臨天使エンシェル・レナを、新たな姿に、変えて……！」

コォォォ……！ 真珠色の衣を雄々しき光輝が包み込み、その姿を変えていきます。

光臨天使の可憐なコスチュームは、隙間なく肌に

著者近刊 『聖天使ユミエル Ⅰ～Ⅳ』『ディバインハートマキナ ～反逆の女神～』『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』『鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者』『光臨天使エンシェルレナ 淫辱の螺旋』ほか 好評発売中！

密着するボディスーツへ……苛烈な接近戦のために最適化された、機能的な密着スーツへと変じました。
大きく伸びた羽飾りや硬質な腰パーツなど、天使の聖性を残しながら、戦鎧としての猛々しさが強調されたコスチューム。胸やお尻のラインまで浮き出すほどの密着スーツは、わたしの動きをまったく妨げず、最大限に力を発揮するためのものなのです。
「エンシェリウムカード・エクスチェンジ！　フォーム……エイジス！」
光臨天使エンシェル・レナ……エイジスフォーム。
比類なき力と勇気を秘めた新たなる姿に変わりながら、わたしは雄々しく名乗りを上げました。
「へぇ～、エイジスフォームねぇ。魔力リソースをすべて白兵戦能力に回した、マギウスとは正反対の接近戦特化型か。色々な姿になれてなかなか器用じゃないの。弱者は弱者なりに考えてるのねぇ」
玉座の上で変わらずクーラちゃんを抱きながら、魔王は冷たくわたしを値踏みし、そして笑いました。
「ま！　そのご自慢の新フォームも、ただ犯されるだけの玩具だけどな。ヒヒ、わざわざ違うコスに着替えてくれるとはファンサービスいいなぁ！」
「黙りなさい！」
耳障りなわたし自身の声に、わたしは叫びました。すぐさま彼女のもとへ急ごうとするも、その前に、巨大な邪精霊リーネシャヘルが立ちはだかります。
「ふん、光の精霊王を無視とは余裕だな。その力がどれほどのものか知らんが……叩き潰してやる！」
邪悪の巨腕が、力任せに振り下ろされます。ですがわたしは引くことも、避けることもしません！
「鈍色の守り、盾の精霊ハルグリッター！　その鋼より強き体躯で我が身を守り給え！」
振り下ろされた拳を回避することもせず、わたしも両手を掲げ受け止めます。わたしの声に応え実体化した盾の精霊が、邪精霊の攻撃を防ぎます！
「な……に……!?　受け止めただと……!?」
ガキィィィッ！　凶悪な振り下ろしの直撃を受けても、ハルグリッターには傷一つついてはいません。それでも駆け抜けた凄まじい衝撃は、床にビキビキと罅を入れるほどですが……エイジスフォームの強化された斥力装甲が、そのすべてを吸収します！
「見たいなら……見せてあげます。これが戦女神ラエリスの武威を授かりし……光臨天使エンシェル・レナの、エイジスフォームの力です！」
エイジスフォームは、邪悪を滅ぼす武装天使ラエリスの、戦神としての力の顕現です。
魔法を行使することは出来ませんが、聖なる鎧の防御力は圧倒的。わたしの身体能力は何倍にも強化され、武装精霊にも従来以上の力を与えます。
盾の精霊ハルグリッターは圧倒的な防御力を発揮し……そして武器型の武装精霊なら、その破壊力は！
「誇り高き王の牙、槍の精霊スピニール！　我が願いに応え、その鋼を貫きし力を我に与え給え！」
わたしの願いに答え、巨大な槍が姿を現します。
槍の精霊スピニール……誇り高き正義の牙で、あらゆる邪悪を貫き滅ぼす武装精霊。ただでさえ圧倒的なその攻撃力に、エイジスフォームの力が加われば、巨大な邪精霊が相手でも……！
「はああっ！　コズミック・ペネトレーション！」
巨人の拳を跳ね上げ返すと、わたしは両手でスピニールを構え、渾身の力を込めて突き出しました。
星さえ貫く必殺の一撃が、巨大な拳を撃ち貫き……破壊の力は邪精霊本体にまで駆け抜けます！
「ぐっ!?　こ、この威力……ぐ、ぐあああ！」
「どうですか！　これが正義を愛する武装精霊と、光臨天使の力です！」
片腕が拳から肩まで引き裂け、鮮血が降りしきります。絶叫する邪精霊に向けて、わたしはさらなる追撃のために再びスピニールを構えました。
「邪悪なる精霊王リーネシャヘル！　わたしの手で浄化します……二人を、返してもらいます！」
胸部には二人が拘束されていますから、攻撃は出来ません。なら次に狙うのは、不気味な触手まみれの頭部……乾坤一擲の投擲で、一撃で決めます！
「ク、ク、ククク！　そうだ……エリカとアリシアは未だ我が手中にある、それがどういうことかわかっているのか、愚かな正義の従僕よ！」
もはや趨勢は決定的……油断ではなく、そう確信していたわたしに対し、邪精霊は不敵に微笑みます。
「!?　な、何を……ああっ!?」
不気味な不安に駆られ、一瞬攻撃を躊躇ってしまう……勝負は、まさにその瞬間についていました。
「あっ……ぐ、ううぅ！　あぐ、あああ！」
「レ、レナ……あう、ぐ、ああああ！」
「！　エリカさん、アリシアッ！」
囚われの二人が、苦しげな声を上げます。見れば二人のコスチュームはおぞましく変形し、触手まみれの異形と化して装着者を締め上げているのです！
「おっと！　動くなよ光臨天使……このイルージオは加減を知らぬ。少しでも動けば、こやつらの身体は二目と見られぬ八つ裂きの肉塊へと変じるぞ」
「！　そんな……ひ、卑怯です！」
わたしは、すべてを理解しました。エリカさんとアリシアのコスチュームには、影の邪精霊イルージオが寄生していたのです。いざとなればこうして人質に取れるように……戦う前から、ずっと！
「ククク、ヒヒヒ！　卑怯ぉ？　ああそうさ。世の中は全部理不尽、敵はみんな卑怯で卑劣な外道ばかり。それでも大切なもののために戦うんだろ？　正義の変身ヒロイン様は辛いよなぁ～ヒャハハハ！」
「っ！　貴方という人は……どこまで……！」
最初から、すべては彼女の手の内だったのです。

オラぁ もっと激しくしゃぶれよ淫乱天使サマ!!
あの時から…一体何時間が過ぎたんだろうか
ああイイよぉ悠美ちゃんのスベスベ手袋！
聖天使ユミエル
カオティックロンド
第5話 折れない翼
オメガエクリプスに負けたあの時から
私は守るべき街の人達の性処理玩具にされている
すげえぞ このマンコこんだけ犯してんのに締まる一方だ
原作 ORIGINAL 黒井弘騎
漫画 COMIC 白う～凪い
好評発売中!
白う～凪いの単行本『聖天使ユミエル エンドレスフィード』

何処に擦り付けても
スベスベでチンポに
吸いついてくるぜ!!

でも
もうそんな事
どうでもいい…

ああっ
悠美ちゃんの全身
性器ですぐにでも
射精しそうだぁ!!

ハムう

ちゅぱ

ちゅっ

そっ…
そんなぁ

ヨシッ!
手前(てめ)えの
雌豚マンコに

俺様の精液
溜めてやるから
自分でその柔肉
マンコ開けェ!!!

あひっ♥

だって…

はっ…

はいいっ

悠美のザーメン便器
オマンコに皆さんの精液
一杯下さいひぃっ♥♥

ああああ～っっ♥♥♥
ぴゅっぴゅ
あっ♡
はぁっ♡
ぴゅぴゅ
びくっ
ドピュッ
だって私は今幸せなのだから……
ぶぢゅ
ぴゅるるっ
んぅ♡
びぢゅ
ぴゅるるっ
びちゃ

ああ…スゴいのぉこんなに一杯溢れてるぅ

ぴゅ

ぽ♥

ゴ

はひっ

ハー

ハー

あっ

ぐいっ

いっん♥

ゴリュ

あっ♥

ゴリュ

ちゅぱ

ちゅぱ

くくっ とんだ淫乱ヒロインだぜまったく!

ニャ

ビグッ

そんなに欲しいなら俺の拳で卵巣まで精液押し込んでやるよ!!

くちゅ…

おっ?

ズ

ぐりゅ

ボ

はへ?

オラぁ!!

オラ孕め!!
孕めっ!!
ぶちゅ
ぶちゅ
ボギュ
ボギュ
おぉぉ♥
んひっ♥
わだしぃ このまま子宮壊されぢゃうううっ!!♥
ぎぁぁ〜♥♥♥
びぐっ
びぐっ
イクうっ!!!
んっんっ
あっぁ〜っ!

夏凛への調教が進んでいく一方、
王女にも醜男の魔手が迫り……？

ネトラレ異世界転移

Netorare
Another World
Transition

身体を差し出す少女騎士

第四話 引き裂かれる王女の想い

小説 NOVEL／上田（うえだ）ながの
挿絵 ILLUSTRATION／弥弛（みち）

前回のあらすじ 魔力を得るために身体を売り続け、さらには国の大臣・グエースにまでも穢されてしまった夏凛。見知らぬ中年男に身体を預けた罪悪感に彼女は、恋人のもとには帰らず自らジェイドの部屋を訪れてしまう……。

「ん……んんっ」

日差しを感じた。ゆっくりと夏凛は目を開く。視界に天井が映った。いや、正確に言えば天井ではない。それは天蓋だった。毎朝見ているものとは違う。何故天蓋が？　そんな疑問を抱きながら窓の外へと視線を移した。外は明るい。日差しが差し込んでいる。空は青々としていて雲一つなかった。とても気持ちが良さそうな陽気である。だが、そうした天気の良さを気にする余裕は夏凛にはなかった。

（どういうこと？　いつもと違う）

窓から見える光景――それは天蓋と同じくいつも見ているものとは違っていた。間違いない。いつもとは違う部屋だ。

（でも……それじゃあここは……）

そんなことを考える。

「ああ、起きられましたか」

すると声がかけられた。

慌ててそちらへと視線を向ける。

するとそこには優しげな表情を浮かべたジェイドが立っていた。普段のローブ姿ではない。ガウンを身に着けている。どうやら彼も寝起きらしい。

「なんで？」

（どうしてこの男がここにいる？）

そんなジェイドの姿に思わず夏凛は呟いた。なんで？　どうしてジェイドがいる？　というよりも、何故自分がここにいる？　ここはいつもの部屋じゃない。ジェイドの部屋だ。どうして？

考える。昨晩のことを……。

するとすぐさま記憶が蘇ってきた。グエースに――醜い男に散々嬲られた記憶が。同時にその後のことを思い出す。

グエースに抱かれた後、奏多とは顔を合わせたくなくて夏凛はここに、ジェイドの部屋に戻ってきたのだ。そしてジェイドとキスをして、そのまま口付けの心地良さに溺れるように瞳を閉じてしまった。

「昨晩貴女はかなり消耗していた。ここに帰って来るなり糸が切れた人形のように眠りについてしまった。だから泊まっていただいた。それだけのことですよ。彼を呼ぶべきでしたか？」

記憶の正しさを証明するようにジェイドが説明を重ねてくる。

彼を呼ぶ――奏多をここに……。

「駄目だっ！」

思わず声を上げてしまった。

「ん？　何がです？」

ジェイドがジッと見つめてくる。

「あ……いや、なんでもない」

慌てて首を横に振った。

「それなら構いませんが。それよりどうします？　そろそろ朝食の時間ですが、ここで食べていかれますか？」

普段のジェイドとは違う。彼が見せてくるものは気遣いだった。優しさを感じさせる言葉。何故か胸がドキッとしてしまう。

「……いや、いらない。帰る」

そうした想いを振り払うように拒絶の言葉を口にすると、身を起こし、ベッドから降りた。

そこで気がつく。自分が男物の寝間着を身に着けていることに……。

「これは……」

「私の寝間着です。流石に普段着で寝かせるのはどうかと思いましたからね。着替えられますか？」

「当然だ」

強がるように頷く。

（……これ……ジェイドの匂いがする）

自分とは違う体臭に全身が包まれているのが分かる。ジェイドの匂いだということも理解できてしまう。恋人ではない男の匂いだ。だが、あのグエースの牡臭い香りに比べるとなんだかまだ安心できるような……。

（違うっ！　違う違う違うっ!!）

必死に心の中で否定に否定を重ねた。

行動でもそれを示すように、すぐさま夏凛はジェイドが取り出してきたいつもの制服に着替える。

「昨晩は申し訳ありませんでした。そして……ありがとうございます」

そんな夏凛に対してジェイドが口にしてきたのは礼の言葉だった。昨晩のことを気にしているのか、やはりどこか優しい。弱っているせいだろうか？　少しだけそうして優しくされることに、なんだか安心感のような感情を抱いてしまう自分もいた。

（変なことを考えるな。こいつは最低な男だぞ）

けれど、すぐに正気を取り戻す。ジェイドの言葉に対して何も応えることなく、逃げるように夏凛はジェイドの部屋を飛び出すと、自分と奏多の部屋へと戻った。

「あ……夏凛。良かったぁああ」

部屋の戸を開ける。すると奏多が本当に安心したとでもいうような表情を浮かべた。心の底からホッとしていることが分かる。奏多の表情は酷く疲れきっていた。目の下にはクマだってできている。どうやら一睡もせず夏凛を待っていてくれたらしい。そんな姿に酷く胸が痛んだ。

「その……済まない。えっと……魔力の制御に失敗して動けなくなってしまったんだ。だからその……昨日は講義室に泊まって……」

申し訳なさが胸いっぱいに広がる。だが、本当のことを話すことはできない。だからだろうか？　言い訳するような言葉を口にしてしまっていた。いつもよりも早口で……。

「そっか……。えっと、それでその、今は大丈夫なの？　まだ何か変なところとかある？」

そうした嘘を奏多は信じてくれる。本当に心配そうな表情を向けてくれる。より強く胸が痛んだ。

（奏多は私を本当に心配してくれている。なのに私はこんな奏多を裏切って……）

蘇ってくる。グエースに犯された記憶が……。ジェイドとキスをしてしまった記憶が……。

「ごめん奏多。本当にごめん」

登場人物紹介

【夏凛】お堅い性格の美人JK。幼馴染の奏多と共に異世界に召喚される。【奏多】夏凛の幼馴染で中性的な外見の少年。【ジェイド】性格にやや難のある王国随一の魔導師。【レイリア】異世界のお姫様。夏凛、奏多を召喚した張本人。

涙さえ溢れ出そうになる。

「ごめんって……仕方がないことだろ？　夏凛が謝るようなことじゃないよ」

そんな夏凛を奏多はギュッと優しく抱き締めてくれた。

密着する身体と身体。奏多の身体はジェイドのものと比べると正直頼りない。しかし、とても安心できる。

「奏多……好きだよ」

愛おしさがわき上がってくる。強い想いに後押しされるように、夏凛は自分から奏多の唇に口付けをした。ジェイドとしたキスの記憶を打ち消そうとするように……。

＊

（最近夏凛がおかしい）

以前までの彼女とは違う気がする。なんというか、どこか表情に影があるというべきだろうか？　なんだか落ち込んでいるようにも……。

（それになんというか……）

自分に対して何か嘘をついているような気がする。

（いや、そんなこと考えちゃ駄目だ。夏凛が僕に嘘をつくなんてそんなこと……。でも……）

幼い頃から家族のように一緒に過ごしてきた。だからこそ、そう思ってしまう。夏凛を疑うなんてあってはならないことだと分かっていても……。

「はぁ……自分が嫌になる」

城の中庭に置かれたベンチに座りそんなことを考えながら、奏多は一人空を見上げてため息をついた。

「どうかしたのですか？」

すると視線を遮るように唐突に背後からレイリアが自分の顔を覗き込んできた。

「ほわぁあああっ！」

いきなり目の前に現れた王女様の可愛らしい顔。思わず悲鳴を上げてしまう。

「むっ！　人の顔を見て悲鳴を上げるなんて失礼ですよ奏多さん」

「ご……ごめんなさい。でもその……いきなりだったから本当に驚いちゃって」

ちょっとだけ不機嫌になる王女。その表情に少し可愛らしさも感じつつ、謝罪の言葉を告げる。するとレイリアはすぐさま口元を緩めると、コロコロとした笑顔を浮かべて見せてくれた。

「ふふふ、驚かせ作戦成功みたいですね♪」

「驚かせ作戦って……。子供じゃないんですから」

「ごめんなさいね。でも……少しは気分も楽になったでしょう？」

「え？　あ……その……分かりました？」

何が分かったのかと具体的なことは尋ねない。けれど、こちらに来てからこうして一緒に話す機会が多いからだろうか？　王女ははっきり口にせずとも奏多が問いたい言葉の意味を理解してくれた。

「分かりますよ。貴方が落ち込んでることくらい。大切なお友達のことですからね」

「そうですか……その……ありがとうございます」

自分を励まそうとしてくれたらしい。素直に嬉しかった。

「別に礼を言われるようなことじゃありません。それに……まだお悩みを解決できたわけじゃないですからね。だから教えてください。どうしたんですか？　何を悩んでいたのですか？」

問いの言葉と共にレイリアはキョロキョロと周囲を見回し、誰も見ていないことを確認すると遠慮することなく奏多の隣に腰を下ろしてきた。

「これは不味いですよ」

奏多は慌てる。強い身分制度がある国で平民扱いである自分と王女が二人きりになるなどあってはならないことだからだ。

「大丈夫です」

そう言うとレイリアは「隠密」と呟いた。すると王女の身体から魔力のようなものが溢れ出し、周囲を包み込んだ。

「これは？」

「隠密の魔法です。私達の姿を隠してくれるものですよ。誰かに見られる心配はこれでありません」

「へえ……そんなこともできるんですね」

まさに魔法だ。

「それで……話を戻しますが。教えてください。奏多さんは何を悩んでいるのですか？」

「いや……でも……」

気持ちは嬉しい。しかし……。

「私が王女だからと遠慮しないでください。私は一人の友人としてここにいるんです。その……大切な……そう、大切な人である奏多さんの力になりたいんです。だから教えてください」

奏多の遠慮を見抜いたような言葉を向けてくる。いや、言葉だけじゃない。真っ直ぐ目を見つめてくるなんてことまで……。

向けられる表情を見れば、レイリアの言葉が心の底からのものだということが奏多にも分かった。なんだか胸が熱くなる。ここまで自分を心配してくれているレイリアの気持ちが本当に嬉しかった。

だからだろうか？　気がつけば奏多は最近夏凛の様子がおかしいことを、何か嘘を――隠し事をしているのではないかということを王女に話していた。

「ホント僕って駄目ですよね。大切な恋人を疑うようなことを考えちゃうなんて……最低ですよね」

夏凛に対する申し訳なさが膨らんでくる。レイリアだって呆れているかもしれない。

「そんなことありません」

だが、王女は奏多を否定しなかった。それどころかギュッと奏多の頭を抱き締めるなんてことまでしてくれた。

「え？　あ……レイリア様!?」

王女の胸に顔が埋まる。柔らかな感

著者近況　最近久々にMMO始めたら、なんか面白くて嵌まってます。狂ったようにやってますよ。なんか、ハマるとすげぇ勢いでやって、飽きたら一瞬でやめるってことが本当に多いな私。あ、そういえば4話ですがまだ終わりません。もうちょっとだけ続くんじゃ！

触が伝わってくる。まるで想定外の事態に思わず困惑の声を漏らしてしまった。流石にこれは不味いとも思う。しかし、同時に優しさに溺れたいという感情も膨れ上がってきた。最近夏凛と少し距離ができてしまっているからだろうか？　しかし、すぐさま正気を取り戻すと、慌ててレイリアから距離を取ろうとした。

だが、王女はそんな奏多の頭をさらに強く抱き締めてきた。しかも、ただ抱くだけではなく――

「奏多さんは駄目なんかじゃありません。最低なんかじゃありませんから」

優しい言葉まで……。

それは心地良い歌声のようにも聞こえた。耳にしているだけでなんだか安心感を覚えてしまう。全身から力が抜けていくのを感じた。だからだろうか？　抵抗できなくなってしまう。自分の身をレイリアに任せるように、奏多は全身から力を抜いた。

「不安になってしまうのは当然です。違う世界に無理矢理召喚されてしまったんですから。だから自分を卑下するようなことは言わないでください。奏多さんは何も悪くありませんから」

囁いてくるだけじゃない。優しく頭を撫でたりもしてくれた。

「それに……その……確かに夏凛さんは貴方に何か隠しているかもしれません。でも、それでも大丈夫ですよ。だって貴方達は恋人同士なのでしょう？　だから大丈夫。夏凛さんは貴方を傷つけるようなことなんかしませんよ。夏凛さんは貴方のことが本当に好きなんですから」

重ねられる言葉。それが胸に染み込んでくる。抱いてしまっていた不安が和らいでいくのを感じた。

「ありがとうございます」

「御礼の言葉なんかいりませんよ。貴方は私にとって大切な人なのですから」

大切な人。大切な友達――そう思ってもらえることが本当に嬉しかった。

＊

（奏多さんの不安そうな顔は見たくありません）

それがレイリアの本心だった。

奏多が不安そうにしていると自分の胸まで締め付けられるように痛んでしまうから……。

レイリアにとって奏多は特別な存在だった。

最初出会ったときはそれほど強く彼を意識することはなかった。だが、あのとき――魔族の攻撃から奏多によって庇われたときから、自分自身の中で彼は誰にも代えがたいものに変わったのだ。

（奏多さんにとって私は最悪な存在のはずなのに）

奏多には元の世界に守らなければならない大切な家族がいたという。そんな家族達から彼を引き離してしまったのはレイリア自身だ。恨まれても仕方がないと思っている。それなのに奏多は自分の命を省みずレイリアを救ってくれた。そのうえ、自分を憎むことなく友人のように接するなんてことまで。

王女としてこれまで生きてきた。だから友人などいなかった。誰もが自分を特別な存在だと見なしていたから。だが、奏多は違った。それが嬉しかった。命を救ってくれた。友人になってくれた――そして気がつけば自分の中で特別な存在に……。

ただ、だからといって彼と恋人同士という関係になるつもりはなかった。何故ならば奏多には恋人――夏凛がいたから。それにレイリアは王女だ。王女は国のために生きなければならない。個人の意思で生きてはいけない。それが特別な存在として生まれた者の定めであり責任だからだ。

当然彼に思いを伝えるつもりはない。

（でも、それでも……奏多さんの力になりたい。だから……）

自室にて曇り一つない水晶を取り出すと、魔力を発動させた。溢れ出す力に反応するように水晶がぼんやりと輝きを放つ。それと共に水晶内部に映像が映し出された。ジェイドと夏凛がいる講義室の映像が……。

「……っ」

それを見た瞬間、レイリアは硬直した。

『さぁ、腰を振ってください』

『分かってる……んっく……ふううっ……んっんっ……んあっ……あっふ……んふううっ』

繋がり合っていた。夏凛とジェイドが。

椅子に座ったローブ姿のジェイドに全裸の夏凛が跨がっている。剥き出しになった秘部。そこに勃起したジェイドの肉槍が突き立てられていた。

ギッギッギッと椅子を軋ませながら夏凛は腰を振る。肉壺全体を使ってペニスを扱いていた。

時折漏れる『あっあっあっ』という声。それは普段の夏凛という名前通りの凛とした姿からは想像もできないほど女を感じさせるものだった。

水晶を通してバチュンッバチュッッバチュンッという音色が聞こえてくる。音色に合わせて揺れ動く張りのあるヒップ。その動きは見ているだけでもなんだか身体が熱くなってしまいそうなくらい淫靡なものだった。

トロトロとした愛液が結合部から溢れ出しているのが分かる。ピンク色に染まった夏凛の肌。溢れ出す汗――濃厚な牝の香りまで容易に想像できてしまうくらい、淫猥な光景だった。

『出しますよ』

『……勝手にしなさい……んんんっ』

『ふふふ、では……』

楽しそうにジェイドは笑う。それと共に彼は自分から腰を突き出した。ドジュンッと根元まで肉槍を蜜壺に挿入する。

『んぁああっ！　深いっ！』

夏凛の瞳が見開かれた。それと共にジェイドはブルッと身体を震わせた。射精しているのだろう。

著者近刊　『奴隷の私と王女様～異世界で芽吹く百合の花～』『孤独なビッチ　異世界風俗のモン娘とエルフと魔王和え』『ムッツリ女騎士、悪魔♂に転生す』、二次元ぷち文庫でも『魔法少女テッカメン！』など公開中！　好評発売中！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/